2013 年度

現代日本語における「形式名詞＋ダ」型モダリティの記述

―その否定的形式を中心に

千葉大学大学院

人文社会科学研究科

博士後期課程

張　昕

凡例

1. 本稿における引用・参考した論文は、著者の姓の五十音図順で示す。同一著者の文献は出版年順に配列する。

2. 章・節・項は原則としてアラビア数字で示す。例えば、「1.1.1」は「第1章第1節第1項」を指す。

3. 本稿に用いられる用例は、コーパスから採用したものが大半を占めているが、適切な用例が見つからない場合、適宜文献を参照し引用することがある。この場合、引用した用例の横に出典を明記する。ただし、特に出典を示さないものは筆者による作例である。例文の文法的妥当性はすでに日本語母語話者のチェックを経ている。また、本稿では用例が多いため、各章ごとに通し番号を初期化し、(1)、(2)、(3) …のように新たな番号に改める。図表番号も同様に扱う。

4. 注は、章ごとに番号をつけ、各ページの下部に示す。

5. 本稿の考察で用いる言語形式に関する表記について説明しておく。本稿では例えば、「モノダ」という表記は「もんだ」、「ものです」、「ものである」などの変異形を含む総称として用いられる。

6. 用例の文頭につけた「＊」、「？」、「＃」は、それぞれこの用例が文法的に不適格であること、文法的に不自然であること、この用例の成立が前後の文脈・発話場面に依存することを示す。

目 次

1. 序論 5
1.1. 問題提起 5
1.2. 先行研究と問題点 5
1.2.1. 「形式名詞＋ダ」型モダリティ 5
1.2.2. 「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定 14
1.3. 本稿の目的・考察対象及び研究方法 17
1.3.1. 本稿の目的 17
1.3.2. 本稿の考察対象と研究方法 18
1.4. 本稿の構成 19
2. 「モノダ」とその否定 21
2.1. はじめに 21
2.2. 「モノダ」の意味・用法 22
2.2.1. 「モノダ」の意味に関する記述 22
2.2.2. 〈本質・傾向〉を表す「モノダ」 23
2.2.3. 〈当為〉を表す「モノダ」 24
2.2.4. 〈回想〉を表す「モノダ」 26
2.2.5. 〈感心・あきれ〉を表す「モノダ」 28
2.3. 「モノダ」のまとめ 34
2.4. 「モノデハナイ」という形式 34
2.4.1. 「ナイモノダ」と「モノデハナイ」について 34
2.4.2. 「モノデハナイ」の意味・用法 37
2.5. 本章のまとめ 40
3. 「コトダ」とその否定 41
3.1. はじめに 41
3.2. 名詞述語文の「コトダ」 41
3.3. 助動詞的な「コトダ」文 44
3.3.1. 非対話文における「コトダ」 44
3.3.2. 対話文における「コトダ」 47
3.3.3. 「コトダ」文の意味・用法 48
3.4. 「コトダ」の否定 50
3.4.1. 「コトハナイ」という形式 51
3.4.2. 「コトハナイ」の統語的特徴 52
3.4.3. 行為者の人称制限 53
3.4.4. 「コトハナイ」の意味・用法 55
3.5. 本章のまとめ 58
4. 「ワケダ」とその否定 60

4.1. はじめに 60
4.2. 「ワケダ」の意味・用法 60
4.2.1. 事態間関係の把握を表す「ワケダ」 62
4.2.2. 事態間関係の提示を表す「ワケダ」 65
4.2.3. 「ワケダ」の派生用法 66
4.2.4. 「トイウワケダ」と「ワケダ」の違い 69
4.3. 「ワケダ」の否定 75
4.3.1. 「ワケデハナイ」の意味・用法 76
4.3.2. 「ワケガナイ」の意味・用法 80
4.3.3. 「ワケデハナイ」と「ワケガナイ」の違い 82
4.4. 本章のまとめ 83
5. 「ハズダ」とその否定 84
5.1. はじめに 84
5.2. 「ハズダ」の意味・用法 84
5.2.1. 現実が確認されていない場合 85
5.2.2. 現実と認識が一致しない場合 87
5.2.3. 現実と認識が一致する場合 89
5.3. 「ハズダ」の否定 90
5.3.1. 「ハズガナイ」の意味・用法 91
5.3.2. 「ハズガナイ」の他形式 95
5.3.3. 「ハズデハナイ」の意味・用法 96
5.4. 「ハズガナイ」と「ハズデハナイ」の違い 99
5.5. 本章のまとめ 100
6. 結論及び今後の研究課題 102
6.1. 「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定のあり方 102
6.2. 「形式名詞＋デハナイ」型否定と「形式名詞＋ガナイ」型否定の違い 107
6.3. 今後の研究課題 109
【参考文献】（五十音図順） 111
謝辞 120
既発表論文および口頭発表との関係 121
【用例出典】 122
【用例集】 130

1. 序論

1.1. 問題提起

従来、文末モダリティ表現に関しては、「ハズダ」、「ワケダ」といった「形式名詞＋ダ」型モダリティを対象に詳しい記述が進められてきている。しかし、今までの研究のほとんどは肯定を中心としたものであり、否定に関しては「ハズガナイ」と「ハズデハナイ」などのような形式の異同や、これらの二形式の差異が生じる原因を扱ったものがわずかに見られるだけである[1]。

「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定[2]における形式は一様ではない。例えば、「ノダ」、「モノダ」の否定は、「ノデハナイ」「モノデハナイ」という「～形式名詞デハナイ」型一つであるのに対して、「ハズダ」、「ワケダ」の否定は、「ハズデハナイ」「ハズガナイ」、「ワケデハナイ」「ワケガナイ」という「～形式名詞デハナイ」型、「～形式名詞ガナイ」型の二つである。このように、同じ「形式名詞＋ダ」の形であっても、その否定における形式は様々であり、これらについて詳しく検討する必要がある。

1.2. 先行研究と問題点

1.2.1. 「形式名詞＋ダ」型モダリティ

助動詞的なものとする議論

日本語には「ハズダ」「ワケダ」「モノダ」「コトダ」など、「はず、わけ、もの、こと」といった形式名詞を含む文末形式が数多く存在する。これらの形式では、それぞれ、「もの」、「こと」といった形式名詞と、断定辞「だ」が結合されている点で形態的類似性を見せている。この種の文をどのような構造の文と理解してよいのだろうか。現在主流を占めているのは、「形式名詞＋ダ」全体で一つの「ムード」、つまり話し手が発話時における主観的な心的態度（例えば、推量、価値判断など）を表す助動詞のようなものとなっている

[1] 高橋（1975）、加藤（1994）、尾崎（2003）、岡部（2004）など。
[2] 本稿における「否定」は、その形式内部に「ない」が含まれるものすべてを指す。形態上必ず肯定形式と対称性を持つものという点において「否定形」とは異なる。つまり、形態上の否定形のみならず、形態論上の対称を持たない意味・用法上の否定的形式両方を意味する。

という考え方である。

寺村（1984）は、ガ／ノの交替[3]ができないことや底の名詞[4]の実質的意味が希薄になっていることから、「ハズダ」「ワケダ」「モノダ」「コトダ」のような形式を一語化したものと見て、品詞としては助動詞の一種として構文論の中で「説明のムード」と位置づけている。

益岡（1991）は、モダリティの枠組みにおいて、「ワケダ」は命題間の統合的関係に関わる説明のモダリティ、「モノダ」「コトダ」は価値判断を表すもの、「ハズダ」は真偽判断を表すものとして、別々に分類している。

日本語記述文法研究会（2003）は、評価・認識・説明・丁寧さ・伝達という五区分に表現類型を組み合わせた表にまとめており、「ハズダ」は認識のモダリティ、「ワケダ」「ノダ」は説明のモダリティ、「モノダ」「コトダ」は評価のモダリティと位置付けている。

以上のように、研究者の間では、「形式名詞＋ダ」モダリティの下位分類で差異が生じているが、意味論の観点から助動詞的なものとして扱うという点においては共通している。しかし、次の「モノダ」と「コトダ」の例から分かるように、名詞性が色濃く、助動詞とは言い難い用法もあわせて存在するのである。例えば、(1) (3) は名詞性を持つ用法、(2) (4) は助動詞的な用法である。

(1) 自動販売機は便利なものだ。（作例[5]）

(2) 昔はよくこの公園で遊んだものだ。

(3) 一番大事なことは、まっすぐに生きることだ。（山本有三『路傍の石』）

(4) 夏はとにかくよく休みを取ることだ。

また、「ハズ」の場合は、「来るはずの人」の形のように連体修飾として用いられ、「ハズガナイ」に前接する節の中でガ/ノ交替の現象が見られるため、「ハズ」の名詞としての性格が強く残っていると言える。

(5) この場合のような、だれが見たって、不都合としか思われない事件に会議をする

[3] 「ガ／ノの交替」は、連体節における主語に後接するガをノに交換できることを指している。
[4] 「底の名詞」は寺村（1984）の用語であり、連体節の主名詞を指している。
[5] 特に出典を示さないものは筆者による作例である。例文の文法的妥当性はすでに日本語母語話者のチェックを経ている。

のは暇つぶしだ。だれがなんと解釈したって異説の出ようはずがない。（夏目漱石『ぼっちゃん』）

このように、「モノダ」「コトダ」などが、初めから助動詞に類する一語のようなものであったわけではない。また、「ワケダ」「ハズダ」などの形式は意味的・機能的には既に助動詞化しているにもかかわらず、底の名詞はある程度名詞性が保たれていると判断できる。したがって、こうした表現を最初から助動詞的なものとして扱うのは、統語論的には何か大切なものを見落とすおそれがあるだろう。

名詞述語文とする議論

「ノダ」のような文末モダリティを名詞述語文の一種とする考え方は、山口（2005、2008、2010）において中心的議題として主張されている。山口（2011）では、これまでの研究成果を「『のだ』の文とその仲間」にまとめ、「ノダ」「ハズダ」「ワケダ」「モノダ」「コトダロウ」などの文について、その構造と意味を考えた上で、これらの表現は、本来「連体修飾節＋形式名詞＋ダ」という名詞的述部を持ち、全体として「ＸはＹだ」の構造を内在させた広義の名詞文と主張している。

重見（1994、2003、2004）は、「ノダ」「ワケダ」「ハズダ」「モノダ」のような表現は本来そのプロトタイプを「ＸはＹだ」と想定し得る、この四つの文末表現の名詞述語性を主張している。

中川（1998）は、「ワケダ」「ハズダ」「コトダ」「モノダ」「ノダ」のような表現を対象として、「Ｘは、A＋形式名詞＋だ」[6]表現の構造と機能を考察し、以下のような仮説を提示している。

a)　「形式名詞＋だ」表現は、形式名詞の直前にかならず叙述内容（以下 A と呼ぶ）が上接し、「A＋形式名詞＋だ」という表現を形成する。形式名詞は上接の叙述内容を一つの範囲におさめようとする範疇化の機能を持つ。

b)　「A＋形式名詞＋だ」という表現は、文末に判定詞「だ」を持つという性質から、「Ｘは」という表現を本来持っていると考える。ただし、「Ｘは」は、同一文中

[6] 「X」「A」は、それぞれ「主題」、「形式名詞の直前に来る叙述内容」を指す。ただし、中川（1998）は主題が顕現することもあれば、潜在することもあると述べている。

に顕現することもあれば、潜在することもある。

c)　「Ｘは」の係り助詞「は」は、問いかけの働きを持つという考えにたつ。「Ｘは」は、Ｘに関する自問を表す部分、それに対する「A＋形式名詞＋だ」は自答をあらわす部分という捉え方である。（中川 1998：P1－2）

さらに、益岡（2007：104）では、統語的な観点から出発し、「拡大名詞文」という名称の下、次のような構造が定義されている。

ＸハＹ｛ ノ／ワケ／コト／モノ ｝＋ダ　（Y の部分に述語を取る）

つまり日本語には説明のモダリティとして「ノダ」、「ワケダ」、「コトダ」、「モノダ」という四種類があり、その構造化をしたと言える。

以上のように、「形式名詞＋ダ」型モダリティを構文論の観点から本来名詞述語文の構造を持つと主張する議論を見てきた。確かに、「コトダ・モノダ」文には「ＸハＹダ」という主述構造が見られることは事実である。例えば、

(6)　ある日気づいたのは、急にお腹がペシャンコになったことだ。（小出和子『おばあちゃん、お月さんきれいね』）

(7)　時計は電池で動くものだ。（北村2005：76）

しかし、他方ではむしろ多くの場合、主題を補うことができない。

(8)　自分の思い通りに他人を動かそうと思ったら、まず相手に信頼を示すことだ。（藤本ひとみ『ブルボンの封印』）

(9)　よくここまで頑張ってきたものだ。

さらに、「ハズダ」・「ワケダ」文はそもそも主述構造をなす文が成立しない。

(10)　天気が悪かったら、運動会が中止になるはずだ。

(11)　（窓が開いているのに気付いて）なるほど、寒いわけだ。

このように、すべての「形式名詞＋ダ」型モダリティ形式に名詞述語文の構造をあてはまるわけではないと思われる。

形式名詞の文法化

前述するように、「モノダ」のような形式を完全に「助動詞的なもの」として研究を進めてきたアプローチもあれば、「名詞述語文」として扱った研究もある。最近では、形式名詞の文法化[7]という考え方が注目されている（山梨(1995)、日野(2001) など)。日本語の「もの」、「こと」という名詞は、語彙的意味を持つ名詞としての用法と、語彙的意味が薄れ、接続助詞や助動詞の一部として機能する形式名詞としての用法を持っており、これらの「もの」、「こと」の用法は連続していると考えられる。また、「モノダ」、「コトダ」だけに限らず、「ワケダ」「ハズダ」などは形式名詞と断定辞「ダ」が合わさることによって新たな意味を獲得する現象も同様であり、これらは典型的な文法化と位置づけられている。

まず、「モノダ」の文法化について、田辺(1998) は、Traugott の文法化理論[8]によって、「ものだ」の諸表現を、名詞「もの」の用法が「外的描写」から「内面描写」へと向かい、さらに機能語的な用法としての「文脈化」、そして助動詞的な複合辞や終助詞としての「主観化」という文法化の流れとしての観点から論じている。その結論を以下のようにまとめている。

田辺（1998）による「モノダ」の文法化の過程

(ｱ)　「物事一般」という意味があるか

(ｲ)　「モノダ」の用法において「モノダ」が使用される前の文章のどこかに、「モノ」が代行していると判断できる実質名詞があるか

(ｳ)　節と節、文と文をつなぐ役割が発生しているか

(ｴ)　助動詞化が進んでいるか

---

[7] 山梨（1995）は「文法化のプロセスには、一般に動詞や名詞に代表されるような実質的な意味をもつ内容語(content word)から助詞、接頭辞、接尾辞のような機能語(function word)へ変化していく傾向、即ち独立した単語として使われていた表現が次第に束縛された接辞的な表現に変化していく傾向が見られる」(P63) と述べている。

[8] Traugott（1982、1989、1991）によると、文法化は、はじめは命題的な意味を持つ意味機能論的な要素（components） としての内容語（第一段階）が、次第に副語節や関係詞節を導く機能語になり（第二段階)、さらに話し手の主観性も反映する要素（第三段階）へと展開するという。(田辺1989：52より)

(ｵ)　助動詞化の中でも説明・解説のためのものか

(ｶ)　感情表現となる終助詞化が進んでいるか　（田辺 1998：53）

田辺（1998）の解釈によると、第一段階の命題的段階（（ア）、（イ））では、「モノ」は名詞句の主要部となっていて、「物事一般」という抽象的な意味をまだ担っている。そして、「モノダ」の用法においては、「モノ」が代行する実質名詞が同文内にあるという。

(12) 創造は、考えるものではなく、やってくるものだというのがぼくの意見だ。（『読売新聞1997．8．10』田辺1998：53）

第二段階の文脈化段階（（ウ）、（エ））では、「モノ」の辞書的意味は、既に失われ、接続助詞「モノノ」のように、節と節を結びつける機能を持っていたり、「モノ」の用法の中で、説明・解説をする「モノダ」のように、文を超えて文脈を整える役割を果たしている。この場合、代行する名詞が文中に明示されていない場合や、前の文章で触れられていることがよくある。

(13) 熱はさがったものの、まだ仕事には出られない。（田辺1998：54）

(14) 心の底には、丸で歯牙にも掛けずに、云わば人を馬鹿にして居たようなものです。（『福翁自伝』田辺1998：55）

第三段階の主観化段階（（オ）、（カ））では、話者の価値判断や感情を伝える独立した表現として、主観性が強まっている。このため、助動詞化した「モノダ」によって感動や詠嘆をあらわす表現や、終助詞としての用法が現れる。（以上田辺1998：53－61より）

(15) 二人とも大きくなったものだ。（『桜の実の熟す頃』田辺1998：61）

「わけ」の用法の拡大の順序に関して、宮地（2007：13－14）は、次のように説明している。

a)　「ソノワケ・コノワケ」といった実質的、指示的名詞の用法に始まり、

（16）ソコデ人の腹の中も天腹の外も同じ天なれど、腹の中の天は性と名付けてある。是は少と様子のある事なれば、其わけは跡で知れる。(『道二翁道話』宮地2007：13)

b)　「～ワケガアル/ナイ」といった抽象的・範疇的意味の用法の非存在文主語位置での定型表現を経て、

（17）清兵「コレ/善六、お染が聟の清兵衛は、此油屋の世績ギじゃないか。調布子供に親方が、顔よごされるわけがござりますわい。(『お染久松色読販』宮地2007：14)

c)　「～＋ワケダ」の述語に立つ用法に至っている。

（18）所詮この山寺についまでいたとて、国に帰られるわけでもなし、和尚のつらくせはわるし、身のまはりはうすし、イツソこんや今夜たちのく退が上分別じゃと、(『鳩翁道話』宮地2007：14)

つまり、宮地（2007）は「わけ」の変化を中心に見ることによって、その変化が連体修飾節の指示性（個別・特定の事態か、不特定・一般的事態か）の拡大によるものであると推定している。このように、古代語から現代語への変化の中で「ワケダ」が文末の助動詞用法を獲得したと考えられる。

「ハズダ」について、菅（2004）は1600年代初頭から1800年代後半までの近世期資料に現れる「はず」を調査し、実質形式「はず」がモダリティ形式「はずだ」としての用法を確立していく過程を論述した上で、「はず（だ）」の変遷を次のようにまとめている（P190－199）。

第1期：具象物指示名詞だった「はず」が抽象的概念をも表すようになる。

(19) 但、計会方二漏レタラバ、万ノコトミナ筈ガチガイ、首尾がアハズチガフモノナリ（すべてのことがうまくいかず）（『本福寺跡書』菅2004：191）

第 2 期：活用語が前接する「はずだ」が出現し、モダリティ形式としての用法を確立する。

(20) 親の人体は、その子を生ずる前に数年の間生きておるはずでござる。ラテン語対訳文［父親は子どもをもうける以前に、子供先立って長い年月生きている必要があります。］（『懺悔録』菅2004：193））

第 3 期：口語表現としての「はずだ」がさかんに使用される。

(21) 天竺の運気を日本にて用ゆべき筈にもあらず。（日本で使う可き道理でもない）（『町人嚢』菅2004：197）

第 4 期：「はずだ」が口語表現という位相を離れ、使用場面を拡大する。

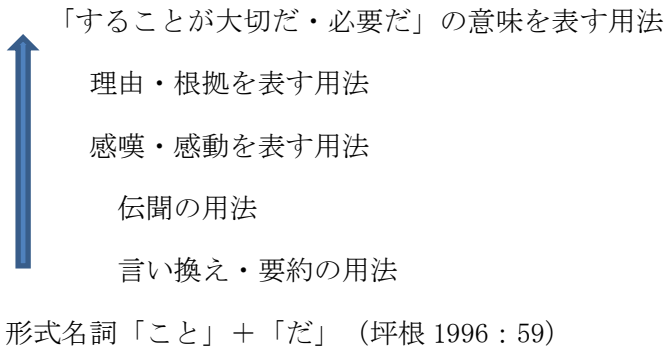
(22) 実地にて夷賊驕傲の振舞を見候ては、いかまさ右様も存候筈、（なるほど右のように思うはずだ）（『徳川斉昭：十条五事建議書』菅2004：199）

「コトダ」文について、坪根（1996）は、「ことだ」のモダリティは「ＸはＹだ」という構文の「Ｘは」の部分は話し手･聞き手双方が認識可能な場合に省略され、「こと（だ）」はその省略された主題に対応するものとして存在すると主張している。また「ことだ」の各用法はその主題の復元のしやすさの程度に差があり、その程度によってそのモダリティ度[9]にも違いがあるという仮説に従い、検証を行った。考察の結果、言い換え･要約の用法―伝聞の用法－感嘆･感動を表す用法―「～することが大切/必要だ」の意味を表す用法、理由･根拠を表す用法の順で助動詞化が進み、これらは形式名詞「こと」「だ」から助動詞化した

[9] モダリティ度は、坪根（1996）は今井（1992）の研究を参照したものであり、モダリティ形式が過去形・疑問形・否定形になるか、従属節のなかに収まるか、接続助詞への接続の仕方でモダリティ度の高低を測るということである。

「ことだ」への連続した線上に点在することを明らかにした。

図 1 助動詞化した「ことだ」



さらに、角田（2012）は形式名詞が現れる人魚構文[10]が持つ意味・働きの大部分は、モーダルな意味であり、形式名詞が人魚構文に現れる場合には、元々の意味は持たず、文法的な意味（モーダルな意味、アスペクト的な意味）または文体的な効果・働きを有すると指摘している。角田は形式名詞について、人魚構文で使った場合の意味とその名詞が現れる人魚構文が持つ意味・働きを比較して、表 1-1のように示している（P9）。

	名詞の意味	人魚構文の意味・働き
はず	予定、予期	a） 予定、予期
		b） 悟り
わけ	原因、理由	a） 理由
もの	物	a） 義務、助言
		b） 説明
		c） 過去の追想・習慣
		d） 驚き、強い感情
		e） 文体的な効果・働き
こと	事	a） 助言、指示、義務

表 1-1 角田（2012）形式名詞の意味と人魚構文の意味・働き（一部抜粋）

[10] つまり、「体言締め文」のことである。前半は動詞述語文であるが、後半は名詞述語文である点で、人魚の身体のように不統一であり、角田（2012）はこれらの文を「人魚構文」と呼んでいる。

一方、井島（2012）は「モノダ」のような形式名詞述語文の連体節構文に注目し、ある名詞が本来形成する連体修飾構造はどのようなものであるか、また、文末形式化することによってそこからどのように外れるのかへのアプローチ、つまり、連体節の体系に基づき、「形式名詞＋ダ」型モダリティの各形式を説明している。井島（2012）は、「モノダ」、「コトダ」は、文の統語論的な成立にあたって、名詞述語文の構成と文末辞化の段階という統語論的な過程を経ており、一方「ワケダ」文は名詞述語文の段階を経ず一挙に文末辞化が起こって「ワケダ」文が成立したと述べ、また、「ハズダ」文に関しても、いわゆる「XハYダ」という「主述構造説」では説明しきれないところがあると指摘している。

本稿では、「モノダ」のような形式をモダリティ形式を成立論の立場から考察する予定はないが、文法化という視点を取り入れて、「形式名詞＋ダ」型モダリティの品詞性を理解していきたい。つまり、形式名詞が文法化するとともに、その語彙的意味がどのように変化していくかを考察するつもりである。後述するように、これが「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定のあり方とも関連している。

1.2.2. 「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定

現代日本語のモダリティに関する研究はかなり進んでいるが、モダリティ形式がどのように否定と関わるのか、否定の研究自体が進んでいないとともに、大幅に遅れている。モダリティと否定との関係を考察した先行研究としては、中右（1979）や寺村（1979）などが挙げられる。

中右（1979）は、「モダリティは、命題あるいは相手に対する話者の、発話時という瞬間的現在における心的態度を表すのであるから、その本質について、モダリティが否定そのものであることはない」（P229）と述べている。すなわち、モダリティ形式自体には否定形がそもそも存在しないと解釈している。

寺村（1979）では、ムード形式[11]が否定となりうるかを調査している。先行するコト自体は、肯定否定両方が存在するが、モダリティ形式自体が否定にならないものとして、伝聞の「ソウダ」「ダロウ」、推定の「ラシイ」「ヨウダ」「カモシレナイ」などの形式が挙げられている。内外両方の否定を持つモダリティ形式として、「ハズダ」「ワケダ」「モノダ」「ノダ」「ツモリダ」「ソウダ」などを挙げ、否定が内側に来る場合とモダリティ

[11] 寺村の用語では「ムード」であるが、本稿では以降「モダリティ」に統一する。

形式自体が否定される場合との違いを詳しく考察している。（詳細は以下の表 1-2 を参照されたい)。

内　　外	肯定否定両形可能	肯定のみ	否定のみ
肯定否定両形可能	ハズダ、ワケダ、ノダ、モノダ、ツモリダ、（降ル）ソウダなど	ダロウ、（オイシ）ソウダ、カモシレナイなど	ドコロ（デハナイ）
肯定のみ	ベキダなど	トコロダ、バカリダ	

表 1-2　寺村（1979）ムード形式の否定

仁田(1999)はモダリティを真正モダリティと擬似モダリティの 2 つに分類する。「真正のモダリティとは、(1)過去になることもなければ(2)話し手以外の心的態度に言及するものでもないし、(3)態度そのものの非存在を表す否定になることもないものである」のに対し、「ハズダ」のような否定を持つモダリティは擬似モダリティであると位置づけている（P53）。

益岡（2007）は「ノダ」、「ワケダ」、「（トイウ）コトダ」、「モノダ」のような説明のモダリティ[12]の否定形式について考察し、その結論を以下のようにまとめている。（「肯」は肯定文で扱われている範疇、「否」は否定形式で扱われているものを示す）。

	叙述様式	事情	帰結	実情	当為内容	因果	立言
のだ	肯否	肯	肯否	肯否	肯否		
わけだ	否		肯否	肯		肯	肯
ことだ			肯否		肯		
ものだ		肯			肯否		

表 1-3　益岡（2007）説明のモダリティの否定形式

〈形式名詞Ｘデハナイ〉タイプと〈形式名詞Ｘガナイ〉タイプの否定の違いに関しては、

[12] 益岡（2007）の枠組みでは説明モダリティを、叙述様式・事情・帰結・実情・当為内容・因果・根拠のある立言という七区分が立てられている。

加藤（1994）では、「形式名詞＋判定詞」（「Ｘだ」）の形態を持つモダリティが「Ｘハナイ」[13]と「Ｘデハナイ」の二つの否定を持つことができる場合、「Ｘハナイ」は、人称制限がある場合には主に一人称の主語を持つ文に現れ、発話者の意志・実現が予想されること・論理的な帰結を否定する、発話者の主観的態度を述べる形式であるとしている。それに対し、「Ｘデハナイ」は、人称に関係なく、存在が前提とされている、意志・実現が予想されること・論理の帰結などの叙述（描写）の仕方を否定する形式である（P19）と指摘している。

田中（2004）は、〈Ｘデハナイ〉タイプは文全体の命題を否定するという指向性から〈文枠〉的な否定であり、〈Ｘガナイ〉タイプは底名詞を否定するという否定的特徴から、〈文核〉的な否定と意義付けることができると指摘している。また、否定の性格をめぐっては、〈Ｘデハナイ〉タイプは一般に事実・事態の成否関係をめぐる、むしろ客観性を含意する特徴が観察され、〈Ｘガナイ〉のタイプにはむしろ話し手の意志的、推量的なモダリティの性格があらわれ、主観性の高い特徴が観察される（P88－89）と述べている。

これまで見てきたように、「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定に言及している先行研究においては、いくつか異なった意見が示されている。モダリティを、話者の発話時における心的態度として、モダリティには否定を認めない立場（中右 1979）などもあれば、否定を持つものを擬似モダリティとして位置づける立場（仁田 1999）や、モダリティに否定を認めようとする立場（寺村 1979）などもある。また、同じく外の否定の形式として、「形式名詞＋ダ」（「Ｘだ」）の形態を持つモダリティが「～ガナイ」によるものと「～デハナイ」によるものの二つのタイプの否定は存在しており、この二形式の差異は、「存在の表現」の否定形式「Ｘガナイ」と「題目―解説文」の否定形式「Ｘデハナイ」との違い、つまり形式名詞Ｘの持つ名詞的性質に原因を求めることができる。（加藤 1994、田中 2004）。

しかしながら、加藤（1994）の研究は、個々の形式名詞[14]を中心とした考察であり、その結論はどこまであてはまるのかは再検討する余地がある。田中（2004）の研究は、本稿で扱う対象である否定文末表現の意味・用法の記述にとどまり、また田中が指摘している〈Ｘガナイ〉型否定について客観性の高い特徴と〈Ｘデハナイ〉型否定の主観性の高い特

[13] 加藤（1994）は、「コトハナイ」を「コトダ」の否定形式として認め、「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定形式には「Ｘハナイ」と「Ｘデハナイ」との二つのタイプがあると考えている。
[14] 加藤（1994）は「ツモリダ」の否定である「ツモリハナイ」と「ツモリデハナイ」を中心に考察した。

徴に関しては、より詳細なデータに基づきさらに考察を進める必要があると思われる。すなわち、「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定のあり方や「～デハナイ」型と「～ガナイ」型の二つのタイプの否定の違いなどの問題は、完全に解決されているとは言えないのが現状である。

1.3. 本稿の目的・考察対象及び研究方法

1.3.1. 本稿の目的

現代日本語には「もの」「こと」のように、極めて抽象度の高い概念を表す形式名詞という一類が存在する。これらの形式名詞は、文法的な役割という観点から見れば、次のように、格助詞を伴って述語の補語となる。

(23) 彼が来なかったことを知らなかった。
(24) こんなすばらしいものを見たのははじめてだ。

また、(25) (26)において、「節+コト/モノ＋ダ」という形式で助動詞化し、文末モダリティ形式となる。

(25) 健康になるためには、食生活に気をつけることだ。
(26) 赤ん坊は泣くものだ。（グループジャマシイ：594）

このように、形式名詞に断定の助動詞「ダ」が後続することによって新たな意味を獲得するとともに、前接する節が表す事態に対する話し手の主観的態度を述べるものとなっている。

これらのモダリティ形式は否定形（形態上の否定）を作る時に、「一般名詞＋ダ」と同様である場合もあれば、異なる構成となるもの、また形によって意味の異なるものなどもある。例えば、

(27) 人生は思う通りにいくものではない。

一方、(27) とは異なった否定的形式として現われるものものがある。例えば、「コトダ」[15]は「〜デハナイ」という否定形で現われることではなく、次のように「〜ハナイ」という形になる。

(28) あなたが心配することはない。

これらに対し、「ハズ」「ワケ」の場合、「〜デハナイ」と「〜ガナイ」の両方の形式を持っており、また否定の形によって用法の違いが見られる。

(29) 彼は今日のパーティーに来るわけがない。
(30) 花子が来るからといって、太郎が来るわけではない。
(31) （空を見上げて）雨が降るはずがない。
(32) （起動スイッチを押しても起動しない機械を前にして）おかしい。こんなはずじゃない[16]。（岡部2004：40）

このように、「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定における形式は様々である。肯定の場合は、同じ「形式名詞＋ダ」という構造を持ちながら、否定のあり方にはなぜこれほどの差異が生じるのかについて考察することは本稿の目的である。

1.3.2. 本稿の考察対象と研究方法

本稿では書き言葉[17]で頻繁に出現している「モノダ」、「コトダ」、「ワケダ」、「ハズダ」の四つの文末表現を対象とする。なお、「ノダ」文における「ノ」は従来「準体助詞」として扱われ、いわゆる形式名詞とは異なる振る舞いを見せており、また、「ツモリダ」に関しては、意志表現のカテゴリーに属するものとして、意味的には「モノダ」のような形式とは関連性が薄いため、本稿ではこれらを考察の対象から除外することにする。

研究方法としては、言語研究に多用されている記述の方法を採用する。言語現象の正確

[15] 先行研究において、必要を表す「コトダ」には否定を認めるかどうかについて意見が分かれている。これについて、第3章で詳しく考察する。
[16] 「ハズデハナイ」という形式が存在するが、これは肯定の「ハズダ」の否定として認めてよいかどうかは第5章で考察を行う。
[17] 話し言葉コーパスを入手することが難しいので、今回書き言葉コーパスから用例を収集することにした。

な記述のため、できるだけコーパスにおいて使用された用例を利用する。本稿に用いられる用例は、『現代書き言葉均衡コーパス　少納言』や『新潮文庫100冊』、『青空文庫』の三つのコーパスから採用したものが大半を占めているが、適切な用例が見つからない場合、適宜文献を参照し引用することがある。それから、用例の分析に基づき、本稿で考察する四つの形式の基本的意味を規定するとともに、そこから具体的な用法がどのように派生していくかを記述する。また、肯定形式と対照させる形で「形式名詞＋ダ」型モダリティ形式の否定的形式の意味・用法について整理する。最後に、類義の否定的形式（例えば、「ハズガナイ」と「ハズデハナイ」など）の意味の違いを明確にした上で、それぞれの否定的形式のモダリティ体系内における位置づけを行う。

1.4.　本稿の構成

本稿は六つの章によって構成されている。詳細は以下の通りである。

第1章　序論
第2章　「モノダ」とその否定
第3章　「コトダ」とその否定
第4章　「ワケダ」とその否定
第5章　「ハズダ」とその否定
第6章　結論及び今後の研究課題

第1章では、「形式名詞＋ダ」型モダリティ及びその否定について先行研究を概観した上で、本稿の目的、研究の対象・研究方法及び本稿の構成を示す。また、本論に入る前、「否定」及び「否定形」「否定的形式」といった用語の定義をしておく。

第 2 章から第 5 章までは、本稿で取り上げる「モノダ」「コトダ」「ワケダ」「ハズダ」の四つの形式の用例の分析に基づき、それぞれの意味・用法を整理する。次にそれと対応する否定の存否及び異なる否定的形式の差異を明らかにする。なお、第 2 章から第 5 章においては、考察内容が多いため、各章ごとにまとめを行うことにする。

第2章では、先行研究で助動詞的用法と呼ばれる「モノダ」文についての考察を通して、「モノダ」は、「一般的事態」と「個別的事態」の双方に関わる二重性を持つことを説明

できる。つまり、従来の解釈である〈本質・傾向〉、〈当為〉のように、観念の世界における事態の存在の仕方や〈回想〉のように、記憶内の事態の時間軸における〈一般性〉を付け加えるタイプと、〈感慨〉のように、眼前の一回性の事態を確定した存在として認めることによって、その個別の事態の裏にある〈一般性〉を暗示する二つのタイプがあることを示す。また、それと対照させる形で否定の「モノデハナイ」の用法を記述する。

第 3 章では肯定の「コトダ」の検討を行った上で、「コトダ」には否定が存在するかどうかについて考察する。「コトダ」自体の否定形は「コトデハナイ」であるが、この形式が使われることはなく、「コトハナイ」という形式が用いられている。形態上の対応を持たない「コトハナイ」という形式は、意味上「コトダ」の否定的形式として扱う妥当性を論じる。

第4章では、〈二つの事態間に必然的関係があることを認める〉という基本的な意味を持つ「ワケダ」の用法を確認する。次に、否定の「ワケデハナイ」と「ワケガナイ」の意味・用法を整理する。さらに「～形式名詞Ｘデハナイ」と「～形式名詞Ｘガナイ」という観点から「ワケデハナイ」と「ワケガナイ」の違いについて論じる。

第5章では、「ハズダ」で表される事態の現実世界におけるリアリティという観点から用例を分析し、「ハズダ」の意味・用法を記述した上で、否定としての「ハズガナイ」、「ハズデハナイ」と肯定の「ハズダ」との対応関係を考察する。

第 6 章では、本稿における議論を総括し、今後の課題を述べる。

2. 「モノダ」とその否定

2.1. はじめに

文末に用いられる「モノダ」は、同じ形をしている場合でも文法的意味では二種類に区分されている。例えば、

(1) これはじゃがいもの皮をむくものだ。(寺村1984：298)
＊これはじゃがいもの皮をむく。

用例 (1) は、名詞述語文に分類されるものであり、文末の「もの」は主題名詞の代用語として用いられているので、文末の「もの＋だ」を取ってしまうと主題について説明する文としては不自然な文になる。これで、(1) における「もの」は命題内容の構成に関わる要素として存在し、「だ」はモダリティ要素として機能することが分かる。このような「ものだ」を本稿では考察の対象としない。それに対して、次の例を見てみよう。

(2) 人生は分からないものだ。
人生は分からない。
(3) 昔はよく図書館を通っていたものだ。
昔はよく図書館を通っていた。

(2) と (3) では、文末の「モノダ」を伴わなくても、文成立に直接影響を及ぼさない。したがって、このような「モノダ」は構文の中で命題の構成要素として働かないこと、そして一つのモダリティ形式として機能することを示している。

さらに、次のような場合もある。

(4) やっぱり日本一はすごいもんだな、と感心しました。(片山晋呉『主役』)

(4) は、形態上 (1) (2) と同じであるが、代用語の「もの」か、モダリティ形式の「モノダ」かを、どちらとも捉えられる中間的なタイプが見られる。つまり、「もの」を実質

的名詞に変えることはできるものの、「もの＋だ」より特別の意味あいを認められる場合は、中間的であっても、モダリティ形式の「モノダ」として扱うことができる。

2.2. 「モノダ」の意味・用法

2.2.1. 「モノダ」の意味に関する記述

先行研究では、「モノダ」の意味について以下のような指摘がある（寺村 1992、坪根 1994、井島 1998、尾方 2000 など）。

寺村（1992：87）は、「「……モノダ」は、ある対象を大きくモノに属するものと類別し、修飾部「……」でそれを特定するという形であるが、その修飾部が単なる特定・限定という範囲を超えて、「一般に（主題となっているあの特定の対象が）こういう性格・本性をもっている」という主張の、その性格・本性を表すように使われることが多い」と述べている。

坪根（1994：66）は、「ものだ」の中心的な意味について以下の仮説を示している。

「「ものだ」の意味は、ある主題についてはそれは「一般的にこういう存在だ」とする、わかりやすく言えば、前接する命題について「一般的にこうだ」ということを、話し手の意思・判断として相手に訴えかけることである。」

井島（1998：11）において、形式名詞と形式名詞述語文の対応が示される。すなわち、形式名詞モノの持つ①物品性、②間主観性（客観性）、③不変性という特徴が、形式名詞述語文となると、①の物品性は維持できずに事態性に変わるが、②の間主観性（客観性）は受け継ぎ、③の不変性は事態に関わるものとして普遍性・汎称性・一般性となる。

尾方（2000：2）は「「もの」は、ある在り方をしつつ存在するということを「認める」ことを前提とした表現である」と考えている。（ここまで傍線が筆者によるもの）

以上の研究を参考とし、本稿では、「モノダ」の基本的意味を、「ある命題内容について、それが一般的に存在していると認める」形式であると規定する。「モノダ」用法に関しては、日本語文法記述文法研究会（編）（2003）に従い、〈本質・傾向〉〈当為〉〈回想〉感心・あきれ〉という四つのタイプ[18]に分けて考察していく。

[18] 「説明・解説」のモノダ文には、モダリティ的要素が含まれていないとされているため、考察の対象から除外する。

2.2.2. 〈本質・傾向〉を表す「モノダ」

「もの」の文末にける用法の中心は、「P は Q ものだ」において、主題 P について一般的に Q という属性を有する、ということを主張すると思われる。「一般的」とは、坪根(1994)は、「時間軸のある一点をとった場合、あるグループ内の個体間に同一性・類似性があることと、その一つ一つの個体を捉えた場合、一回性のものではなく、時間軸に沿った繰り返し・継続性を持つ」(P69) ことと定義している。例えば、(5b) では、モノダがつかない場合、「花子は遅れてこない」が後接不可能であることから分かるように、「女性」という対象について、「デートに遅れてくるのが一般的である」という意味になる。言い換えれば、モノダが付いた場合は、例外的存在を認めた上で一般性 (坪根 1994) を述べている。

(5) a女性はデートに遅れてくるものだが、花子は遅れてこない。(籾山1992：20)
b＃女性はデートに遅れてくるが、花子は遅れてこない。

いわゆる「本質・傾向」は、複数の事物・事象から抽出されるものであるから、主題が総称名詞に限られる。

(6) 「山は自分の体で登るものだ。他人に頼らないし、他人との比較ではできない。」(山本素子『医師・登山家今井通子』)

(7) なにかおつまみを食べて、歯にものが引っかかっても、女性はひと前で歯をほじくったりできないものだ。(栗栖十三『週末バーテンダーのすすめ』)

(8) 学習とは、もとより、信じることから始まるものだ。(村瀬学『『銀河鉄道の夜』とは何か』)

(9) 咳というのは、ひどく体力を消耗するものだ。毎晩毎晩、青い顔をして激しく咳をしていたのが、最近やっと落ち着いてきた。(結光流『鏡の檻をつき破れ』)

例えば、(6) は「山は自分の体で登る」という命題内容について、話し手はそれを一般的な真理として認めている。さらに言えば、その命題の正しさについて話し手だけでなく、一般論的、客観的にも認められている。そのため、(9) のように主題を個別・具体

名詞に変えると不自然になる。

(10)＊この山は自分の体で登るものだ。

また、「もの」にかかる語も、「モノダ」自体も、終止形をとることに注目したい。〈本質・傾向〉を表す「モノダ」文には、主題の総称化、修飾節における内容はある特定の時間において一回的に生起するものではなく、その対象が持つ性質あるいは反復的に起こる事態といった持続的な概念である点に共通する特徴がある。

しかし、〈本質・傾向〉を述べるモノダ文において、主題Pは一般性の高い総称名詞だけではなく、広い意味での条件表現（「～なら/ときは」）が現れる場合もある。この現象について、ある条件がそろえば、「モノダ」の前に来る命題内容が一般的な存在として成立するという話し手の主張を表していると考えられる。

(11) 今どきの若者の部屋なら、たいてい何か音楽でも聞こえているものだが、今は物音一つしない。（赤川次郎『女社長に乾杯!』）

(12) 五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。（宮地裕ほか『国語2』光村図書出版株式会社2005）

2.2.3. 〈当為〉を表す「モノダ」

〈当為〉は、通常、「当然あるべきこと、当然なすべきこと」の意である。〈当為〉を表す「モノダ」は、多くの先行研究で指摘されたように、〈本質・傾向〉の用法からの語用論的拡張として位置付けられている。

野田（1995）では、「モノダ」の当為用法について、「話し手は、ＸであればＹという行為を実行することが望ましいという一般的な通念を「ＸはＹモノダ」といった形で大前提として提示することによって、間接的に、当該の場面での聞き手がその行為を実行することを促す」（P 257）としている。また、野田が三段論法を用いて当為を表す「モノダ」を以下のように分析している。

(13) 祭りの前の晩は早く家に入るもんだ。

a. 祭りの前の晩は早く家に入るものだ。・・・・・・・・・・・・大前提

b. 今は祭りの前の晩だ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小前提

c. 今、聞き手は早く家に入ることが望ましい。・・・・・・・・・・結論

（野田1995：257）

（13）で分かるように、いわゆる当為は、話し手だけの認識ではなく、「理想的なあり方」として認められている社会の一般的な規則、一般的な認識を表す。そして、聞き手が存在する場合、一般的な認識を背景にして、そのような状況下で、聞き手はその行動を取ることが一般的に望ましいと伝え、結果的に相手の行為の実行を促すこととなる。言い換えれば、当為の「モノダ」は、本質・傾向の「モノダ」を前提にして、はじめて当為を表すと考えるのが妥当であろう。例えば、話し手の直面している、一般的な認識に反する個別的な事態（「辞退―もらう」「いたずら―女の子らしくする」など）が存在する（14）（15）の場合、「モノダ」文を発話することによって、話し手は、聞き手に当該行為の実行を促す機能を持つようになる。

（14）「いいえ、私はたくさんです」と省吾はいく度か辞退した。「そんな、君のような―」と丑松は省吾の顔を眺めて、「人があげるって言うものは、もらうもんですよ」（島崎藤村『破戒』）

（15）「これ、お作や」と細君の児を叱る声が起った。「どうしてそんないたずらするんだい。女の児は女の児らしくするもんだぞ。ほんとに、どいつもこいつもろくなものはありゃあしねえ。自分の子ながら愛想がつきた。見ろ、まあ、進を。お前たち二人よりよほどお手伝いする」（島崎藤村『破戒』）

しかし、〈当為〉の意味が〈本質・傾向〉から派生するものだとしても、〈本質・傾向〉を表す「モノダ」がすべて〈当為〉の「モノダ」になりうるわけではない。ここでは、「モノダ」が当為の意味として解釈される条件について、高梨(2006)の研究を参考したい。高梨(2006)では〈当為〉の解釈の条件として以下のようなものが挙げられている。

① 当該事態が一般的に、もしくは、その場面において望ましいものである。

② 行為者の意志によって実現可能な事態である。

③ その場面で問題になっている個別の行為者が当該事態を実現していないとい

う状況がある場合、当為と解釈されやすい。(P6)

まず、当該事態が望ましいものであるかどうかについて、

(16) 病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感ずるものだ。(山本周五郎『将監さまの細みち』寺村1984：298)

(17) 病人はおとなしく寝ているものだ。(寺村1984：300)

(16) は、当該事態「病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感ずる」は一般的な望ましいこととは考えにくいため、当為の意味にならない。それに対して、(17) は「ベッドで寝ていない」患者に対して、相手への働きかけを意識して、「あなたは病人なので、おとなしく寝ていることが望ましいから、寝るべきだ」という当為の解釈ができる。

そして、〈本質・傾向〉とも〈当為〉とも考えられる (19) に対して、(18) の場合、「自然に育つ」という事態が行為者の意志で選択できないため、当為の意味にならず、単に一般的傾向性を述べている。

(18) 子供は自然に育つものだ。

(19) 子供は早く寝るものだ。

さらに、同じ意志動詞「遊ぶ」は、文脈によって二通りの解釈ができる。当該の事態がまだ実現されていない場合、当為の意味になりやすいが、そうでない場合は本質・傾向を表す意味になる。

(20) a「あの子は外で遊んでばかりで…。色が黒くなるじゃない。」

「子どもは外で遊ぶものだ。仕方ないよ」

b「お前はテレビゲームばかりして……。外で遊びなさい。子どもは外で遊ぶものだ」(坪根 1994：68)

2.2.4. 〈回想〉を表す「モノダ」

〈回想〉を表す「モノダ」は、〈本質・傾向〉や〈当為〉とは異なって、「モノダ」の前に来る内容は発話時点以前に成立している既定の事態であって、話者にとっては認識済み

のことでもある。しかし、これは単なる回想とは異なり、「私はかつて一度だけ懐石料理を食べたものだ」は不自然であり、「子供の頃よく懐石料理を食べたものだ」のように、一回性のことではなく、持続的に繰り返されるものでなければならない。このような〈回想〉の用法は「過去における一般性の回想」とも言える。

(21)昔の日本ではスイカは八等分ぐらいに切って、かぶりつくか、スプーンで食べたものだ。（武藤直路『スタイリストになるには』）

(22)「昔のひとは実にゆかしいことをしたものですね」と、汽車の窓から花を見て、有島は大佛次郎に教えてくれた。（福島行一『大仏次郎』）

しかし、(22) と (23) を比べると、主題が総称名詞であるか個体名詞であるかの違いが見られる。これに関して、坪根 (1994) は、「私という個体について時間軸に沿って見ると、「過去の私にとって、それが継続的な状態だった」という継続性があり、「もの」の持つ一般性は含まれていると見ていい」(P71) と考えている。つまり、回想を表す「モノダ」には時間軸上の一般性を含んでいるが、主題が総称名詞のような一般性の強い場合もあれば、主題が個体名詞のような弱い場合もある。そして、(25) のように、「モノダ」自体は「モノダッタ」となる形もあり、意味的にはほとんど変わらない[19]。ただし、過去の状況がそれに対応する現在の状況と対照的である時、回想に伴う「感嘆」の側面が強く感じられる。

(23)昔、よくこの道を歩いたものだ。（ジョギンダー・パウル/工藤道子『現代インド短篇小説集』）

(24)「龍」は瑞兆だよ、と幼い頃いつも母に聞かされたものだ。（常書鴻/吉田富夫/岡本洋之介『敦煌の守護神』）

(25)同じマンションの別棟に住んでいたその親友とは、夜になると電話で誘いあって互いの家を行き来たり、夏にはこの広場まで来ていつまでもおしゃべりをしたものだった。（稲葉真弓『抱かれる』）

[19] 「モノダッタ」の「タ」は、過去の「タ」ではなく、語りの「タ」であると考えられる。

なお、〈回想〉を表す「モノダ」は、多回性の意味を持つものが多いが、ただ一回的な出来事を表現する場合もある。

(26)あの時は、心臓がとまりそうなくらい驚いたものだ。

（日本語記述文法研究会2003：222）

(27)「(前略）確か、そのときの司会者が松野頼三さんに似た名前の人で、なんていったかな…。市会議員をやった人で、昔、参議院の勝俣稔さんの秘書なんかやった人…松野…松野…」「松野良平さんでは？」「そうだ、そうだ、松野良平君だ。その松野良平君が司会役でこう紹介したもんだ。」(羽田孜『小説田中学校』)

「一回限り」の出来事を述べる場合で用いられた「モノダ」に〈一般性〉を付け加えるという解釈が成り立たない。ここで参考したいのは、安達(1998)の捉え方である。安達(1998)では、「もの」が命題と「認識的モダリティ」との間に介在する場合、その「もの」は、「話し手に事態の判断についての根拠があるという認識があることを反映している」（P207）と説明している。これに基づいて考えると、「モノダ」は、すでに起きた事態の存在のあり方に〈証言性〉を付け加えると考えるのが適切ではないかと思われる。

2.2.5. 〈感心・あきれ〉を表す「モノダ」

回想の「モノダ」は、必ずタ形につけるのに対して、〈感心・あきれ〉の「モノダ」は、(28)で示されているように、動詞のル形/タ形だけではなく、可能動詞、状態性の動詞や形容詞が前接することができる。

(28)a「裏切っといて、よくそんなことが言えたもんだな」（赤川次郎『探偵物語』）

b 政府やマスコミや会社の連中は、経済が豊かでないと、文化的な人間生活は送れない、なんて抜かしやがるが、よくもまあシャーシャーとこんな嘘が言えるもんだ。（磯辺文雄『遊びをせんとや』）

c 監督と出会って、この四年間の時間の中で、私の人生は変わったし、人は変われるものなのだと、本当に実感している。(高橋尚子『夢はかなう』)

d 自らの責任を棚に上げて、よくもこのような発言ができたものだ。(植村信保『生保のビジネスモデルが変わる』)

e ほう、世のなか……、いろいろなことを考える人がいるもんだ。(少納言　Yahoo!ブログ 2008)

f「ああ、やっぱりお客さんでしたか！めずらしいこともあるもんだ。さあさ、上がってくださいよ」(深沢美潮『フォーチュン・クエスト』)

g へーッ！ここまで撮れるんだー！なるほど、一眼レフとはすごいものだなー！。(少納言　Yahoo!ブログ　2008)

先行研究では、このような「モノダ」について、二つの異なる立場が挙げられる。坪根(1994)は、これを「一般性に反する驚き・感慨」を表すものであると考えており、「一般性の裏返し」の表現としている。これに対し、高橋(2010)は、命題部全体によって表される事態のあり方に対して〈(事態生起の)確定性〉を付け加えていると考えている。本稿では、〈感心・あきれ〉を表す「モノダ」は文の裏にある一般性を意識した上で、眼前の事態を確定した存在として認定することに重点が置かれていると思われる。用例を分析した結果、「モノダ」文を構造から、大きく四つのタイプに分けられることが分かる。以下具体例を挙げながら見ていく。

✧　**主題が顕現するタイプ**

このタイプは、形態上〈主題 P は/とは/というのは/というものは、Q ものだ〉という構造を持ち、話し手が現実的な体験から、個別的な事態に潜在する性質・傾向を引き出している。言い換えれば、個別の事態に前にして一般論を再認識したり、発見したりすることによって話し手の驚きの気持ちを表明する場合である。これを「本質・傾向の再認識」と呼んでおく。

(29)a　(はしご乗りを見て)わー、すごい。

b　(話に聞いていたけど)はしご乗りってすごいもんだ。

(29) a は「はしご乗り」を直接見て発する言葉であるが、b は改めてはしご乗りという対象に備わった属性に着目し驚いたという再認識のニュアンスが生まれる。

(30)そのとき、「世の中にこんな天才がいるのか！」と思えるほど、すごいショットを

何度も見た、いや、見せつけられた覚えがあります。やっぱり日本一はすごいもんだな、と感心しました。（片山晋呉『主役』）

(31)　慈念の生活をみていると、禅寺の修行というものはつらいものだな、と里子は思わざるを得ない。（水上勉『雁の寺・越前竹人形』）

(32)アトランタ・オリンピックはいうまでもなく、いつの間にか長野冬季オリンピックまで終わってしまいました。まったく、月日の流れるのは早いもんだ！（日向章一郎『獅子座の恋愛ミステリー・ツアー・冒険少女編』）

(33)「十六になったらあなたと結婚するって、上の孫娘に言ってるそうですよ」「やれやれ、無邪気っていうのは恐いもんだな、キャット」（鶴田楡『ダンス・ウィズ・キャット』）

(34)ハイメ・ミロに出会い、テレサと一緒に山の中を逃げ、金の十字架を運び…そしてルビオと運命の出会いをした。縁とは不思議なものだ。（シドニィ・シェルダン/天馬龍行/紀泰隆『時間の砂』）

(35)「しかし、こうして君を送ろうとは、僕も思いがけなかったよ。送別会なぞをしてもらった僕の方がかえって君よりは後になった。はははははは、人の一生というやつは実際わからないものさね」（島崎藤村『破戒』）

✧　取立て助詞「も」と共起するタイプ

この種の「モノダ」の文の特徴として、取立て助詞「モ」との共起が多く見られる。中には（36）のように、「ガ」、「ハ」に言い換えられない例もある。取立て助詞「も」について、益岡・田窪（1992：153）は、「当該の事態について成り立つ可能性が低いと考えられるものが実際に成り立つ、ということにより意外性を表す場合がある」と述べている。また、澤田（2007）では、これを「感嘆のモ」と呼んで、「モ」によって表される詠嘆は、「モ」そのものによって表されるのではなく、文末のモダリティや発話環境にも関わるという。例えば、「モノダ」と共起する場合。

(36)a「あんたも、大きくなったもんだよ。ベソかいてた一年前が嘘みてえだ」
（北方謙三『危険な夏』）
b「【あんた？が/？は】大きくなったもんだ。」

(37)重太郎は飯を口に入れながら、それをつくづくと見た。女房も年をとったものだ。

（松本清張『点と線』）

「モ」による詠嘆について、澤田（2007：39）は、「発話時に、対象に新規に獲得した情報から、属性付与の判断をして、その対象を新たな対照集合に累加していると考えることができる。まさに「発話時において対象を再認識した」と、話し手が表現していると言い換えられる」と説明している。(36)（37）における対象「あんた」、「女房」を「人間というもの」の対照集合に位置付けることによって、対照集合との同類性が表現され、発話時に属性の発見も同時になされるため、感嘆の表現となるのである。つまり、「すべてのものは時間の流れとともに変化する（子供は成長する、女は年をとるなど）」という一般的通念に対する再認識を表す。

一方、（38）（39）は、一見主題のない文であるが、実際はこれらの文は本来「世の中には」を主題とする文であり、つまり「主題（世の中）にはQ（ある傾向/ある現象）が可能性として存在する」と捉えられる。(38）は、「世の中にはもともと良心的な店がないものだ」を前提とし、それに対する「今どき、良心的な店があった」という発話時における例外的事実を確認し、話し手の想定とのずれから驚きなどの感情が生じる文である。つまり、「モノダ」は、話し手の知識では、普通存在する可能性が低いと考えられることを、「確定した存在」として認めることを示す働きをしている。

(38)私は、近所に、圧搾法のナタネ油や玉じめしぼりのゴマ油を売っている油屋さんがありますので、そこで買っています。スーパーよりはちょっと高いのですが、自然食品店よりははるかに安く買えます。今どき、良心的な店もあるものです。（魚柄仁之助『うおつか流清貧の食卓』）

(39)親切な人もあるものだ。僕はくさいのは問題にしないことにして、収容所のことを聞きながらついて行った。　（井伏鱒二『黒い雨』）

✧　必ず副詞と共起する「モノダ」

次は、必ず副詞と共起する「モノダ」文についてであるが、このタイプは、「よく（も）」などの副詞類を伴わないと文として成立しにくい。例えば、（40）から「よく」を消去すると、以下のように非文となる。

(40)よくここまで頑張ってきたもんだ。

＊ここまで頑張ってきたもんだ。

「感嘆」という解釈は、「よく（も）」などの言語形式に関係していると考えられる。『広辞苑』(第六版　岩波書店）では、「よく」について「(しにくいことを敢えてしたり、あることがかえって幸いだったりした時）なかなかそういうことができないものなのに」（P2894）と記述されている。これによると、「よく」は偶発的な出来事、非本質的かつ通常実現しにくい出来事に対する感慨を表す。例えば、(40）の文において、「普通はここまで頑張ってこないものだ」を原則とし、その例外として、「あなたはそれに反した行為を行った」ことに驚いている気持ちを表す文であると思われる。同様に、(41）は、「本来このような発言をすべきではない」相手に非難する気持ちを表す文となる。

(41)自らの責任を棚に上げて、よくもこのような発言ができたものだ。(植村信保『生保のビジネスモデルが変わる』)

(42)「あの連中、お前のいるところがよく分かるもんだ。どうやって嗅ぎつけるんだう」(塩川治子『北斎の娘』)

(43）～（47）のように、「案外と」、「ずいぶん」、「やけに」「けっこう」などといった話し手の事前の予測が存在したことを明示する表現と共起することが特徴である。「モノダ」文で表される〈驚き・あきれ〉は話し手が常識や想定などを参照した上生じたものであるため、「一般性」に反する驚き・感嘆なのである[20]。つまり、もともと実現し得ない、あり得ない事態を認識したことによって、常識や一般的通念と当該の事態の不一致から「驚き・感嘆」のニュアンスが生じてくる。

(43)借りてるマシンをみんなでまわしてブツブツ文句を垂れる。「案外と軽いもんだな」(山崎マキコ『月刊アスキー』)

(44)前述のように、伊藤律は、あるとき何気なく野坂に、「あのきびしい時代に、うま

[20]〈驚き・感慨〉の「モノダ」文におけるモノの役割に関しては、北村（2007）は、文末形式モノダによって表されるのではなく、発話時・発話現場というコンテクストと話し手の直接経験性や知識の有無といった前提を参照した結果、生じたものであると述べている。

く出獄し、うまくモスクワに行ったものですね」と訊ねた。(佐藤正『野坂参三と宮本顕治』)

(45)「いやあ、来たかったんだけどさ、所帯持つと中々ねえ」「随分弱気になったもんだ」女房は笑いながら原田の背中をぽんぽん叩く。(柚木彩『逃奔の彼方』)

(46)「やけに便利な仕掛けを持っているもんだなあ」ノートンが言った。(リチャード・ヘンリック/小関哲哉『原潜レッドスター浮上せよ』)

(47)結構荷物ってあるもんだなぁ〜〜;でっかい袋に　1つ旅行かばんに　1つダンボール　3個はありそう〜〜〜(少納言　Yahoo!ブログ2008)

✧　述語動詞が形容詞化しているタイプ

このタイプには主題が見られないことや、「Qモノダ」のQの部分には、形容詞または状態性をもつ動詞が来ることが特徴である。

(48)「病院には、もう出てるんだって?」

高木は、次子の持ってきたチーズを三片ほど、いっぺんにほおばった。

「病院に出ている方がラクだよ」

「ぜいたくなもんだな。シェーンな奥方の顔でもながめていたらよさそうなもんだ」(三浦綾子『氷点』)

(49)親はといえば、由輝の歩くのが嬉しくて靴を何足も何足も買う始末。本当に困ったもんだ。(稲川尚子『ママと呼んで!由くん』)

(50)「おまえが?巡回裁判所の判事になった?あきれたもんだ。」(シドニィ・シェルダン/木下望『遺産』)

上に挙げた例は、ある特定の場面において得られた事態に対する評価を表すものであり、感嘆を表す一語文に近い。もし先行文脈を主題にして、例えば(50)を、「おまえが巡回裁判所の判事になったのはあきれたもんだ」のように表すと、不自然な文となるから、主題の復元が不可能であるタイプとして考えられる。

以上のように、〈感心・あきれ〉の「モノダ」は、他の用法の「モノダ」文とは異なる構文的特徴を持つことが言える。一般性の再認識から文法化が進むと、主題がなくなり、意外性の取立て助詞「も」や、評価の副詞「よく(も)」などと共起するようになる。こ

のように、構文的・文脈的条件によって、「モノダ」が、命題的な内容から主観的な内容へと移行している。

2.3. 「モノダ」のまとめ

以上の分析を通して、「モノダ」文の多義性は主題の名詞を連体修飾部と「もの」の組み合わせによってその主題の本質や特徴について述べるという特別な構造によって生じるものだと思われる。また、「ものだ」は、「一般的事態」と「個別事態」の双方に関わる二重性を持つことが言える。

まず、「観念の世界における事態の存在の仕方」に〈一般性〉を付け加える「モノダ」が基本であり、これに当たる用法は〈本質・傾向〉、〈当為〉である。〈本質・傾向〉は、主題の総称性と連体修飾部の複回数性・状態性[21]（北村2008）が特徴であり、主題の総称性が必須でなくなり、個体の時間軸における継続性が保たれる[22]（坪根1994）場合は、時間軸上の一般性を表す〈回想〉となる。さらに、主題がなくなり、個別の事態に対する〈驚き・あきれ〉といった用法となると、眼前の一回性の事態を確定した存在として認めることによって、その個別の事態の裏にある〈一般性〉を暗示する[23]。つまり、坪根（1994）で指摘されているように、「モノダ」のすべての用法（「説明・解説」を除く）に一般性が関与しているということができる[24]。

2.4. 「モノデハナイ」という形式

2.4.1. 「ナイモノダ」と「モノデハナイ」について

この節では、「モノダ」の否定を見ていきたい。

---

[21] 北村（2008）は、Qの複回数性もしくは性質・状態性が助動詞的なモノダ文の構造的な必須条件である（P463）と考えている。

[22] 例えば、「昔、私はよくこの道を歩いたものだ」のように、主題の総称性の制限がなくなり、ある個体について「過去の繰り返し、あるいは継続的な状態」という継続性がある。

[23] 坪根（1994） が「一般性の裏返し」と呼ぶものに相当する。

[24] 北村（2008）は、Pが総称性、Qが複回数性もしくは性質・状態性という条件を整えると、すべてのモノダ文は「一般的傾向」との解釈ができると述べている（P463）。

・最近のマンションは、ＬＤＫが広いもんだ。（（[感嘆］or［一般的傾向]）

・昔の子供は、悪いことをしたら親に殴られたものだ。（［回想］or［一般的傾向]）

・ゴミはゴミ箱に捨てるものだ。（[当為]or［一般的傾向]）

「モノダ」の否定には、「ナイモノダ」と、「モノデハナイ」の2通りある。両者はどう違うのだろうか。

(51)a. 人生は思う通りにいかないものだ。

b. 人生は思う通りにいくものではない。

(51a) の「ナイモノダ」は基本的に肯定の場合と同じ構造を持ち、「人生は思う通りにいかない」ということが人生そのもの本来の性質として表し、性質自体に否定のニュアンスが含まれるのである。一方、(51b)の「モノデハナイ」は「一般的に、またはあなたは、人生は思う通りにいくものだと思っているが、実はそうではない」という意味で、常識的に信じられていることを否定して事態の本質を明らかにしているのである。そのため、「ナイモノダ」と比べて、「モノデハナイ」はより禁止に近い働きを持ち、場合によっては、「当然……してはならない/しては常識に反する」という相手を責めるニュアンスが込められる。

「モノデハナイ」と「ナイモノダ」は以上のように解釈できるが、実際両者は意味が重なるところがあって、その両形式が表す意味は動詞の分類にも関連している。まず、「モノデハナイ」の例を見ていく。

(52)「男は格好なんかで価値が決まるもんじゃない。要は中身だ」という考え方はふるいふるい。(うつみ宮土理『うつみ宮土理のカチンカチン体操』)

(53)日本では夫婦は決して愛だけで、信頼だけでつながるものではない。(会田雄次『表の論理・裏の論理』)

(54)こんなところでこんなときになかなか食欲がでるものではない。(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

(55)好きだった気持ちはそう簡単に忘れられるもんじゃないんだ。(少納言　Yahoo! 知恵袋2005)

(56)「そうですか。どなたか知りませんが、似ていて光栄ですわ」「そんなことに、光栄なんていう言葉を使うもんじゃない。光栄という言葉は、太子様に対してだけ、使いなさい」(志茂田景樹『背後霊は殺しがお好き』)

(57)「なっ、泣くな、泣くなよ。男は泣くもんじゃねえ…、みっともねえや」(実著者

不明『林家木久蔵の子ども落語』)

上の例文から分かるように、「モノデハナイ」は意味が「本質・傾向」と「当為」と二通りに分けられる。(52)～(55)は述語が非意志動詞、可能動詞であるため、「本質・傾向の否定」を表す例である。一方、(56)～(57)は述語が意志動詞、感情動詞であるため、「当為の否定」とも解釈できる例である。このように、「モノデハナイ」において、動詞の性質と「モノデハナイ」で表される意味が関連していることが分かる。つまり、非意志動詞、可能動詞など静的な動詞は状態を表し、話し手は自分の意志によってそれを恣意的・能動的にコントロールすることはできないため、「本質・傾向」を表すことが基本である。それに対して、意志動詞の場合は、行為を実行するかどうかは話し手の意志次第であるため、「当為」を表すこともできる。一方、「泣く」などのような感情動詞は普通非意志動詞として考えられているが、その動作は行為者の努力によってある程度コントロールできるため、(57)のような文脈では「当為」と解釈することが可能となる。また、日本語記述文法研究会(2003：222)で指摘されているように、「すでに実行した行為」を制止する意味で用いられる場合、「当為」の否定と解釈されやすい((58))。

(58)彼は目頭が熱くなった。捜査官は泣くもんじゃない、彼は自分に言い聞かせた。仕事をするのだ。(レジナルド・ヒル/秋津知子『死者との対話』)

次に「～ナイモノダ」の例を見ていく。

(59)人間はおいそれとは変わらないものだ。(少納言　Yahoo!ブログ2008)

(60)人間の記憶なんて、あてにならないものだ。(宮部みゆき『夢にも思わない』)

(61)女性の嘆きなど男性がもっとも聞きたくないものだ。(アゴ・ビュルキーフィレンツ/たかおまゆみ『変わる妻たち』)

(62)習い性というのはそう簡単には消えないものだ。(ローレンス・ブロック/田口俊樹『死者の長い列』)

現代書き言葉コーパス「少納言」で「～ないものだ」で検索すると、収集した164例のうち、〈本質・傾向〉の例が50例あって、〈当為〉の例が見つからなかった。これは「～ナ

イモノダ」は〈当為〉の否定というより、〈本質・傾向〉の否定として用いられる傾向があるのではないかと思われる。

なお、収集した用例の中には、「感心」を表す「〜ナイモノダ」も存在することが分かった。(63)〜(65)では、話し手にとって社会の一般認識に反する特定の事態への「驚き」が表されている。これらのいずれも「〜モノデハナイ」に置き換えることができない。

(63)「ほう、お月さまがのっているのか。お月さまは、勇気がありますね。よく、こわくないもんだ。あんなまっくらな広い海を、あんな小さな船で、ねえ。」(福永令三『クレヨン王国森のクリスマス物語』)

＊よくこわいもんじゃない。

(64)よく病気にならなかったもんだ。辛い深夜勤務　毎日決まった時間に起きるのだって辛いのに、3交替だと寝る時間もバラバラだから、ますます起きるのが辛い。(田中ひろみ『わたしがナースを辞めたわけ』)

＊よく病気になったもんじゃない。

(65)よく、韓国国民や在日が騒がないものだ。親北朝鮮政策では、騒いでいたのにな。(少納言　Yahoo!知恵袋　2005)

＊よく、韓国国民や在日が騒ぐもんじゃない。

2.4.2. 「モノデハナイ」の意味・用法

続いては、「モノデハナイ」の意味・用法を検討する。

前節で考察してきたように、「モノデハナイ」は主に〈本質・傾向〉の否定を表し、その基本的意味を、「ある命題内容について、それは一般的にはこういう存在ではない」と示す形式であると規定する。書き言葉コーパス「少納言」では、「もんじゃない」が用いられる104の用例のうち、〈本質・傾向〉を表すもの(「可能動詞＋たもんじゃない」を含む)が22例であって、〈当為〉を表すものはわずか7例に過ぎなかった(用例を以下に挙げる)。

(66)「ちょっと待て」父がさえぎった。「結論をそう急ぐもんじゃない。ローゼンのオルガンは鉄のカーテンのこちら側じゃ並ぶもののない製品なんだぞ」(フィリップ・K・ディック/ 佐藤龍雄『あなたをつくります』)

(67)「わしは、数学など、しとうありません。学校を辞めます」「そげなことをいうもんじゃない。社会へ出て、何でも役立たんものはないんじゃ。いまのうちに勉強しとかんと、あとで苦労するんじゃ。」（大下英治『小説明治大学』）

(68)これですべてがぶちこわしになった。私もがまんできなかった。「そんなことは言うもんじゃない。腕に自信のあるのはあんただけではないんだ。」（中野清見『回想・わが江刈村の農地解放』）

(69)「そうですか。どなたか知りませんが、たか知りませんが、似ていて光栄ですわ」「そんなことに、光栄なんていう言葉を使うもんじゃない。光栄という言葉は、太子様に対してだけ、使いなさい」（志茂田景樹『背後霊は殺しがお好き』）

(70)また、いつかは矮鶏の雛がやっと育ち、これからが愉しみだというのにネコに襲われ、雛を喰わえて遁走するネコを孝平が捕まえ損なって以来、庭をうろつくネコを見ると、手当たり次第に石を投げつける。母はそれを見て、お寺の坊さんも説教していただろう。生きものは苛めるもんじゃない。無駄な殺生をするもんじゃない。（鴫沢秋生『再びの青春』）

(71)「ちがう。剣はひいて斬るもんじゃない。どんな場合も太刀すじは一直線、まっすぐです」小太郎の声がひびく。（越水利江子『忍剣花百姫伝』）

(72)「洪ちゃも行く」「子供は赤ちゃんの生まれるところへは来るもんじゃない。おとなしく待ってなさい。」（井上靖『しろばんば』）

上で示されているように、〈本質・傾向〉の否定を表す「モノデハナイ」は、文脈や発話状況がそろえば、間接的に〈当為〉の否定と解釈することができる。例えば、（70）では、話し手が抱く社会の一般的規則、一般的認識「生きものは苛めるものではない」を背景にして、そのような状況下で、聞き手が今取った行動が社会の一般的認識にふさわしくないと伝え、相手に行為の停止を促し、つまり「生きものを苛めるのをやめなさい」という意味になる。また、本質・傾向を表す「モノダ」と呼応したり、「もともと、本来」などの副詞と共起したりすることから、「ノデハナイ」は、基本的には「一般性の否定」を包摂した表現と言えるのだろうか。

(73)恋愛はするもんであって書くもんじゃない。（佐藤環妃/加藤きなこ/実著者不明/田口ランディ『ＣＯＳＭＯＰＯＬＩＴＡＮ　日本版』）

(74)酒というのは、もともと、神とともに、集団でのむものであって、ひとりでのむものではない。(梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集』)

(75)髪の毛は、人人体になくてはならない大切なもので、本来なら、人が生を終えるまで決してなくなるものではない。(東田雪子『発毛・育毛の新常識』)

その他、(76)(77)は、個別的な事態から引き出される「本質の再確認」と言われる用例だが、これらの「モノデハナイ」は、「本質・傾向」の派生用法として捉えられるのではないだろうか。

(76)「―恋なんて、その頃にはかけらもなくて、あーあ、こんなはずじゃなかったのに、とため息をつくのがオチですわ」「恋なんてするもんじゃないわね」(赤川次郎『探偵物語』)

(77)日本やオランダの皇太子と同じ式典やレセプション、音楽会やなんやに出るなんて事が私の身の上に起こるなんて。人生、何があるか予想がつくもんじゃない。(石川京子　デッカー『オランダ』)

当為の「モノダ」が非実現の事態にのみ用いられるのに対し、「モノデハナイ」は話し手か聞き手の成立した行為についても用いられている。(78)～(79)は本来行うべきでない当該事態が実現されることに対して話し手が後悔したり、(80)～(81)は相手の望ましくない動作の実行に対して非難する場面で用いられている。

(78)いやいやもう年寄りが車なんぞ運転するもんじゃないねえ、あたしも嫁にも乗るなってね、おとりあげですよ。(高梨2006：9　村上龍『限りなく透明に近いブルー』)

(79)「昨日、花の仕入れに行ってたんでしょ？ジムに電話したら吉井さん、そう言ってたから」「あ、ああ…台風の日なんかに行くもんじゃないよな、帰り、車、脱輪しちゃってさ」(豊田美加『恋して死にたい』)

(80)「親に向かって大声を出すもんじゃないよ！」お祖母ちゃんも負けてはいない。(宮部みゆき『ブレイブ・ストーリー』)

(81)「おいおい加藤君、あまりひとをからかうものではない」(新田次郎『孤高の人』)

なお、以下のように、「知る」「分かる」のような可能動詞や動詞の可能形を受け、それが「実現不可能だ」という否定の意志を強調するため「モンジャナイ」が用いられている。これらの例は動詞のタ形に接続し、名詞「もの＋ではない」（語彙的否定）として考えるか、それとも「一般性の否定」の派生用法として認めるかに関しては、さらに詳細な検討が必要であり、本稿では深く立ち入らないことにする。

(82) 災難っていう奴は、いったいどこから降って湧いてくるか解ったもんじゃない。（二階堂黎人『稀覯人の不思議』）

(83) 当時の定価は150万円だったので、とても言えたもんじゃない。ところが彼女はバイクに関してはからきし知識がないので、あまり怒らなかった。（松田佳之『培倶人』）

(84) 「この大勢の人間の中の誰が闇の信徒なのか、わかったもんじゃない。」（ロバート・ジョーダン/斉藤伯好『滝王伝説』）

2.5. 本章のまとめ

以上、「モノダ」文とその否定について検討してきた。その結果、「モノダ」文において「本質・傾向」「当為」「感心」（本質・傾向の再認識による感嘆）と定義される用法は、「モノデハナイ」文にも存在することが確認できた[25]。もちろん、「回想」がないことをはじめ、用法そのものに異なる点はあるが、すべての用法に「一般性」が関与していることが言える。また、北村（2008）で指摘されているように、「ＰハＱモノダ」型の名詞述語文の構造を基礎としており、構文的条件や語用論的条件によって諸用法が派生している点で、肯定の「モノダ」文との平行性も見られる。

[25] 高梨（2006）では多様な用法を持つ「モノダ」とは逆に、否定形「ものではない」で用いられるのは当為の用法のみであると記述されている（p8-9）。

3. 「コトダ」とその否定

3.1. はじめに

本章では、「～することが大切・必要である」の意味を表す「コトダ」について考察する。例えば、

(1)　風邪を引いた時は、温かくしてよく寝ることだ。

のような、ある特定の状況において、あるいは特定の事象に臨んで、話し手にとって当該の行為をする必要があると述べる「コトダ」文である。本稿では、これを助動詞的な「コトダ」と呼ぶことにする。

従来、(1) のような「コトダ」の意味・機能についての議論は多く行われてきたが、「コトダ」が助動詞化する以前、もともとの名詞述語文としての「コトダ」との関連についてはほとんど触れていない。そのため、本稿ではまず助動詞的な「コトダ」と名詞述語文のコトダとの比較によって、「コトダ」文の統語的性質を考察し、そして行為者の人称によって「コトダ」の意味・機能がどのように変化するのか[26]を検討する。最後に、肯定の「コトダ」と対応させる形で、「コトダ」の否定について考察する。

3.2. 名詞述語文の「コトダ」

ここでは、まず名詞述語文の「コトダ」を見ていきたい。形式名詞の<「こと」+「だ」>の場合は、基本的に「X ハ Y ダ」という構造を持ち、「こと」はその文の中、あるいは文脈において、必ずそれと対応するものが存在し、すなわち主題部分を持つことが特徴である。

(2)　一番良い方法は、食べ物に気をつけることです。(少納言　Yahoo!知恵袋2005)

(3)　健康の基本はバランスのとれた食材を適切な量だけ朝・昼・晩とリズムに合わせて食べることです。(畑山幸司『コラーゲンで身体をリセット』)

(4)　最近、悩みがある。24時間テレビのランナーに選ばれたため、ダイエットしなけ

[26] 「コトダ」における人称制限について、高梨 (2006) は、すべての人称に用いられると指摘しているが、詳しい考察が行われていない。

ればならないことだ。（少納言　朝日夕刊　2013年06月22日）

（4）のように、一文を超えて文脈の中で主題が認められる例もある。ただしこの場合も、「24時間テレビのランナーに選ばれたため、ダイエットしなければならないこと」の前に、本来は「その悩みというのは」があり、その重複を避けるために省略されていると考えられる。このように、名詞述語文の「コトダ」の場合は、文法的に主述の関係があることが必須の条件と言うことができる。

一方、助動詞的な「コトダ」文には、明確な主題が見当たらず、直前の品詞は動詞に限り、行為者の意志でコントロールできる動詞が「コトダ」文の前に現れるのが基本である[27]。 また、「コトダ」は、未実現的な事態に対する表現するものなので、（5）に見られるように、「コトダ」の前に動詞のテイル形とタ形が現れない。

（5）　ともかくも若い間は行動〔する/*した/*している〕ことだ。めったやたらと行動しているうちに機会というものはつかめる一と、亡き道三は光秀に語ったことがある。（司馬遼太郎『国盗り物語』）

また、統語構造から見ると、名詞述語文の「コトダ」では、断定の助動詞ダは、否定形をとることもあり、後にモダリティ表現を後続することができる。一方、助動詞的「コトダ」それ自体は一体化して、否定形や疑問形をとって用いられることができない。そして、終助詞以外に、他のモダリティ形式を付け加えることもできないようである。

（6）　a. 一番良い方法は、食べ物に気をつけることではない。
　　b. 一番良い方法は、食べ物に気をつけることですか。
　　c. 一番良い方法は、食べ物に気をつけることだそうだ。

（7）　a. ＊風邪を引いたときは、温かくしてよく寝ることではない。
　　b. ＊風邪を引いたときは、温かくしてよく寝ることですか。
　　c. ＊風邪を引いたときは、温かくしてよく寝ることであるに違いない。
　　d. 風邪を引いたときは、温かくしてよく寝ることだね。

[27] 寺村（1984：296）は、「コトダ」の前に来る動詞の制限について、意志的な行為を表す動詞の基本形に限られると述べている。

ただし、以下のように、名詞述語文と助動詞的な「コトダ」文の中間的なものの例が見られる。

(8)　「――おまえにも勉強させてやりたいと思ったのだけれど、うまくいかなくって、残念だった。しかしな、愛川、学問をやることだけが大事なことじゃない。人間、何をやってもいいんだ。一番大事なことは、まっすぐに生きることだ。いいか、よく働くんだぞ。それから、からだを大切にしてな。」（山本有三『路傍の石』）

(9)　しかし今は仕方がないと、彼は思っていた。必要なことは、なるべく早く婚約を正式なものにすることだ。要するに江藤自身が彼女の良人としてふさわしい社会的条件を身につけることだった。（石川達三『青春の蹉跌』）

(8)～(9)の例は、「大事・必要なのは～ことだ」という構造を持ち、構文上助動詞的な「コトダ」文とは異なるが、その文に［大事だ・必要だ］という意味が含まれているため、助動詞的な「コトダ」文と名詞述語文との中間的なものになっている。前に挙げた(5)の方は、「{命題}コトダ」という構造になって、明確な主題が見られない。しかし、この三つの「コトダ」文には一つ共通する特徴がある。それは、コトの前に来る叙述内容が必要・重要だという判断を含む点である。(8)と(9)は文脈上、「必要・重要」の意味を表す語彙を持つが、(5)にはそのような語彙が明示されていない。だが、(5)を次のように置き換えることができる。

(10)　ともかくも若い間は行動することが必要だ。

これについて、坪根（1994）は、「「必要」の用法の主題として「私が今（先行文・先行文）状況について）言いたいことは」といったものが考えられ、そこから「（先行文・先行状況において）大切なことは」という主題が隠れているかのように認識されるのだ」（P55）と考えている。すなわち、この「コトダ」という形式では、「Aは～することだ」にあたる「コトダ」と呼応する要素が明示されないとき、「重要なこと」「必要なこと」の意が文脈上Aとして読み込まれることが考えられる。

以上見てきたように、「コトダ」が、相当程度助動詞化が進んでいるにもかかわらず、「重要な/必要なことは～することだ」といった表現における、形式名詞く「こと」＋「だ」

>に連続しつつ、単独で、行為者にとって必要な行為を提示する意味を持つ形式だと考えられる。

3.3. 助動詞的な「コトダ」文

助動詞的な「コトダ」の用法を考察するに当たり、まず対話文の場合と非対話文[28]の場合に分けて考えてみたい。

3.3.1. 非対話文における「コトダ」

まず非対話文から見ていく。非対話文では、次の例が示すように、行為者は一人称になることが多い[29]。基本的に以下のような心内発話あるいは独白が挙げられ、発話者と行為者が一致する特徴がある。

(11) 加藤はそういう自分の声を聞いた。
「いや加藤、眠ることは死を意味する。きさまの下半身はすでに凍傷になりかかっている。歩くことだ。動いているうちは、お前の身体に血が流れる。だが休んだら凍る。一度停止したエンジンを動かすことは困難だ」(新田次郎『孤高の人』)

(12) おれは学校騒動には加担しない。現実を大事にし、自分の立場を大事にしなくてはならない。これはエゴイズムではない。社会人としての当然の義務でもある。とにかく今年のうちに司法試験に合格することだ。そこからおれの未来は開ける。そしてこの資本主義社会のなかに一つの足場を築くのだ。そこで始めておれの発言権が認められ、社会を動かす実力が備わってくる。(石川達三『青春の蹉跌』)

(13) ともかくも映画を見ておこうと考えて、彼はホテルを出た。そのあとで映画の所感を手紙に書いて送るのだ。しばらく康子との接触を続けて行こう。しかしあの気位の高い女は、なにか機会を見つけては男を軽蔑しようと考えているらしい。軽蔑されないためには、威厳をもって接することだ。当分のあいだ、求愛の言葉などを用いてはならない。(石川達三『青春の蹉跌』)

例えば、(11)〜(12)は話し手の内面描写であり、話し手が行為者となる。(11)で

[28] 非対話文は、地の文と独話を含むものである。
[29] 新潮文庫から収集した助動詞的な「コトダ」が含まれる 40 例のうち、一人称のものは 21 例であった。

は「眠ることは死を意味する。きさまの下半身はすでに凍傷になりかかっている」という先行文があるからこそ、「このような状況において、死なないためには歩くことが必要だ」と話し手の判断が下された結果、「今必要なのは歩くことだ」が導き出される。一方、続く（12）は、先行文に当たる部分が、後続文で示される用例であり、「自分の発言権が認められ、社会を動かす実力を備える」という目標があるからこそ、「今年のうちに司法試験に合格すること」が今の自分にとって必要な事態として打ち出される。一方、（13）の場合は、一見話り手と行為者が一致していないように見えるが、語り手が行為者の立場に立ち、心内発話を代行して語っていると解釈できる。

行為者が一人称である場合、（14）（15）のように、しばしば「～と思う」と共に用いられ、自分自身への言い聞かせのようなニュアンスを伴っていると考えられる。

（14） 私はそれに気がついたときに、まず自分は脳を変えなければならないと思った。そのためにはとにかく心地よいことを体験することだと思った。（加藤諦三『がんばりすぎてしまう人へ』）

（15） 真夜中、目が醒めてそれを考え出すと、わあと叫んで山間の闇を走り廻りたい衝動を感じた。だが、かろうじてそれを抑え、待つことだと、自分に思った。（高梨2006：12　田久保英夫『深い河』）

なお、語りの文[30]では、行為者が三人称になることもあり得る。ただし、これは、一人称を主体とする表現の変種と見直すのが適当だろう。

（16） 康子がブルジョア階級に安住していられるのは、彼女の父が資産家であるという、それだけのことだ。彼女自身は特に何の価値ももたない一匹の牝であるに過ぎない。その無価値さを思い知らせる為には、賢一郎自身が司法官吏の資格をとり法学博士の学位をとることだ。……それが江藤賢一郎の計画している階級闘争であり、復讐でもあった。（石川達三『青春の蹉跌』）

（17） 現実の社会にしっかりと足をつけて、着実に生きてゆくことだ、と彼は思った。（石川達三『青春の蹉跌』）

[30] 語りの文は小説における「地の文」に当たる。

(18) とにかく眠らせることだと荻江は玉子酒をつくると強引にのませた。(渡辺淳一『花埋み』)

さらに、(19) ～ (23) では、表面上三人称が行為者であるが、読み手一般に対する必要性の提示と見直すことができる。

(19) 時間は相当かかるが、いつか子どもは何かしはじめるから、それまで親はじっと待つことだ。(安藤春彦『親が知らない子どもの心』)

(20) ソ連が本当に日本と善隣協力条約を結びたいなら、何よりもまず北方四島を日本に返すことだ。(早坂茂三『早坂茂三の「田中角栄」回想録』)

(21) 「要は、日本が中国の経済大国化を認め、中国が日本の政治大国化を認めることだ。」(少納言『読売新聞　朝刊』2005. 4. 23)

(22) ―どうすれば早期に発見できますか。「まず、一人ひとりが乳がんに関心を持つことです。しこりなど自覚症状のない人には、自治体や企業が行う検診を勧めています。」(少納言『西部朝刊』大分　2013.6.16)

(23) 福運が欲しければ、まず自分が福の神になることだ。(清水栄一『勝ち運をよぶ心の力』)

これまでの考察から踏まえると、「コトダ」の前に意志動詞が置かれる必要がありそうだが、実際は以下のように非意志動詞が来ることもある。このように、助言や忠告としての機能がなくなり、「必要性の記述」(坪根 1996：57) という解釈になる。

(24)会社が持ち直すには、まず円が安くなることだ。(坪根1996：56)

(25)特に本年は「真に地域を再生するには、市町村が元気になることだ。そのことが、国を元気にする」と言われますように、地方自治体・地方議会の果たす役割は大であります。(少納言『広報なかがわ』2008年01号)

以上の用例から分かるように、助動詞的な「コトダ」は、行為者が基本的には二人称だ

が、一人称、三人称にも用いられることがわかる[31]。通常は行為者が明示されないが、眼前に存在しない行為者一般に対してなすべき行為を提示する場合は、行為者が明示されることも見られる。

3.3.2. 対話文における「コトダ」

次に対話文の場合を考えてみよう。

(26)「…だから、歌を歌うということもリーダーの大切な要件です。そのためにも、しっかり覚えておくことだ。歌というのは、こう歌うのです！」伸一は、「霧の川中島」を歌い始めた。(池田大作『新・人間革命』)

(27)「藤沢さん、ぼくにヒマラヤがやれますか」

それは藤沢久造にとってもそばにいる外山三郎にもまったく思いがけない質問だった。

「自分に勝つことだ。そうすればヒマラヤに勝つことができる」(新田次郎『孤高の人』)

(28)「君なんか一人もので自由だから、うらやましいよ。学生時代に猛勉強して合格しておくことだな。その点、おれは失敗したと思ってるよ。」(石川達三『青春の蹉跌』)

(29)「すると、藤沢さんはどうすればいいっておっしゃるのでしょうか」

外山三郎はやや詰問のかたちで聞いた。

「放っておくことだ。彼の芽を伸ばすには放っておくのが一番いい。ああいう大物は下手な先生をつけずに置いた方が、素直なかたちで伸びる。(略)」(新田次郎『孤高の人』)

前節で述べたように、「コトダ」文がとる行為者は、一人称と三人称のいずれも可能であるが、聞き手であることが圧倒的に多い。行為者が目の前の聞き手である場合、例えば、(26) では、「リーダーになるためには、歌を覚えておくことが必要なのだ」という話し手の判断を表し、結果的には聞き手にその行為を実行してほしいという助言や忠告を与える発話となる。ただし、当為表現の「モノダ」との違いは、森田・松木 (1989) は「個別・

[31] 先行研究において、必要を表す「コトダ」には人称制限があり、主に二人称に使われると記述されてきている (寺村 1984、高橋 2005 など)。

一般」 という基準に基づく説明をしている（例 30）。「モノダ」は、対象一般を中心に把握し、対象の持つ性質や属性から当為を主張するため、一般の傾向、社会的習慣、常識などに基づくことが多いのに対して、「コトダ」は、個別的な対象把握が基本にあるため、当該の行為や事態などに対しての話し手自身の個別的な意見・評価の提示にとどまる。

(30)「単語が分からないときはすぐ辞書で調べるものだとよく言われるが、そうではなくて、文の前後関係から意味を判断する練習をすることだ。それが英語力をつけるコツだよ。」（森田・松木1989：205）

なお、対話文においては、以下のように、行為者が明示されている場合もある。(31)の「子供」は聞き手を指していると考えられる。

(31)子供はひとりで川へ行ったりしないことよ。(高梨2002：127　瀬戸内晴美『いずこより』)

(32)ともかく、あなたは、ぼくとの生活をする前に自分の足でしっかり立ってみることだ。(高梨2002：127　瀬戸内晴美『いずこより』)

3.3.3. 「コトダ」文の意味・用法

助動詞的な「コトダ」文の特徴については、備前（1989）が、前件には「目的を表わす条件節」「仮定条件を表わす条件節」の二種が多いと指摘している。筆者の収集した用例には、前件がはっきりと現れている複文と、前件が現れない単文の二つのタイプが見られる。まず、複文の場合は、「コトダ」文の前件には、後件で述べられる必要性を生じさせる状況が条件節や目的を表す副詞節などの形で述べられている。ただし、(37)のように、目的節や条件節は言語化されない場合もあるが、文脈には必ず存在すると考えられる(〈括弧〉内が言語化されない目的節である)。

(33)アレルギー体質を改善するため、毎日の食事を正しくすることです。（東城百合子『食生活が人生を変える』）

(34)美しく撮るには、まず、その花が最も美しく見える角度を探すことです。(森村進『女性のためのオートカメラ自由自在』)

(35)感染の兆しを感じたら、早目に医師に相談することだ。(櫻井よしこ『世の中意外に科学的』)

(36)先に進みたい気持ちがあるなら、時間をかけることだ。そのときが来るのを待って、丁寧に一歩ずつ進んでいくのだ。(カレン・ローズ・スミス/仁嶋いずる『シンデレラになる資格』)

(37)風邪を引いた時は、〈早く直るためには〉温かくしてよく寝ることだ。(第1章(10)の再掲)

一方、単文の場合は、「まず」「とにかく」「要は」「何よりも」などの副詞を伴うことが多い(例38〜41)。あるいは「コトダ」文自体にこれらの表現が現れなくとも、その前後に、「〜必要だ」「〜べきだ」「〜しなければならない」などの述語表現が見られる(例42〜43)。言い換えれば、こうした文脈的条件のもとで、「当該の事態の実現が必要である」という解釈が生じるのであって、「コトダ」自体に「必要」であるということを表すわけではない。

(38)どうして、ここまで緊張するのだろうか。とにかく落ちつくことだ。落ちついて、よく観察するんだ。(松田美智子『秘密の地下室』)

(39)組織を歩きまわるときは、何よりもまず、輝く保安官バッジを捨てることだ。(ジェームズ・M・クーゼス/バリー・Z・ポスナー/伊東奈美子『ほめ上手のリーダーになれ!』)

(40)これは、例えば初心者がスポーツをするようなもので、最初はやり方は理論上わかっていても、うまくはいかないものです。要は繰り返し練習することです。(賀川洋『外国人との仕事に悩んだ時読む本』)

(41)彼は、言葉を続けた。「戦略、戦術が必要となってくる。戦略とはなにか。まず、敵を知り、己れを知ることだ。」(伴野朗『伍子胥』)

(42)今、政府が検討している「介護士等の福祉」向けの要員育成だが、そんなに甘くない。非常に辛い仕事だし、大体男性がやれる部分は非常に少ないことを知っておくべきだ。役人の机上の論理に乗せられないことだ。(少納言　Yahoo!ブログ　2008)

(43)小泉首相は今すぐに消費税を上げるべきなのだ。ただし、そのためには国民を説得しなければならない。まずは日本国の現状を国民に正直に話すことだ。(浅井隆『小

泉首相が死んでも本当の事を言わない理由』)

以上の考察から、「コトダ」の用例に共通する意味・用法を以下のようにまとめる。

つまり、ある特定の状況において、当該事態の実現あるいは当該行為の実行が必要であるという話し手の判断を示すのが「コトダ」の意味だと考えられる。また、「コトダ」における人称制限に関しては、二人称の他、第三者、さらに話し手自身の行為にも用いられることができる。特に、当該事態の行為者が聞き手である場合は、助言、忠告のような語用論的な意味に変容していくと考えられる。

3.4. 「コトダ」の否定

次に「コトダ」の否定を取り上げることにする。否定といっても、形態上の否定形である「コトデハナイ」は成立せず、代わりに「コトハナイ」という形式は用いられる。「コトダ」は「当該の事態の実現が必要だ」という基本的意味を持つが、行為者にとって必要な行為を提示する場合、結果的には行為指示的表現いわゆる「助言」となるため、「～しないことだ」のような「うちの否定」は可能となるが、「～することではない」のように「コトダ」自体を否定にするのは、論理上あり得ないからである[32]。例えば、

(44)早く治りたいのなら、あまり無理をしないことだ。

（日本語記述文法研究会2003：226）

（助言として）a 無理をしないことだ。

b？無理をすることではない。

「～しないことだ」と「～することはない」の違いについて、前者が当該の行為をしないよう忠告するのに対し、後者は当該の行為の実現が不必要であることを述べるものとして捉えることができる。これについては、姫野（2000：29）が、他の当為表現や命令表現との連続性を以下の表 3-1で示している。

[32] 高梨（2006：13）では、いわゆる助言の「ことだ」が、「ものだ」とは異なり、「ことではない」という否定形で用いられないとしている。

〈価値判断表現〉		→ →	〈命令表現〉
［勧告・義務等］	することだ	しなければならない	するんだ
［忠告・禁止等］	しないことだ	してはいけない	するんじゃない
［不必要等］	することはない	しなくてもいい	

表 3-1 姫野（2000）「こと」を含む複合辞と対応する他の当為表現

上の表から、「～することだ」と「～しないことだ」の対応は、〈価値判断表現〉の下位分類である〈勧告・忠告の表現〉の範囲で、命題の肯定―否定の対応を成していると捉えられる。一方、「～することだ」と「～することはない」の対応は、〈価値判断表現〉の範囲で、「必要―不必要」という点で対応する形式として整理することができるのではないかと思われる。

3.4.1. 「コトハナイ」という形式

続いては、「コトハナイ」という形式の意味・機能を考察する。「コトハナイ」は以下のように用いられている。

(45)経験からもわかるように、火星は簡単に金星になるが、金星が火星に変わることはない。（フルカネリ/平岡忠『大聖堂の秘密』）

(46)「おじさん、ごめん」すみかはさすがに青ざめていた。「謝ることはないよ。すっきりしたよ、おかげで」（鱧余夢紋『メガネをかけた犬』）

(47)三年生といえば、ほとんどの生徒がどこかの塾へ通っているが、小百合さんは塾に通ったことはない。（斉藤浩子『家庭と職業のはざまで』）

（45）～（47）は、それぞれ、動詞のル形と動詞のタ形に「コトハナイ」が後接したものである。これらの例は、形態上は同じように見えるが、表される意味が異なっている。（45）の場合、「金星が火星に変わるという事態は起きない」ということを表している。一方、（46）は「謝る必要がない」という意味になる。さらに、タ形に接続する「コトハナイ」（47）は、「小百合さんは塾に通った経験がない」ということを表す。

このように、形態上・統語的には同一であるが、「コトハナイ」は前接する要素や文脈によって「事態の非存在」、「事態の不必要」、「経験の有無」の三つの用法を持ってい

る。特に、同じル形に「コトハナイ」が後接すると、「事態の不生起」の他、「事態の不必要」との解釈もできる。そこで、次節では、「事態の不必要」を表す「コトハナイ」に限定し、その統語的特徴と意味的特徴について考察を行う。

3.4.2. 「コトハナイ」の統語的特徴

まず、確認しておきたいのは、「コトハナイ」をどのような単位として扱うかである。事態の不必要を表す「コトハナイ」の形式化の度合いについて、以下のテスト[33]を通して、事態の非存在を表す「（実質名詞）こと＋は＋ない」と比べてみる。

	事態の非存在	事態の不必要
助詞「が」が介在するかどうか	「が」が介在可能 「授業に遅れる**ことがない**」	「が」が介在不可能 ＊「心配する**ことがない**」[34]
形式の一部に他の要素（副詞）の挿入	「私には心配することは**たぶん**ない」	？（相手に向かって）「心配することは**たぶん**ない」
「こと」の前に来る要素	形容詞、名詞の接続も可能	動詞の非過去形にしか接続できない
「こと」の前に否定が来るかどうか	否定が来ることができる 「行かない**ことはない**」	否定が来ない ？「心配しない**ことはない**」
「こと」の前に「という」が介入するかどうか	介在可能 「最近行くという**ことはない**」	介在不可 ？「心配するという**ことはない**」
文末のモダリティとの承接	おおむね可能	ほぼ不可能[35]

表 3-2　事態の不必要と事態の不存在を表す「コトハナイ」の違い

このように、「不必要」を表す「コトハナイ」は「非存在」の「～こと＋は＋ない」と比べると、「こと」自体の実質的意味が薄れ、形式全体として、個々の構成要素の合計以上に独自の意味が生じていることから、ある程度文法化していると言える。そのため、本稿では「コトハナイ」を一つのモダリティ形式として捉えることにする。

ただし、次のような「事態の非存在」なのか「事態の不必要」なのかを線引きすること

[33] 姫野（1999：27）の蓋然性を表す「ことはない」と不必要を表す「ことはない」の二形式の違いの表を参照した。
[34] この表現は文法的には成り立つが、「事態の非存在」となるので、「事態の不必要」を表す形式とは認めることができない。
[35] 反論を表す「～でしょう」や強調を表す「～のだ」が後接することがある（姫野 1999）。

が難しい例が認められる。

(48)「お嬢さま！なにも心配することなんかありませんよ」（佐左木俊郎『恐怖城』）

(49)「あやまることなんてないわ。あなたがだいじょうぶなら、それでいいの」（ニコラス・スパークス/大野晶子『メッセージインアボトル』）

このように、「事態の非存在」と「事態の不必要」との間に連続性があり、不必要を表す「コトハナイ」は「当該の事態が必要事態の領域には存在しない」から「事態の不必要」へ移行しているのではないかと思われる。

3.4.3. 行為者の人称制限

「コトハナイ」における行為者の人称制限についての記述に差がある。日本語記述文法研究会（2003）では話し手の行為を表しにくいと記述しているが、高橋他（2005）では時に一人称に伴われることがあるとしている。また、三人称の行為者が「コトハナイ」文に現れるかどうかということについては、両者とも触れていなかった。今回収集した用例には、一人称、二人称、三人称の例がすべて確認できる[36]。

(50) しかし、電灯をつけてタンスのとびらをあけた拍子に、もう一つの考えが、ふいに心をかすめて通りすぎた。なにもあわてることはないじゃないか。あらためて新しく乗車券を買いなおせば、それですべてはまるくおさまるはずだ。(鮎川哲也『時間の檻』)

(51)「おまえが心配することはない。犯人が見つからなくて困るのはおれなんだから。」（谷川涼太郎『京都・尾道れんが坂の殺人』)

(52)「なあに、おまえにしか言わない。心配することはない」（陳舜臣『陳舜臣全集』)

(53)「でも、わたし、中村さんて、ひどいと思うわ。何も牧師さまのことを、そんなふうに書くことはないじゃありませんか」（三浦綾子『塩狩峠』)

(50) ～ (53) の用例はそれぞれ、行為者の人称が異なっている。(50) は一人称、(51)

[36] 小原（2009）では「ことはない」における行為者人称制限について考察したものがあり、本稿はこれを参考にした。

（52）は二人称、（53）は三人称である。このように、二人称の行為者に用いられる例に対して、数は少ないものの、三人称や一人称の行為者の行為に対しても、「コトハナイ」は後接できることが分かる。（51）では動作主の人称「おまえ」が明示されるが、（52）のように明示されなくても目の前の聞き手に対して「コトハナイ」を用いる例が数多く見られる。このように行為者が二人称のとき、話し手が「（行為者がこれから実行しようとしている）ある行為は不必要である」と聞き手に伝えることによって、結果的には助言する表現となる。そのため、「人を励したり忠告するときによく使う」（グループ・ジャマシイ 1998：123）というニュアンスが出ていると考えられる。

まず、一人称の行為者についてであるが、これは使用場面がある程度限定され、主に以下のような心内発話の文脈中に現れている。話し手自身の行為に「コトハナイ」が用いられた（56）～（57）において、不必要性を強調することによって自己弁解したり反論したりする意識が反映されている（姫野1999）。

(54) しかし、電灯をつけてタンスのとびらをあけた拍子に、もう一つの考えが、ふいに心をかすめて通りすぎた。なにもあわてることはないじゃないか。あらためて新しく乗車券を買いなおせば、それですべてはまるくおさまるはずだ。（（51）の再掲）

(55) まもなく五十歳に手の届く娘ともしょっちゅうやり合っているが、なかなか譲らないとこぼしながらも顔は笑っていた。わたしはなにも困ることはないじゃないかと思い、“よろしかったですね”と合の手を入れて次を待つ。（実著者不明『心に残るとっておきの話』）

(56) 子供じゃないんだから、いちいち報告することもないでしょう。（姫野1999：29『戦争と人間』）

(57) 何も家主の私だけが、あんたの不幸の責任を負わされることはないでしょうが。（姫野1999：28『貧乏者物語』）

次に三人称の行為者であるが、以下の用例を補足する。

(58) しかし、人口わずか600万人の香港人が日本人より豊かな消費生活を送ることができている（3章参照）のだから、日本人が人口減少を心配することはない。（原田泰『経済記事を読みこなす基礎知識』）

(59)逆に、酒や飲みもの類あそこまでいちいちスチュワーデスがサービスすることはない。いくつかの外国航空会社がしているように、ギャレーの一部を機内二四時間バーにしておいて、飲みたい客はそこに来て立って飲ませるようにすれば、移動したいという客側の要求に答えることにもなるはず。(宮脇檀『暮らしをデザインする』)

(60)「あの、なにか」「えっと、えっとですね…三津木先生の彼女でいらっしゃいますか！」案内カウンターの方で、ぷっと吹き出す声がしました。そりゃあおっしゃる通り、新哉の彼女には違いないけど、なにも公共の場所で、それも目一杯大声をあげることはないじゃないの！（辻真先『死体は走るよ国際列車』)

このように三人称行為者の行為に対して、「コトハナイ」を用いると、話し手が「ある行為の実行が不必要である」という意見の表明をしている。眼前に存在しない三人称の行為者の行為に対する発話のため、助言や忠告は成立しないと思われる。さらに、上の(60)のような文脈では、すでに実行した行為に対して話し手が非難するニュアンスが生じると考えられる。

「コトハナイ」が共起しやすいのは二人称の場合とされてきたが、以上のように、一人称や三人称の行為者の行為に対して用いることができる。また、「コトハナイ」という表現は基本的に「ある特定の状況において、当該の事態の実現が不必要だ」という話し手の判断を表すが、行為者の人称によってその基本的意味に付加されるニュアンスには差があることが明らかになった。

3.4.4. 「コトハナイ」の意味・用法

すでに先行研究で指摘されているように、必要を表す「コトダ」を否定にする場合、本来形態的に対立するはずの「コトデハナイ」の代わりに、「コトハナイ」という形式が用いられている。

「コトハナイ」の用法について、日本語記述文法研究会（2003：126－127）では、以下のように整理している。

・制御可能な事態の場合に、それが聞き手の行為であれば、聞き手に対してその行為を免除する文として機能する点は、「なくてもいい」と同様である。

・不必要な事態が実現したことに対する後悔・不満を表すことができる点も「なくても

いい」と同様である。

・話し手のその行為をしないという意向を表すことも難しい。

・コトハナイは、制御不可能な事態の場合には、用いられない。

・状況や規範の上で事態が実現しないことが許容されるという、客観的不必要[37]も表しにくい。（日本語記述文法研究会2003より）

主に規則、法律、状況からの要請などのような客観的不必要性を表す「必要はない」と異なって、「コトハナイ」が「客観的不必要」を表しにくいようである。

(61) 普通のお米は炊く前に洗うが、このお米は、炊く前に洗う必要はないそうだ。（日本語記述文法研究会2003：127）

？普通のお米は炊く前に洗うが、このお米は、炊く前に洗うことはないそうだ。（日本語記述文法研究会 2003：127）

(62) 日本では、成人すれば、結婚するのに両親の許しを得る必要はないそうだ。（日本語記述文法研究会2003：127）

？日本では、成人すれば、結婚するのに両親の許しを得ることはないそうだ。（日本語記述文法研究会 2003：127）

（61）（62）のように、性質（洗わなくてもいい米）や規則（法律上に定めされた結婚の許可の有無）によってすでにその不必要性が定めされており、話し手の主観的な判断が関与する余地がなくなる（小原2009）。「コトハナイ」は先に述べたように、話し手の「当該の事態の実現が不必要だ」という判断を表すものであるため、話し手の判断が関与できない場合には用いることができない。ただし、あくまでも話し手の判断であるため、相手の実際の行動が話し手の判断と食い違う場合、つまり相手がすでに行った行為に対して、不必要性を強調する場合、「コトハナイ」を用いることができる。

(63)「このお米は無洗米だから、改めて洗うことはないんだよ。」（小原2009：75）

(64)「成人すれば自分の意志で結婚できるんだから、いちいち両親の許しを得ることは

[37] 日本語記述文法研究会（2003）において「客観的不必要」とは、「規則、法律、自然の法則など、客観世界の秩序やしくみのありかたとして、その事態が不必要である」と定義されている。

ないのに」（同上）

また、「コトダ」に前接する動詞は意志動詞が中心となるのに対し、「コトハナイ」は、例えば以下に示す通り、「驚くことはない」「恐れることはない」のように、聞き手の心的傾向を述べる場合には無意志動詞が使われるのが基本である[38]。この点から見ると、「「コトハナイ」は、制御不可能な事態の場合には用いられない」（日本語記述文法研究会（2003：127）という記述はやや不適切であると言える。

(65)「何も驚くことはない。このようなすばらしいところに寝起きできることを喜んでいるのだ」（今野敏『封印の血脈』）

(66)「先生がついていれば、誰も恐れることはない。いままでどおりに勉強し、学校に行くんだよ。」（チンギス・アイトマートフ/赤沼弘『最初の教師・母なる大地』）

(67)でも、タイガーシャークの部下の中ではいちばん弱いので、あわてることはない。（『ツインビー完全攻略本』ファミリーコンピューターマガジン編集部1986）

(68)　もちろん、「早く見つけなければ」と焦る必要はないし、すぐに新しい生き方が見つからないからといって落ち込むこともない。（斎藤茂太『うつを気楽に癒すには…』）

(69)危機的状況は想定済みで、焦ることも、怒ることもない、ここまで来たのだから、ここから脱するに必要なことを考えればいい。（Yahoo!ブログ　2008）

さらに、「コトハナイ」文は表向き、事態の非存在を述べる一方で、現実には「こと」で表される事態は既に実現している点で「コトダ」との差異を認めることができる。

(70)一日遅れて、クマに宛てたべつの手紙が届いた。文面はほとんど同じだった。同じことを書くなら、べつべつに宛てることはないのにと、板垣は笑った。（梓林太郎『安曇野殺人旅愁』）

(71)「ああ、そうだわ…。すみません、こんな―」「あなたが謝ることないわ。あとで

[38] 例えば、「慌てる」「怖がる」「驚く」「泣く」「気にする」などである。今回、新潮100冊から集めた「コトハナイ」が含まれる93例の内、「コトハナイ」の前に来る動詞は感情の内容を表す動詞が75例であった。

傷はちゃんと病院で診てもらうから。―誰が撃ったか、見た？」（赤川次郎『泥棒よ大志を抱け』）

(72)女は、ぐったり、それっきりまた黙りこんでしまう。

「どうした？言いかけたことを、途中でやめることはないだろう！（略）」（安部公房『砂の女』）

(73)「よせよ、なにも弁解することはない。ほかの連中よりもおれを信用できるという理由はどこにもないんだからな」（ディーン・R・クーンツ/内田昌之『アイスバウンド』）

（70）～（73）のいずれも、その行為を聞き手が実行している、もしくは実行しようとしている文脈である。こうした場合、「コトハナイ」は進行中の動作の中止を要求する、つまり禁止表現の効果が出てくるのである。

以上の考察をここでまとめてみたい。

「コトハナイ」は、「ある特定の状況において当該の事態の実現が不必要だ」という話し手の判断を表す。また、外的状況や規則などによって一般的に「不必要性」が定められている場合は、「コトハナイ」を用いることができない。なお、「コトダ」はまだ実現されない事態のみに用いられるのに対して、「コトハナイ」の方は、未実現的と既実現的な事態双方に用いられるので、「価値判断」[39]というより「評価のモダリティ」[40]と位置付けるのが適切だと思われる。

3.5. 本章のまとめ

助動詞的な「コトダ」の用法は、形式名詞「「こと」＋「だ」」から助動詞化した「コトダ」への連続した線上に位置すると言える。それに対し、「事態の非存在」と「事態・行為存在の不必要性」との間に連続性があり、不必要を表す「コトハナイ」は「当該の事態・行為が必要事態・行為の領域には存在しない」ことから「事態の不必要」へ移行している

[39] 益岡（1991：53）は「価値判断のモダリティ」が「対象となる事柄に対してそうあることが望ましいという判断を表すものである」と述べている。このモダリティを表す形式として、「ことだ」、「ものだ」「ベキダ」などを挙げている。

[40] 高梨（2006）は「コトダ」を「評価のモダリティ」として扱っている。また「評価のモダリティ」を、ある事態の実現に対する話し手が「必要・不必要/許容される・許容されない」などといった評価を表すものであると説明している（高梨 2002）。

と考えられる。

このように、「コトダ」と「コトハナイ」は、行為者にとって事態の「必要性・不必要性」を提示する点では対応関係を持っている。しかし、後に述べる「ハズ」と比べると、「コト」自体は実質的意味を失い、非常に文法化しているところが目立つ。また、「ハ/ガ」の交替が不可能であることや、二重否定構文も作れないといった点において、「ハズガナイ」、「ワケガナイ」といった形式とはやや異なる性格を持つものとして認識する必要がある。したがって、本稿では、「コトハナイ」という形式を「コトダ」の否定的形式ではなく、一種の否定慣用表現として位置付けることにする。

4. 「ワケダ」とその否定

4.1. はじめに

「ワケダ」については寺村（1984）や松岡（1993）などをはじめ、先行研究で多く言及されているのだが、その否定に関してはわずかな考察にとどまるものがほとんどである。

「ワケダ」を「ワケ＋ダ」と捉えた場合、「ワケダ」の否定は「ワケデハナイ」という形をとるのが自然だろう。しかし、「ワケデハナイ」のほかに、「ワケガナイ」も多用される。例えば、

(1)　彼は今日のパーティーに来るわけがない。（第1章（29）再掲）

(2)　花子が来るからといって、太郎が今日のパーティーに来るわけではない。（第1章（30）再掲）

「ワケガナイ」が使われる（1）では、「彼は今日のパーティーに来る」という可能性それ自体が否定されている。それに対して、「ワケデハナイ」という形になると、「「花子が来る」なら当然「太郎が今日のパーティーに来るだろう」という推論が成り立ちそうだが、実際はそうではないのだ」と話し手が言いたいのである。

本章では、「ワケダ」の意味・用法を再検討した上で、それと対応させる形で、「ワケデハナイ」と「ワケガナイ」の意味・用法を整理し、さらに「～形式名詞（X）ではない」と「～形式名詞（X）がない」の違いから、この二形式の差異が何に由来するのかを論述する。

4.2. 「ワケダ」の意味・用法

「ワケダ」の用法については、これまでに研究が蓄積されているが、まずその基本と言えるもの、寺村（1984）の論文を確認しておく。寺村（1984）は、「ワケダ」を説明のモダリティとして扱い、「ワケダ」の用法を以下の三つに分類している。

a)　あるQという事実に対し、なぜそうなのかを説明するために、明らかな既定の事実Pをあげ、そこから推論すれば当然Qになる、ということをいう言いかた。「･･･

コトニナル」と言いかえができる。

(3)　信吾は東向きに座る。その左隣に、保子は南向きに座る。信吾の右が修一で、北向きである。菊子は西向きだから、信吾と向かい合っているわけだ。(寺村：274 川端康成『山の音』)

b)　Pという聞き手に身近な事実をあげ、その事実は、ある角度、観点から見るとQ という意味、意義がある、ということを聞き手に気づかせようとする言いかた。「言いかえると･･･」というぐらいの軽い感じの場合もある。

(4)　破格の低料金でニューヨークーロンドン間を飛ぶレイカー航空の“空飛ぶ通勤列車”スカイ・トレーンの一番機が二十六日夜、ニューヨークのケネディ国際空港を飛び立った。片道運賃は約二万八千社の六割五分引き。米国と欧州との間がまた近付いたわけだが、これは米英航空業界のダンピング合戦の始まりでもある。(寺村：280　朝日新聞日1977/9)

c)　P→Qという推論の過程は示さず、Qということを、自分がただ主観的にそう言っているのでなく、ある確かな根拠があっての立言なのだということを言外に言おうとする言いかた。乱用すると独断的な、押しつけ的な印象を与える。

(5)　「(広中) たとえば、ぼくらが論文書く時に、非常に論理的なアイディアとか構造の変化をどういうふうにとらえるか、という方法論みたいなものを書くわけね。だけど、その背景には、その論理に到達するまでいろいろ計算しているわけだけど、自分でやらなくても、コンピューターを使えば計算はできるわけだ。(後略)」(寺村：281『広中平祐氏と有吉佐和子氏の対談』)

上に挙げた a) と b) の用法に共通するのは、「帰結としての判断を聞き手に対して提示する」という点であり、寺村 (1984) の「事実 P からの論理的帰結として Q になるという主張を、話し手は相手に言おうとしている、あるいは納得させようとしている」(P283) ということに相当する。しかし、

(6)　（窓が開いているのに気づいて）なるほど、寒いわけだ。

のような「ワケダ」は明らかに聞き手に対する発話とは言えない。寺村（1984）では、この用法に当たる記述がされていない。

「ワケダ」文の用法を記述する前に、まず名詞「わけ」の中心的意味を考えなければならない。「わけ」に関する辞書の記述としては「①意味「この言葉のわけが分からない」②物事の道理「わけのわかった人」③事情。理由。「どういうわけで遅刻したか」（『岩波　国語辞典　第7版』P1614）等が挙げられる。森田（1980）は、辞書に記述されている「わけ」の個別的意味に共通する意味として、「「わけ」は、「複雑に入り組んで見える物事を見分けてとらえた、奥に潜むその事の道筋や道理の流れ。」（P524）としている。この規定に沿って考えると、「わけ」は、表のコトとその裏にあるコトとの間に必然的関係が認められるということに焦点が置かれていると言える。よって、「ワケダ」の基本的意味を「二つの事態間（つまりPとQ[41]の間）に必然的関係があることを認め、その関係成立が妥当であることを示す」と規定することができる[42]。以下、話し手が発話時以前に事態間の関係を認知するかどうかによって、「ワケダ」の文を、①事態間関係を把握する②事態間関係を提示する、といった二つのタイプに分けて記述する。ただし、寺村（1984）の第三のタイプ（Qワケダ）は、事態Pが現れないのが基本であるため、これを「ワケダ」文の派生用法として扱うこととする。

4.2.1. 事態間関係の把握を表す「ワケダ」

この用法を簡単に表現すれば、「話し手が発話以前に認識していないが、ワケダの使用によって事態PとQが必然的関係にあることを認める」ということである。また、事態Qが発話時において認知されるかどうかによって、「ワケダ」の用法をさらに以下の二種類に分けることができる。

✧　帰結必然性の納得

[41] 本稿では、寺村（1984）に従い、「ワケダ」を伴う文・節をQとし、その先行する文・節をPとする。
[42] 重見（2003）は、「一般に「P→Qわけだ」と図示されるように、P（前掲情報）とQの関係表示の意義が「わけだ」に存在する」（P6）と指摘している。つまり、「わけだ」は単にQの叙述部分に付属するものだけではなく、文全体に関わる意義を持っていると言える。

まず、現実の世界において話し手がすでに確認した事態Qに対して、「なぜQであるのか」と疑問に思っていたら、他の事態Pの存在を知り、「Pならば当然Qだ」、つまりPとQの間に必然的関係があると納得する場合、これを「帰結必然性の納得」と呼び、「ハズダ」に関しても同様のことが言える。この用法は、論理上「なぜQであるのか→「PだからQ」→「Qわけだ」と納得（PとQの関係を発見）」という思考過程を経るが、実際の言語表現として表れる時には、(7) のように、Pが省略され、Qだけを表現する方が普通のようである。

(7)　（かぎが違っていることに気づいて）道理であかないわけだ。

(8)　駅前電光掲示板に、台風が接近している旨のニュースが流れていた。なるほど、道理で風がつよくなってきたわけである。（加納朋子『一万二千年後のヴェガ』）

(9)　いってみれば、列車そのものがパッケージ・ツアーという特別列車なのである。道理でトーマス・クック国際時刻表には出ていなかったわけだ。（櫻井寛『アメリカ鉄道夢紀行』）

(10)　a「重役の？」

b「そうなのよ」

a「どうりで、われわれとは違うわけだわね」サワ子が苦笑いを泛べた自分の顔を鏡にうつしながら、どこか自棄っぽい口調で云った。（宮本百合子『舗道』）

(11)　「黙れヨ、ベティ。どんな理由で誰を愛そうと、ボクの勝手だ」「なるほど。マジで愛しちゃってるのね。どうりで最近、カイがぷりぷりしてるわけだわ」（十文字青『薔薇のマリア』）

「道理で」「なるほど」と共起するのはこの用法の特徴であり、話し手が既知の事態Qと新たに認識された事態Pとの間に必然的関係を認めることで、Qを「Pから導きだされた当然の帰結」として再認識する。また、新規導入される事態Pの獲得方法として、自分が直接発見したりする場合もあれば、聞き手から提示したりする場合もある。このように、いわゆる納得の「ワケダ」文は非対話文と対話文の両方に用いられることができる。

✧　**帰結必然性の確認**

「わけ」に先行するQは発話以前に認識されていない事態である点においては、この用法は、「帰結必然性の納得」との違いが見られる。また、聞き手が不在可能の「納得」の「ワケダ」に対して、「帰結必然性の確認」を表す「ワケダ」は対話文に用いられるのが基本である。つまり、話し手が既に認識している事態、あるいは相手が提示した事態Pを受けて、Pと必然的関係にあるQを、新しく把握した事態として聞き手に差し出すのである。本稿ではこれを「帰結必然性の確認」と呼ぶ。(12)～(15)のように構文上、「それじゃ(それで)」「つまり」「すると」などの表現と呼応して、相手が提示した事態Pから導き出されたQという事態が自分の認識と一致していることが示される。また、二つの事態間の関係について自分の理解が正しいかどうかを相手に確認するため、終助詞が後接する「わけですか」「わけですね」といった形式がよく用いられている。

(12)小澤　九ヵ月上なんですか。

大江　正確には、七ヵ月ちょっとのはずですよ。

小澤　それじゃ、もうすでに六十五歳になっとるわけですね。(大江健三郎/小澤征爾『同じ年に生まれて』)

(13)左側の悪魔が、にやっと笑っていった。「それで、悪魔の君たちが、ここへやってきたということは、私になにか用があるわけだね？」(横田順彌『奇想展覧会』)

(14)「明日の九時からです。明朝また来てください」

「つまり、もう終わったわけですか」

「そうです」女子職員は計算機が示した総額を、メモに書き記した。

(小津薫『死を招く料理店』)

(15)「他の二人より前に？」「いえ、その間でした」「つまり、二番目だったというわけだ[43]ね」(赤川次郎『華麗なる探偵たち』)

(16)「あなたはどこの山岳会ですか」パーティーのひとりが聞いた。

「どこの山岳会にも入ってはいません」

「すると、全くの単独行主義ってわけですね、遠くから、来たんですか」

(新田次郎『孤高の人』)

[43] 「トイウワケダ」と「ワケダ」の違いは4.2.3節で後述する。

4.2.2. 事態間関係の提示を表す「ワケダ」

これは話し手が既に認知しているPとQの間の必然的関係を、聞き手に示す用法である。本稿における「事態間関係の提示」は、「ある事態Pに対して、Pと必然的関係にある事態Qの存在を聞き手が認識していないと判断し、そのQを聞き手にも納得しうるもの[44]として提示する」という意味を表す。「ワケダ」を用いることによって聞き手に納得してほしいという話し手の姿勢が感じられるのである。よって「ワケダ」を伴う文は、単に推論の帰結Qを述べることではなく、「なぜ（Pから）Qに至るのか」という論理の流れから帰結Qの正当性を主張することにある。本稿では、このような「ワケダ」の用法を「帰結必然性の説明」と呼んでおく。

(17)イギリスとは時差が8時間あるから、日本が11時ならイギリスは3時なわけだ。（グループジャマシイ：638）

(18)フランスの香水は葡萄酒のアルコールの原料から造るのだから酒と香水は同家族のわけだ。（薩摩治郎八『洋酒天国』）

(19)一匹の牝が一度に五匹の子を生むとすれば、春までに地下組織のメンバーは秋の五倍の数にふくれあがるわけだ。（開高健『パニック』）

(20)「《あさかぜ》が十五番線のホームにはいってくるのは、十七時四十九分で、発車は十八時三十分です。四十一分間ホームに停車しているわけです」（松本清張『点と線』）

(21)「乗船客名簿は、甲・乙両方に名前住所を書きます。駅ではこれを切り離して、甲片は発駅に保存、乙片は船長が受け取って到着駅に引きつぐのです。だから函館駅にもあるわけです」（松本清張『点と線』）

（17）のように、一般的知識（「時差が8時間あるから、日本が11時ならイギリスは3時である」というもの）を、話し手と聞き手が共有する前提としている例が典型的であるが、一般性を欠けているものもある。つまり、事態PとQの必然的関係は典型的には、前提（理由）・帰結（結果）といった因果関係を構成するが、表裏関係を構成する場合もある

[44] 岡部（1994）は、「わけだ」を「聞き手にもそれと納得しうるものであると、話し手がみなす」態度を示す」とし、永谷（2010）は、「わけだ」の意味を「「筋道」を「聞き手が納得すること」として差し出す表現」（P30）と規定している。

（松岡1993）。

(22)（ＣＣＭ３）が完成したので、第一話や第二話の中でご紹介した大気・海洋結合モデルによる温暖化予測計算が可能になったといっても過言ではありません。しかし、その反面、台風等の変動が極端に少なくなってしまったという困った問題も生じてしまったわけです。（丸山康樹『河川文化』）

(23)相手のことを尊重すると同時に、自分のことも主張していきます。つまり相手の思いと自分の思いとが、それぞれ絡み合いながら話は進められていくのです。言い換えれば、お互いに自己を主張し合いながらそれをうまく両立させて過ごしているわけです。（柴崎正行『カウンセリングマインドの探究』）

(24)「人間というのは、なぜかいったんカネを遣い始めると、習慣になってしまう。例えばブランド品。一つ買うと、すぐ別のが欲しくなる。で、また買うと、さらに別のが…。要するに、キリがないわけだ。」（横田濱夫『お金が「殖えて貯まる」30 の大法則』）

上の（22）～（24）は、寺村（1984）の指摘する「言い換え」の用法に当たるものである。「その反面、言い換えれば、要するに」といった表現を伴って、聞き手に示された事態Ｐの裏に潜在する事態Ｑを気付かせるために用いられている。(22）では、「大気・海洋結合モデルによる温暖化予測計算が可能になった」(P）と「台風等の変動が極端に少なくなってしまったという困った問題も生じてしまった」(Q）の関係は一般性を失い、「ワケダ」を伴う文を事態Ｐの新たな捉え方として示すことになる。このように、事態間の必然性における認識の差が大きくなるにつれて、話し手の主観がより強く反映されている。

4.2.3. 「ワケダ」の派生用法

このタイプの「ワケダ」文には、本来の「ＰとＱの関係を説明する」という意図が薄れ、事態Ｐが明示されないことが特徴である。つまり、寺村（1984）が「P→Q という推論の過程は示さず、Q ということを、自分がただ主観的にそう言っているのでなく、ある確かな根拠があっての立言なのだということを言外に言おうとする言いかた」(P285）として

いるものを、本稿では「根拠のある立言」[45]を表す用法と呼ぶ。話し手が聞き手も自分と同様な認識ができるという見込みに立ち、自分の発話が論理的な根拠のある事実として確かに存在することを強調するときに用いられることが多い。

(25)だれだって、おいしいものはお腹いっぱい食べたいわけで、「ここでやめよう」と食欲を抑制して、副作用がないようなものがでてくればいい。(飯島裕一/相澤徹『健康ブームを問う』)

(26)何しろ入学から卒業六年間通うわけだから、自宅から十分で行けるというメリットは大きい。（三田誠広『パパは塾長さん』）

(27)通常は、署名で手紙は終わるわけだが、そのあとで何か思い出した時には、Ｐ．Ｓ．（＝postscript「追伸」）として書きそえる。(岩崎春雄/アーマーLアンドルーJ『現代人のための英語の常識百科』)

(28)第三章でも書きましたが、郊外の幼稚園では、近くの森に散歩に出かけることはごく日常的に行われています。これが森の幼稚園では毎日のこととなるわけですが、毎日新しい発見があり、森に暮らす小動物の息づかいや、木々や草花の変化に子供たちはアイデア豊富にいろいろな遊び方を発見するようです。(高田ケラー有子『平らな国デンマーク』)

(29)ただいまの点でございますが、先ほど大臣からお話があったわけですが、備蓄政策の面から言いましてこのような方法でもって通産当局の方においてやっていくというような線が仮に出ますならば、それに呼応する安全、保安面に対応して考えていく必要があると思います。(小池説明員『国会会議録』第084回国会)

(25) のように、話し手（書き手）が「だれでも、おいしいものはお腹いっぱい食べたい」を「一般常識だ」「言わなくても知っていると思う」であることを、「ワケダ」という形で提示する。(28) ～ (29) の方は、文脈の流れに既に現れた事態や相手が述べた事態Qについて再確認している。このような常識や既知情報の提示[46]を表す「ワケダ」は、文末ではなく、「わけだが/わけで/わけだから」などの形で文中に現れることが多い。

[45] この用語は適切ではないかもしれないが、他に適当なものが見つからなかったため、便宜的にこう呼ぶことにする。

[46] 劉（1996）では、「わけだ」の用法には「既知情報の再提示」と「常識・慣例・顕在の事実の提示」という下位分類が挙げられている。

もう一つ、日常的な会話によく現れる「相手の知らないことを教える」(奥田1986:210)という意味あいを持つ「ワケダ」文を見てみよう。例えば（30）は、漢方薬の権威の会談での発言で、専門家としてその内容を熟知している話し手が、「直接形」で話してもよいのだが、聞き手に対してそれを新しい情報として伝えようとする態度を「ワケダ」によって表されている。

(30)たとえば婦人で顔がのぼせて足が冷えるという状態のとき、加味逍遥散という薬があるわけですね。使用目標の中に、「これは上に熱がいって下が冷えているときのに使う薬ですよ」というのが最初からあるわけです。」（菊谷豊彦「対談・お茶の間の時間」北川1995：95）

(31)で、このエレクトロニクスは、付加価値は非常に高いわけです。で、したがって、値段も非常に高いわけですが、一方、製品が小さくて軽いために、このコストに占める輸送費のウェイトというのは、それほど高くないわけです。（後略）（NHK教育番組　吉川編2003：133）

(32)僕は監督になっても、やはり攻める野球をしたいわけですよ。バットでガンガン、相手チームをたたいて生きてきた人間です。攻めて攻め抜いて投手陣を助ける「攻撃野球」をやりたい。その点で長嶋（茂雄）さんに近かったと思う。（少納言　東京朝刊　気流　2010.05.27）

北川（1995）はこのような「ワケダ」が談話のモダリティ標識を表すものと述べ、彼は神尾（1990）による「情報のなわ張り理論」の観点から、話し手が「自分のなわ張り内に属する情報[47]を内部者として解説・説明しながら外部者に伝えようとする発言の場で現れるもの」（P95）と説明している。また、談話のモダリティ標識の「ワケダ」文におけるPが発話の動機またはその背景となる発話者の判断を表し、Qは判断・動機によって惹起され正当化されて発話行為そのものであると提言している（北川1995：96）。

確かに、談話のモダリティ標識の「ワケダ」は、聞き手にとって新規情報を提示する点において、「根拠のある立言」の「ワケダ」とは異なるふるまいを見せているが、話し手

[47] 神尾（1990）によれば、自分のなわ張り内に属する情報は、話者自身の直接体験、自分の職業的あるいは専門領域における基本的情報や身近な人物についての個人的事実などに関連したものを含むという（P22）。

自身の発話を正当化させるために用いられる点においては、「根拠のある立言」の延長線にあると捉えることが可能なのである[48]。

以上のように、「ワケダ」は因果関係を中心に用いられ、そこから論理関係が弱い派生用法へと広がっていく。まず、事態間関係を把握する「ワケダ」には、「帰結必然性の納得」と「帰結必然性の確認」の二つの用法がある。それに対し、事態間関係を提示する場合、「ワケダ」における事態ＰとＱの論理性関係が成立する状況には段階性がある。事態ＰとＱを必然的関係にあるとする前提を話し手･聞き手が共有している場合は､「ワケダ」を用いてＱを聞き手も納得しうるものとして提示することになる｡事態間の関係性における話し手・聞き手の共有度が低くなると、「ワケダ」を伴う文を事態Ｐの新たな捉え方として聞き手を気付かせるために用いられている。さらに、事態ＰとＱが一体化する場合、話し手が「ワケダ」を用いて事態Ｑを「確かな根拠があること」として相手を説得するために使われている。

これに基づき、本稿では「ワケダ」文と先行する節との論理関係や「ワケダ」の意味・用法を次の表 4-1にまとめている。

	用法	事態ＰとＱの関係	事態ＰとＱの関係の認知の順番	推論の関係になる・ならない
事態間関係の把握	帰結必然性の確認	因果関係	Ｐ → Ｑ	なる
	帰結必然性の納得	因果関係	Ｑ→（Ｐ→Ｑ）→Ｑ	なる
事態間関係の提示	帰結必然性の説明	因果関係	Ｐ → Ｑ	なる
派生用法	根拠のある立言	/	（Ｐ）Ｑ	ならない

表 4-1「ワケダ」の用法のまとめ[49]

4.2.4. 「トイウワケダ」と「ワケダ」の違い

吉川編（2003：135）は、「トイウワケダ」と「ワケダ」はすべての用法で置き換えがで

[48] 寺村（1984）では、この二つのタイプの「ワケダ」文を同じく「根拠のある立言」として扱っている。
[49] 蒋（2010：109）の「ハズダ」の用法のまとめ表を参考にして作成した。

きると指摘している。例えば、

(33)大雪が降ったから、バスが不通になったわけだ。(結果)

(34)大雪が降ると、バスが不通になるわけだ。(結果)

(35)バスが不通になった。大雪で通れないわけだ。(原因・理由)

(36)10年ぶりの大雪だったそうだ。バスが不通になったわけだ。(納得)

(37)バスが不通になったということは、歩いて行かなくちゃいけないわけだ。

(捉え直し)

(38)バスが不通になったわけだから、集まりに来る人も少ないはずだ。(ほのめかし)

(以上の用例は吉川2003：135より)

これらの文の「ワケダ」を「トイウワケダ」に変えると、次のようになる。

(39)大雪が降ったから、バスが不通になったというわけだ。(納得)

(40)大雪が降ると、バスが不通になるというわけだ。(納得または捉えなおし)

(41)バスが不通になった。大雪で通れないというわけだ。(納得)

(42)10年ぶりの大雪だったそうだ。バスが不通になったというわけだ。(納得)

(43)　バスが不通になったということは、歩いて行かなくちゃいけないというわけだ。

(捉え直し)

(44)バスが不通になったというわけだから、集まりに来る人も少ないはずだ。

(捉え直し)(以上の用例は吉川2003：135より)

それでは、「トイウワケダ」と「ワケダ」はすべての場合で交換可能の是非について、実例を通して分析していきたい。

まず、前置される要素からすると、以下のような傾向が見られる[50]。

✧　**他人の論理や解釈を伝達する場合、特に直接引用や間接引用の「、というわけだ」のように読点を伴う時、「という」が必須となる。**

[50] 鈴木(1999)は、「トイウワケダ」と「ワケダ」の前に来る形式について調べ、間接引用や意志形がつく時、「トイウ」がつくことが多いと指摘している。

(45)それをきっかけに、その後維持活動（PKO)」として自衛隊法が改正され、海外の紛争地などに出かけるようになったが「危険な地域には入らない」という位置づけである。「戦争に巻き込まれるから」というわけだ。(細川隆一郎『怒りを忘れた日本人』)

(46)そうすれば、近い将来、本当に赤い糸らしきものが出会わせてくれるというのだ。これを“赤い糸たぐりよせ作戦”という。信じれば、奇跡は起こる、というわけだ。（夏木マリ『かっこいい女！』)

(47)去年はそれを現地で取材することになったんですわ。みなさんのお金がこんなふうに使われています、というところを、実際の映像で見せよう、というわけですわ。（板東英二『プロ野球ここを喋る奴はウチから出ていけ』)

(48)「江戸前のすし」は江戸の前の海でとれた新鮮な魚のすし、というわけだ。(轡田隆史『「江戸」と「明治」と「戦争」と』)

✧　**「ワケ」の前に命令形が先行する場合、「ワケダ」の用例が見つからなかった。**

(49)アメリカが主張しているのは、輸入数量制限など関税以外の措置をすべて廃止し、その分、高い関税をかけてもいいというもので、これを関税化というんだ。でも、一部は低い関税にしなさいと言っていて、低い関税を割り当てる枠をミニマム・アクセスということもある。アメリカの主張では日本のコメの場合、国内需要の三％でスタートし、十年後に五・二五％まで拡大しろというわけだ。(少納言　東京朝刊　1991.06.08)

(50)要するに、山本五十六は本気で戦争をしていない。陸軍と戦争している。陸軍に責任転嫁するために、艦砲射撃をしてこいというわけだ。(日下公人『人間はなぜ戦争をやめられないのか』)

✧　**動詞の意志形ウ/ヨウが前接する時には、「～う/ようというわけだ」のように「トイウ」がつくことが基本である。また、推量の「～だろう/でしょう」が先行する場合、「トイウワケダ」しか用いられない。**

(51)大容量のデータ送信が可能なCATV網を使い、プレステやプレステ2のゲームソフト、

さらには音楽や映像などのデジタル・コンテンツの配信を行なっていこうというわけだ。(滝田誠一郎『ゲーム大国ニッポン』)

(52)檻に入れられて展示されている生きた動物を見れば、客は素材の新鮮さに疑いを持つまいというわけだ。(ジョー・シャーロン/田中昌太郎『上海の紅い死』)

(53)事前に気狂いの汚名をわたしにおっかぶせておこうというのだ。将来食っても、無事安泰であるばかりか、有難がる人も出てくるだろうというわけだ。(魯迅/高橋和巳『世界の文学セレクション36』)

(54)万引きをしても、見つかった時にお金を返せばいいんだろうとか、品物を返せばいいんだろうとしか考えていない中学生、高校生が増えてきている。そういう親が増えてきている。万引きをして見つかった。元の所へ返せばいいでしょうというわけです。または、万引きをして食べてしまった。(渡辺和子『「ひと」として大切なこと』)

続いて「トイウワケダ」の用法・機能を見ていく。まず、話し手が事態間の関係を把握する場合、(55) のように、相手の発話Pを受け、その前提となるPから推論すると必然的に帰結Qを導き出す「帰結必然性の確認」として考えられる。これを「ワケダ」に置き換えても意味的にはほとんど変わらない。

(55)a：川本さん、車大きいのに買い替えたらしいよ。

b：へええ。子供が生まれて前のが小さくなったってわけか。(グループ・ジャマシイ 1998：641)

b'：へええ。子供が生まれて前のが小さくなったわけか。

(56)a「いや、他の営業部門でもやりたい案件はたくさん持っているから、各営業部の部長クラスは反撥するだろう、それを無視して、常務、専務クラスだけを納得させても石油開発は息の長い事業だから、一、二年すれば必ず、非難ごうごうのゲリラ戦になり、社内で潰されてしまう、そこの対策も併せて考えるのが、今日のシンガポール会談です」

b「なるほど、シンガポールから、東京丸の内本社の攻略作戦を考えるというわけですか」(山崎豊子『不毛地帯』)

b'「なるほど、シンガポールから、東京丸の内本社の攻略作戦を考えるわけですか」

(57)a「では、鬼舞い連の現在の正式な人数は？」

b「ちょうど三十名」

a「ということは、この鬼哭の里の農家数は三十戸というわけですね？」（井上やすし『四捨五入殺人事件』）

a’「ということは、この鬼哭の里の農家数は三十戸なわけですね？」

次に、「トイウワケダ」は先行内容についての補足説明、つまり事態間の必然性について説明する場合である。これも「ワケダ」との置き換えが可能だと思われる。

(58)a電流量（Ａｈ）とはバッテリーの容量を表す数値。読み方は「アンペアアワー」。この値が大きければ大きいほど、バッテリーの容量が大きい、つまり長時間使用できるというわけだ。（実著者不明『徹底使いこなし電動ドリル&ドライバー』）

a’電流量（Ａｈ）とはバッテリーの容量を表す数値。読み方は「アンペアアワー」。この値が大きければ大きいほど、バッテリーの容量が大きい、つまり長時間使用できるわけだ。

さらに、以下の三例は「なるほど」と共起することから、一見「納得」のように見えるが、実際は帰結Qの必然性について相手に確認を求めるものである。すなわち、「帰結必然性の納得」を表す「トイウワケダ」の実例が見つからなかった。

(59)「朝一番の博多発のひかりは、九時十五分にしか大阪へ着かないけど、岡山まで行っておけば、岡山からは、六時ちょうどにひかり100号が出ているわ。これに乗ると、新大阪着は六時五十八分。三十分あれば空港に行けるので、八時に大阪空港を発って松山へ八時五十分に着く飛行機にゆうゆうと乗れるでしょう？」「なるほど。博多―岡山―大阪―松山というわけですね。これなら可能ですね」（山村美紗『殺人を見た九官鳥』）

(60)「いや、他の営業部門でもやりたい案件はたくさん持っているから、各営業部の部長クラスは反撥するだろう、それを無視して、常務、専務クラスだけを納得させても石油開発は息の長い事業だから、一、二年すれば必ず、非難ごうごうのゲリラ戦になり、社内で潰されてしまう、そこの対策も併せて考えるのが、今日のシンガポ

ール会談ですよ」「なるほど、シンガポールから、東京丸の内本社の攻略作戦を考えるというわけですか」（山崎豊子『不毛地帯』）

(61)「生まれたのは、その翌年ですが…」「そうか―なるほど…。まるきり戦後っ子というわけか…」大田原顧問は、感心したようにうなずいた。（小松左京『首都消失』）

(61)は、発話以前に二つの事態間の必然的関係を話し手が認識していない場合である。相手の発話P「生まれたのはその翌年」ということをもとに、話し手がそこから新しく導き出した事態Q「まるきり戦後っ子」との間の必然的関係を理解するのである。一方、(62a)のように、

(62)a（かぎが違っていることに気づいて）道理であかないわけだ。

（第4章（7）の再掲）

b？（かぎが違っていることに気づいて）道理であかないというわけだ。

発話以前にQを認識した場合、PとQの論理性関係に関する知識が話し手の認識の領域[51]にあるため、聞き手の論理を引用する「トイウ」を前接すると不自然な文となる。

では、「トイウワケダ」の文は常識や既知情報の再提示という用法や談話的な機能を持っているのであろうか。以下のように、「ワケダ」文を「トイウワケダ」に換えると、ニュアンスが変わったり、非文となったりすることが分かる。

(63)a ただいまの点でございますが、先ほど大臣からお話があったわけですが、備蓄策の面から言いましてこのような方法でもって通産当局の方においてやっていくというような線が仮に出ますならば、それに呼応する安全、保安面に対応して考えていく必要があると思います。（第4章（29）の再掲）

b＊ただいまの点でございますが、先ほど大臣からお話があったというわけですが、（後略）

(64)a コンピュータなんて昔は存在しなかったわけだから、なければないですむものかもしれない。（葉加瀬太郎『顔』）

[51] 永谷（2011）では、これを「道筋が話し手の領域にある」としている。

b ＊コンピュータなんて昔は存在しなかったというわけで、なければないですむものかもしれない。

(65)a僕は監督になっても、やはり攻める野球をしたいわけですよ。（第4章（32）の再掲）

b＊僕は監督になっても、やはり攻める野球をしたいというわけですよ。

（63）のように、前に述べた内容を既知情報として再提示する場合、その内容を根拠のある立言と判断するのは話し手であるため、引用を表す「トイウ」をつけることができなくなる。「トイウ」がつくと、他人の論理を自分が代わりに伝えているように思われる。さらに、(65)のように、聞き手の知らない情報を提示する場合は、話し手（書き手)が論理を述べる主体となることが基本である。

それでは、「トイウワケダ」と「ワケダ」の違い[52]は果たしてどこにあるのであろうか。鈴木（1999）は、「『トイウワケダ』には、他人の論理や解釈を伝達する機能があり、他の人が言っている論理をもう一度わかりやすく言い直したり、相手の立場から相手の論理を組み立て、確認する時に使用されると考えられる。一方、「ワケダ」には、自分の論理や解釈を説明する機能がある」（P114－115）と考えている。つまり、二つの事態間の論理的道筋が話し手の領域にある場合は、「トイウ」をつけないのが基本であり、一方論理的道筋が聞き手の領域にある場合は、「トイウワケダ」と「ワケダ」の置き換えが可能となる。

4.3. 「ワケダ」の否定

寺村（1979）は、ムードを表す形式と否定辞との関係を分析・整理し、日本語のムードを表す助動詞を、その内側（先行する用言）と外側（それ自体）についての否定の可能性という観点から検討している。そこでは、「ワケダ」については、「内側（先行する用）と外側（それ自体）」ともに「肯定・否定両形可能」に分類している。しかし、外側の否定には「ワケガナイ」と「ワケデハナイ」[53]の二形式があり、それらの具体的な差異については詳しい考察がされていないので、以下ではこの点を検討する。

[52]「トイウワケダ」と「ワケダ」の違いについて、鈴木（1999）に詳しい。

[53] 「ワケニハイカナイ」という形式は、前接する事態の実現が不可能という意味を表し、「ワケダ」の基本的な意味から離れるため、本稿では一つの慣用表現として扱い、考察の対象から除くこととする。

4.3.1. 「ワケデハナイ」の意味・用法

「ワケデハナイ」に関して、寺村（1984） は、「ワケダ」の否定の一つの形式として扱い、「まずPという発言をし、自分が示したPに基づき、聞き手はそれならQだろうと推論すると予測（想像し）、その推論を否定するというプロセス[54]」（P287）と述べ、「ワケデハナイ」を推論の否定として考えている。吉川編（2003）では、「ワケデハナイ」によって否定する推論が、「結果」（本稿で言う「帰結」[55]）の場合もあれば、「原因・理由」の場合もあり、さらに、「言い換え」の場合もあると記述している。

✧ 帰結の否定

「帰結の否定」は「ワケダ」の「P だから、当然 Q」という基本的意味に対応する用法である。以下の例は、先行文 P を根拠して、通常導かれやすい（推論されやすい）帰結 Q が成り立たない（適切ではない）ことを示している。

(66) 名門校には入れたからといって、その後に順風満帆の人生が待っていたわけではありません。（田部井昌子『資産ゼロから大成功する「魔法の粉」の使い方』）

(67) しかし、どんなに記者が他社よりも早くニュースをとってきても、それだけでただちに新聞が読者の手もとに届くわけではない。（杉山隆男『メディアの興亡』）

(68) 戦争は武力によって相手国を屈服させ、自国の意思に従わせることを目的とする。だから、国家は戦争には勝たなければならない。しかし、勝つためには何をしてもよいわけではない。（山手治之『国際法概説』）

(69) 日本は十八歳から二十三、四歳で最終学歴を卒業、二十五、六歳で結婚という形が一般的だが、誰もが同じように成長するわけではない。大学を卒業して何年もたってようやく自分の進む道が見えてくる人もいるのだ。（斎藤茂太『茂太さんの100の知恵』）

（66）の「ワケデハナイ」の意味構造を分析すると、P〈名門校に入れた〉という発話を

---

[54] 推論のプロセスは以下の通りである。
話し手：「P」
聞き手：「(P なら） Q」（または、話し手が想像する）
話し手：「Qわけではない」（寺村1984：289）

[55] 既定の事態を表す「結果」に対して、本稿では、論理上の「帰結」という名称を使用する。

受けたため、聞き手は、Q〈その後の人生が順風満帆〉という結果になるだろうと推論してしまう。つまり、Pから予想されるQが否定される表現形式である。また（69）のように、P「二十五、六歳で結婚という形が一般的だ」から予想されるQ「誰もが同じように成長する」を否定し、続いてQでないQ’「大学を卒業して何年もたってようやく自分の進む道が見えてくる人もいる」を示すこともある。

✧　原因・理由の否定

「ワケデハナイ」による否定には、「Pから予想されるQを否定する」の他、「結果Qから推定される理由Pを否定する」タイプもあると考えられている（松岡（1993））。そこで、松岡（1993）は、以下の（70）の「ワケデハナイ」の意味構造を、〈文四郎が来た〉Qは、P〈知らせるのが礼儀と考えた〉Pからではないという理由があることを表現するものであると分析している。しかし、（70）の例は〈小柳に知らせるのが礼儀と考えた〉Pを提示することによって、〈文四郎がそれだけで来た〉という考えられやすい内容を否定すると理解することができる。つまり、帰結といい、原因・理由といい、「ワケデハナイ」は、聞き手（読み手）の推論を先取りして予想し、それが実際とは異なると打ち消す表現である。

(70) 旧禄復帰の沙汰を小柳に知らせるのは礼儀だが、文四郎はそれだけで来たわけではなかった。知らせておけば、そのことはいつか江戸にいるおふくの耳にもとどくだろうと、文四郎は考えていたのである。（松岡1993：67『蝉しぐれ』）

(71) 彼は四十代の半ばになって、初めて二週間ばかりをパリで過しているのだった。仕事があるわけではなかった。こういう呑気な時間を過せるとは思ってもみなかったのに、機会は不意に来た。（岡松和夫『口紅』）

(72) 八雲は、ぷいと横を向く。

しかし、本気で怒ったわけではない。ただ、この子は、好奇心が、並外れて強いだけだと思った。（荒巻義雄『猿飛佐助』）

✧　言い換え

「ワケデハナイ」による否定の対象は、典型的には因果関係を表すものが多いが、同じ事物の表と裏の関係を否定する場合もあるとされている（松岡1993）。

(73)そこで吉宗は、「幕府政治を、幕府の創始者、神君家康公のむかしに戻す」と宣言した。つまり、おれの改革政治は、五代将軍綱吉公の政策に反対するわけではない。（童門冬二『田沼意次と松平定信』）

(74)描写は、描写されたものが本当だとしてだましたり、完全な幻影を導くのが問題なのではなく、描写という事実のみが残る、すなわち演じられたという、把握可能な事実が残るのであって、演じられた内容が残るわけではない。（長木誠司『フェッルッチョ・ブゾーニ』）

（73）では、P「吉宗は、『幕府政治を、幕府の創始者、神君家康公のむかしに戻す』と宣言した」ということについて、Q「吉宗の改革政治は、五代将軍綱吉公の政策に反対する」というもっとも陥りやすいであろう推論を打ち消しつつ解説するものである。

以上の用法の他に、工藤（1997）[56]では、「ワケデハナイ」には「程度否定」という特殊な用法を持ち、前件のPが普通現れないこと、推論が関与しないや、よく「全部」「しょっちゅう」といった程度副詞と共起することが特徴であるとしている。つまり、「ワケデハナイ」文に先だって、話し手の意識にある前提が存在し、その前提となる部分が事実と異なっているということが「ワケデハナイ」によって表示されている。しかし、工藤(1997)の挙げている程度否定の用例は、同時に推論の否定の用法と見なすことができる。（75）において、P「選考の中心が学長だ」という先行文からQ「学長がすべてを決める」と推論しやすいが実はそうではない、という帰結の否定でもある。（76）においては、帰結の否定とは言いがたいが、先行文P「娘は二人とも正月用の晴着を着ていた」というとQ「その二人は美しかった」と推論されそうであるが、実際はそうではないとも分析できる。このように、程度否定の「ワケデハナイ」には推論が関与しないという工藤（1997）の説明がやや不適切である。

(75)「京成は国立でしたね」

「ですから選考の中心も学長でしょうが、でも学長一人で、すべてを決めるというわ

[56] 工藤（1997）は、「「ワケデハナイ」が、先行文から導き出される結論を否定して現実との食い違いを表す＜結論の否定＞と、推論が媒介しない否定で＜対立関係＞の中間（肯定の可能性を残した否定）を表す＜程度否定＞、という二つのバリアントを持つ」と指摘している。

けでもありません[57]。」

(76)　娘は二人とも正月用の晴着を着ていた。二人ともとくに美人というわけではなかった。（工藤1997：86）

このように、文脈や発話状況から考えると、程度の否定を推論の否定の派生と見なすことができる。ただ、現実は聞き手が推論するほどの程度に至っていないことが「ワケデハナイ」によって表されている。

(77)「テニス、お上手ですね。よくなさるんですか。」

「いや、そんなにしょっちゅうするわけじゃないんです。」（吉川2003：139）

(78)抗生物質には細菌を殺したりその繁殖を阻止する働きがある。ただし、すべての病原体にたいして抗生物質があるわけではない。（髙石昌弘　加賀谷熙彦ほか『現代保健体育』）

(79)ポランニーは近代社会において交換が支配的な経済活動になったことを認めるが、かといってそこで贈与がすっかり失われたとするわけではない。（竹沢尚一郎『共生の技法』）

例えば、（77）では、P「テニスが上手」という事態から、Q「よくテニスをする」と想定されるかもしれないが、実際はそうではないという推論の否定でもある。つまり、「普段テニスをする」ということは認めるが、「よくする」のではないということを表す用法である。そのため、「ワケデハナイ」という形式は想定表現(Q)を訂正する機能を持っている（工藤 1997）。本稿では、これを「推論内容の訂正」と呼んでおく。例えば、（80）のように、不適切な想定Qに代わるべき適切なQ’が後続していることが見られる。

(80)ローンの分担金にしても、全員が同じ金額を負担していたわけではない。妹たちよりは兄たちが多く負担する。（実著者不明『親が子に望んでいること子が親にできること』）

(81)去年まではエアコンなんて午後の一番暑い時間帯になるまで我慢してたし、そうで

[57] 工藤（1997）では、「というわけだ」を「わけだ」と同様に扱っているようである。

なければ図書館にでも行って涼むという感じで過ごしていた。別に特別貧乏だったわけじゃないけど、何が起こるかわからない母子家庭に贅沢は敵。（天野かづき『只今、キミに求愛中！』）

以上、「ワケデハナイ」の用法を見てきた。「ワケデハナイ」主として事態間の関係を説明するモダリティとして用いられていることが分かった。このように、帰結や理由の否定であれ、言い換えであれ、すべて論理的関係いわゆる「事態間必然性の否定」として処理することができる。したがって、「ワケデハナイ」の基本的意味を「想定されうる事態間の関係の成立が妥当ではないことを示す」ものとして規定することができる（「ワケデハナイ」の用法を以下の表 4-2にまとめる）。

	用法	事態ＰとＱの関係	事態ＰとＱの関係の認知の順番	推論の関係になる・ならない
基本用法	事態間必然性の否定	因果関係	P → Q	なる
派生用法	推論内容の訂正	因果関係	(P)　Q	なる

表 4-2「ワケデハナイ」の用法

4.3.2. 「ワケガナイ」の意味・用法

「ワケガナイ」という形式では、「わけ」の原因·理由という語彙的な意味がまだ生きている。この種の文では、「わけ」に連体修飾的にかかっていく文にさしだされている、つまり、当該の事態を成立させる原因や理由がないと、話し手の判断をさしだす[58]。こうすると、「ワケガナイ」によって考えられうる可能性としての事態の存在あるいは実現を否定する。よって、本稿では、「ワケガナイ」の意味を「当該の事態が論理上の帰結として成立し得ないこととして語る」と規定する。例えば、以下のように、

(82)彼は怪我をしたから、今日の試合に出るわけがない。

(83)知っていたわけがない。ぼくたちだって、数時間前にユイから聞かされたばかりの

[58] 寺村（1984）では、「ワケガナイ」は「Q という命題を成り立たせるような P はどこにもない」という言い方のつづまっている形としている（P285）。

情報だ。(霧舎巧『ラグナロク洞』)

未確認の事態「今日の試合に出る」が実際に成立しているかどうかについて、話し手によって、当該の事態が論理上の帰結として成立しえないと語ることで、その事態が現実の世界において成立する可能性は全くないと主張する用法である。

ところで、「彼が今日の試合に出る」という事態が現実に成立する可能性がないと主張することは、「彼が今日の試合に出ない」という事態が未来に成立するのは確実であることを意味する。それでは、(82) と (84) の違いはどこにあるのだろうか。

(84)彼は怪我をしたから、今日の試合に出ないわけだ。

(82) の場合は、「彼は今日の試合に出るかどうか」という事態が発話時においてまだ確認されていないが、「彼はけがをしたから、今日の試合に出ないのが当然だろう」という判断を表す表現となる。これは基本的には「ハズガナイ」と置き換えられる。

一方、(84) は、「彼はまだ来ていない」という事実があり、なぜ「彼は今日の試合に出なかった」ことについて聞き手に説明している場面に用いられている。つまり、「彼は怪我した」という事実から導かれた「今日の試合に出ない」という帰結の必然性を解釈する表現となる。

続いては、「ワケガナイ」と名詞「わけ」との関わりを見ていきたい。前にも述べたように、「ワケガナイ」の「わけ」には「理由」という本来の意味がまだ残されている。Q「ワケガナイ」は、Qという結論が導かれる理由Pが存在しないから、そこから結論Qが成立する可能性を強く否定することになる。「ワケガナイ」の実際の使用においては、「わけ｛は／が／φ｝ない」といった形態の外、

(85)「あのひと、自分で飲みながら商売してたんだから、もうかるわけなんかないけどね」(五木寛之『青春の門』)

(86)ガーゴイルの鼻の下には口がある。犬の形をしているのだから当たり前だ。だが、口に穴は空いていない。石像なのだから当たり前だ。食べられるわけなどないではないか。(田口仙年堂『吉永さん家のガーゴイル』)

（85）（86）のように、「ワケ」と「ナイ」の間に副助詞が入ることもあるため、「ワケガナイ」における「わけ」の名詞としての意味が強く残存していることが窺える。

このように、「ワケガナイ」が基本的には「当該の事態が論理上の帰結として成立し得ない」ことを表し、「ワケデハナイ」ほど、用法の多様性を持たないことを示している。

4.3.3. 「ワケデハナイ」と「ワケガナイ」の違い

4．3．1と4．3．2で示したように、「ワケデハナイ」は「想定されうる事態間の関係の成立が妥当ではないことを示す」ものであって、「ワケガナイ」は「当該の事態が論理上の帰結として成立し得ないことを語る」ものであった。それでは、この意味の違いは何に由来するのであろうか。ここでは、加藤（1994）の考えに従い、種類を異にする二つの文、つまり「存在の表現」の否定「～Ｘガナイ」と「題目―解説文」の否定「～Ｘデハナイ」の相違点から説明を試みる。加藤（1994）では、「～Ｘガナイ」は、Ｘという事態の存在の有無を問題にする形式で、実在しうるＸの部分について、それが存在したり実現したりする可能性がないと述べる形式であり、「～Ｘデハナイ」は、存在が前提とされているＸに対する叙述（描写）の仕方を問題にする形式であると指摘している[59]。すなわち、存在の表現に当たる「ワケガナイ」は、帰結が存在するかしないかに焦点を当て、帰結が存在しないことを述べる形式である。一方の「ワケデハナイ」は、ある帰結が存在することを前提とした上で、その帰結についての叙述の仕方が適切ではないとして、叙述の妥当性を否定する形式と言える。例えば、

(87) この店はいつも客がいっぱいだが、

a 特別に料理がうまいわけではない。

b＊特別に料理がうまいわけがない。

(88) a 彼女は彼がお金持ちだから結婚したわけではない。（加藤1994：19）

b ＊彼女は彼がお金持ちだから結婚したわけがない。

以上の例は、普通推論されうる帰結についての叙述の仕方を否定する例であるから、「～Ｘではない」の形式が選択される。（87）では、aは「『お客がいっぱいの店はふつう料

[59] 益岡（1991）では、この二つの種類の否定文をそれぞれ「存在判断型」「叙述様式判断型」と名付けられている。

理がうまいだろう』というのが一般的な推論だ。しかしこの推論は現実とは異なり、適切ではない」という論理の流れを表している。それに対し、bの「～Xガナイ」にすると、「店がいつもお客でいっぱいなのは、当然、料理がうまいわけだ」という論理関係を意識した上で、再び「料理がうまい」という帰結の存在を否定するのは矛盾を起こしてしまうため、bを選択することができなくなる。

一方、次の（89）のように、論理上の帰結「わたしに飽きる」という事態の存在を強く否定する文脈では、「～Xガナイ」の形式が適切である。

(89)「あなたもいつか、わたしに飽きるでしょう」

「そんなことはない。これだけ好きなのに、

a 飽きるわけがないだろう」

b＊飽きるわけではないだろ」（渡辺淳一『失楽園』）

4.4. 本章のまとめ

以上の考察から、次のような結論が導かれる。

「ワケガナイ」は、論理上の帰結の不成立を表す形式であり、肯定の「ワケダ」とは形態上の対応を持っていない。また、「ワケダ」が「二つの事態間に必然的関係があると認め、その関係成立が妥当であることを示す」という基本的意味を持つのに対して、「ワケガナイ」は「当該の事態が論理上の帰結として成立し得ない」という意味となるのが基本であり、両者は意味上の対応関係も持っていない。この点から、「ワケガナイ」という形式は、「ワケダ」の否定というより、一つの否定慣用表現として認めたほうがよいように思われる。

一方、「ワケデハナイ」は、事態間の関係についての想定が存在することが前提であり、「想定されうる事態間の関係の成立が妥当ではないことを示す」形式である。このように、肯定の「ワケダ」とは、形態上のみならず、意味上の対応関係が認められる。したがって、「ワケデハナイ」は「ワケダ」の典型的な否定形として考えることができる。

5. 「ハズダ」とその否定

5.1. はじめに

文末モダリティ形式「ハズダ」には、それに対応する否定として「ハズガナイ」[60]と「ハズデハナイ」の二形式がある。よく知られているように、この二つの形式が表す意味はそれぞれ異なっている。また、「ハズダ」が複数の異なる用法を持つのと同様、「ハズガナイ」と「ハズデハナイ」にも用法のバリエーションが存在している。それでは、「ハズガナイ」と「ハズデハナイ」の諸用法は、「ハズダ」のすべての用法と対応するのか、一部の用法にのみ対応するのか。あるいは、肯定形とは別の用法と考えるべきなのだろうか。本稿は、「ハズダ」の意味・用法を再整理し、肯定と対照させる方法により、否定の「ハズガナイ」と「ハズデハナイ」を考察する。

5.2. 「ハズダ」の意味・用法

「ハズダ」の否定を分析する前に、まず肯定の「ハズダ」の意味・用法を確認しておきたい。

森田（1980）は、「ハズダ」の意味・用法を「①条件からの当然の帰結として予想する場合」「②条件からの当然の帰結が現状と食い違っている場合」「③条件の真相を知って現状が当然の結果であったと悟る場合」の三つに分けている。太田（2005）は、「ハズダ」の文脈を「Ⅰ現実の状態が未確認」「Ⅱ現実と認識が一致しない」「Ⅲ現実と認識が一致する」の三つに分類し、話し手が「どのように」そして「何のために」ハズダを用いるか、といった文脈的な観点から「ハズダ」の機能を分析している。

本稿では、太田（2005）の研究に従って、「ハズダ」の基本的意味を次のように規定する[61]。

「ハズダ」：話し手の認識では、当該の事態が現実の世界において当然成立することとして示す。

---

[60] 「ハズガナイ」という形の他に、「ハズハナイ」、「ハズモナイ」という形式もよく見られる。これらの形式を同様に扱ってよいのかについて、5.3.2 節で考察する。

[61] 太田（2005）では、ハズダの基本的意味を「論理や既存知識に基づいて考えた結果得られる自らの認識を示す」こととしている。

「ハズダ」を伴う文に差し出されている事態は、現実としての事態ではなく、話し手の認識の世界において描かれている事態である。そのため、認識のあり方と現実のあり方との関係の中で、「ハズダ」の様々な用法を生み出すのである。本稿で考察する「ハズダ」が使用される文脈として基本的に太田（2005）の枠組みを利用し、次のような三つの場合に分けることにする。

a）　認識と現実が一致するかどうか確認されていない

b）　認識と現実が一致しない

c）　認識と現実が一致する

以下、この三つの場合における「ハズダ」の用法について考察していく。

5.2.1. 現実が確認されていない場合

現実の状況が未確認である場合に用いられる「ハズダ」は、その典型的な使い方として、既知の情報に基づき推論をして得られた判断を表すものである。現実の状況が未確認であっても、「Pが与えられれば普通は論理的にQ[62]という結論が出る」と話し手自らの認識を示すと、基本的には「みこみ」[63]として働くことになる。「確信的判断」を表す副詞である「きっと」、「おそらく」などと共起し、「ハズダ」は「話し手の認識では当該事態の成立が当然だと判断する」という意味を表す。例えば、例（1）のように、「十年以上も看護婦をしている」という既知情報から考えた結果として「人間社会の裏面はおおかたしりつくしている」という事態が現実の世界において当然成立することとして述べられ、話し手の判断に間違いがなければそのような展開になることを主張するのである。

（1）　十年以上も看護婦をしているから、人間社会の裏面はおおかたしりつくしている<u>はずだ</u>。（石川達三『洒落た関係』）

（2）　最近はウェブサイトで情報収集ができるから、きっとちょうどいいレースが見つかる<u>はずだ</u>。（鈴木悠矢『スポーツサイクルカタログ』）

（3）　これだけ暗いんだ。おそらく、何も見えない<u>はずだ</u>。（コルネーリア・フンケ/

[62] PとQはそれぞれ根拠と結論を表す。

[63] 「みこみ」は高橋（1975）の用語によるが、高橋では詳しい説明がされていない。寺村（1984）は「みこみ」を表現するハズダを「あることがらの真否について判断をもとめられたとき、あるいは自分で判断をくだすべき場面に直面したとき、確言的にはいえないが、自分が現在しっている事実（P）から推論すると、当然こう（Q）である」（P266）と規定している。

浅見昇吾『魔法の声』)

実際の用例を見る限りでは、上のように「P（根拠）→（推論）→Q（結論)」という推論の過程を明示する「ハズダ」はそれほど多くなく、むしろ次のように結論のみ述べられるものの方が多いようである。言い換えれば、自分の認識ではQという事態の成立を確信のあるものとして表明するものである。

(4)　「…人間、草の根食ったって、ひと月やふた月は生きられるはずだ。」(大岡昇平『野火』)

(5)　料理人が新しいメニューを考え出す時には、きっと頭の中で簡単なシミュレーションをしているはずだ。(斎藤広達『鋭い頭を持った、世界で通用するMBA的課長術』)

(6)　正さんは、この日記を読みなさいと、私に手渡したわけではない。どんな人間の心のなかにも、人に知られたくない一面があるはずだ。(三浦綾子『道ありき』)

先行研究において「予定」や「記憶」と呼ばれている（篠崎 1981、松木 1994、岡部 2004 など)「ハズダ」では、例外的な事態が起こらなければ、あるいは話し手の記憶に間違いがなければ、当該の事態が現実に当然成り立つという認識が表されている。本稿では、両方とも「みこみ」の派生用法として見ておく。

(7)　「帰りの船もきめてしまった。あと百四十三日で神戸につくはずだ。」(武者小路実篤『愛と死』)

(8)　十二時二十分。予定では、シンヤの乗った飛行機はすでに着陸しているはずだ。（乙一『失はれる物語』)

(9)　百坪ほどの敷地に建てられた、これといって特色のない家だった。通夜のときの記憶では、一階に十五畳のリビングがあって八畳の和室と接しているはずだ。(鈴木光司『らせん』)

(10)「夜分、お邪魔していました、山脇さん」主婦たちのリーダー格の女が言った。隣組の班長の家庭の主婦だ。山口松子という名だったはずだ。(佐々木譲『ストックホルムの密使』)

5.2.2. 現実と認識が一致しない場合

一方、すでに現実の状況が確認されながら話し手の認識と一致していない場合に、「ハズダ」が用いられている。話し手が現実に対する意外や残念などの気持ちは「ハズダ」の「道理上、そうあるべきである」という意味から派生したものと考えられる。つまり、話し手の考えた通りではない現実に対して、話し手は自分の認識の方に正当性を感じていて、結果的に現実のあり方に正当性を感じられないということを表明する。この用法を岡部（2004）に従い、「事態成立の正当性の主張」と呼ぶことにする。このような「ハズダ」を「ニチガイナイ」に置き換えることができない。

（11）（いつも成績がいい彼はクラスで最低点数を取ったと聞いて）彼の成績はもっといいはずだ[64]。

（12）伸子は気疲れがでた故か、毎朝床離れが辛かった。十分眠ったはずなのに、目が覚めても筋肉が弛緩しているのを感じ、背中がベッドに張りつたように起き上がり難い。（宮本百合子『伸子』）

（11）の場合、「普段彼の成績がいい」という前提から、「今度彼の成績もきっといいだろう」という推測が導かれる。ところが、実際彼の成績は思ったほどよくなかったため、予想と現実の間に食い違いが生じ、ここから「不審、不可解」のニュアンスが生じる。また、（13）～（15）のように、「ハズダ」は、「自分は当然こうであると考えているのに、現実の状況はそれに反している」という文脈上使用されることも多い。

（13）翌三日、本来の予定ならば民政党は田中内閣打倒大会を開催するはずだった。しかし、急遽浜口内閣祝賀大会になった。（波多野勝『浜口雄幸』）

（14）「あっ、さいふがない！たしか、ここにおいておいたはずだが…」（丘修三/石井睦美『おめでとうがいっぱい』）

（15）昼間の記憶では、もっと傾斜がゆるやかだったはずだが、こうしてみると、ほとんど垂直にちかい。（安部公房『砂の女』）

[64] 森田（1980）の用例を参考し、修正した。

さらに、「ハズダ」が「ハズダッタ」へ変わることで、人称制限がなくなることに注目したい。「ハズダッタ」は、予測した事態が未成立・未実現だったため、現実に対する残念や不満などの感情が同時に表出することになる。

(16) というのは（このことは最初に書いておくべきだったが）、ぼくはこの夏、カリフォルニア大学に留学することになっていた、そして渡航はほんとうなら先月末のはずだったが、ぼくの場合、ヴィザの問題をめぐってトラブルがおこったために、いまだにぼくは宙吊りのままになっているありさまだった。（倉橋由美子『聖少女』）

宮崎（2002）が述べるように、「聞き手も当然それを知っているにもかかわらず、それと矛盾した言動をしているというような場合には、「ハズダ」は、確認要求相当の機能をもつ」（P50）こととなる。ただし、「だろう」による「確認要求」とは異なり、これは、話し手がはっきりと記憶している出来事を再確認する場合に用いられ、自分の認識の正当性を主張し、念押し的な意味を帯びている。本稿では、これを〈みこみ〉の「ハズダ」の語用論的意味の派生と考える。

(17) 「いい加減にしてくれ！これ以上話しかけるな！私を面倒に巻き込むのは、これがはじめてじゃないことは、君自身よく知っているはずだ。私は、自分自身のことで精いっぱいなんだ。子供に付き合っている暇なんかない！（清水節『ラストコンサート』）

(18) 「昨日、大橋さんという人からまたお手紙がきていたわね。おまえは私と約束したはずよ。あの人とのお付き合いはやめるはずだったでしょう。」（石川達三『青春の蹉跌』）

(19) 「お祖父様」

真鳥がびっくりして振り返る。

「ここへ来てはならんと、言っておいたはずだぞ、真鳥」

聡一郎は厳しい表情で言った。（六道慧『羅刹王』）

5.2.3. 現実と認識が一致する場合

以上の用法とは少し様相を異にする現実が確認されており、また話し手の認識が現実と一致する場合で用いられる「ハズダ」があり、これは高橋（1975）では〈さとり〉と呼ばれている用法で、本稿ではこれを「事態成立の納得」と呼ぶことにする。この場合、「道理で」「なるほど」のような副詞と共起するのが特徴と言える。また、「ハズダ」が過去形になったり、文中に用いられたりすることはできない。

(20) 娘の家で手料理をごちそうになっていたということなのだ。道理で、帰ってくるのが遅いはずだ。おかわりもしないはずだ。（橘香いくの『迷宮の記憶』）

(21) その時間に突如覚醒したことを、話した。
「そうだったのか。やっぱりなあ。道理で胸騒ぎがしたはずだ。電話をすればよかったね」（出久根達郎『犬と歩けば』）

(22) 再び流れるような動きで材料を入れ、先刻と同じように美しい姿勢でシェーカーを振り始める。林道が思わず呟いた。「なるほど、女性に人気があるはずだ」林道の言葉に笑いながら、川本がカクテルグラスにギムレットを注ぐ。（麻生玲子『眠る体温』）

(20) の場合、「帰りが遅い」ことについての疑問にはじまり、その原因を探るなかで「娘の家で手料理をごちそうになっていた」という事実を知り、ならば「帰りが遅い」という現実も当然だと納得する、という思考過程を経ている。

また、現状に不審を感じている聞き手（読み手）に対し聞き手の疑問を取り除いたり、事情説明をしたりする場合もある（例23－25）。

(23) 「いやだったら。わあ、穢い」「そりゃ酒臭いはずだろ、だってそいつが二日酔の正体なんだから。」（伊丹十三『女たちよ！』）

(24) 「ずいぶんお上手でいらっしゃいますのね。よっぽどお習いになりましたの？」
「いいえ、わたくし、やる事はあの、前からやっておりますけれど、ちっとも上手になりませんのよ、不器用だものですから、……」
「あら、そんなことはありませんわ。ねえ浜さん、あんたどう思う？」

「そりゃ巧いはずですよ、綺羅子さんのは女優養成所で、本式に稽古したんから。」（谷崎潤一郎『痴人の愛』）

(25) もう春だというのに、まだ一面に雪が積もっている。それもその筈、ここは北アルプスの山腹である。（松定ちよし『原本枕草子に操られたキツネとタヌキ』）

以上のように、「ハズダ」は〈話し手の認識〉と〈現実〉とに何らかの距離が存在する状況下で使用され、その〈認識〉と〈現実〉との関係によって三種類の用法に分かれることがわかった。これを、次の図 5-1 としてまとめられる。

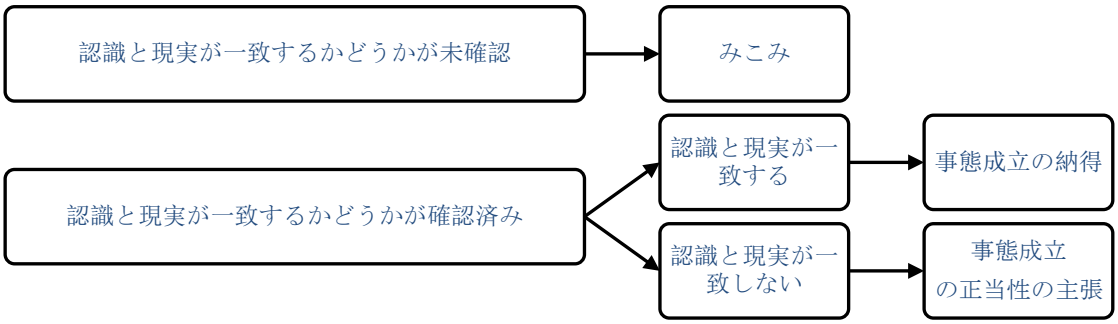


図 5-1　ハズダの意味・用法

5.3.　「ハズダ」の否定

「ハズダ」の否定には、内側の否定と外側の否定[65]があり、ここでは、外側の否定である「ハズガナイ」と「ハズデハナイ」に限定し考察する。

[65] 寺村（1984）は、「ナイハズダ」と「ハズガナイ」との違いについて、「一般的にいうと、「ナイハズダ」は、「ハズダ」というムードの形式が包み込んでいるコト、その陳述の素材となっている命題の否定、いわば「内側の」否定であり、「ハズガナイ」は、「ハズダ」というムード自体の否定、つまり、否定的なムード、「外側の」否定だといえるかと思う。前者を「propositional―negation」、後者を「Modal―negation」というふうにもいえるだろう。」（P271）と述べている。

5.3.1. 「ハズガナイ」の意味・用法

「ハズダ」の外側の否定としては、「ハズガナイ」が典型的である。本稿ではその基本的意味を「話し手の認識では、当該の事態が現実世界において当然成立し得ないこととして示す」ものだと規定する。「ハズガナイ」には、「ハズダ」と同じく、〈現実が確認されていない〉ものと〈現実が確認されている〉ものの二つのタイプが存在する。まず、〈現実が確認されていない〉場合、

(26) こんな難しい問題は、小学生には分かるはずがない。

(27) しかし、われわれが歩いているとき、転倒しないために意識して頭を働かせているだろうか？決してそんなことを考えながら歩いているはずがない。（三浦宏文『ロボットと人工知能』）

(28) ドイツ海軍、というかヒトラーは「大戦艦ビスマルクを沈められて」以来、「海に浮くモノ」を信じられなくなった。加えて、「まさかアメリカが参戦するはずがない」と固く信じていた。（渓由葵夫『奇想天外兵器番付』）

のように、一般常識や道理を組み合わせて考えれば「小学生にはこんな難しい問題が分かる」「われわれが転倒しないように意識して考えながら歩いている」といった事態が論理的な結論として成立し得ないことを主張している。また、事態成立の可能性が低いことを表す「まさか」「決して」と共起することから、「ハズガナイ」は、当該の事態が現実の世界における成立の可能性を否定すると言える。

ところで、「ハズガナイ」という可能性の否定は、以下の「ナイハズダ」との違いはどこにあるのだろうか。

(29) こんな難しい問題は、小学生には分からないはずだ。

これについて、岡部（2004）は、「おそらく」のような推量を表す副詞と共起できないことから、「ハズガナイの場合は、ある種話し手の断定を表すのに対して、「ナイハズダ」はあくまでも話し手の「みこみ」すなわち「推量」を表すにとどまっている」（P37）と指摘している。つまり、「ハズガナイ」の場合は、当該の事態が成立する可能性がほぼゼロ

になるが、「ナイハズダ」の場合は、その可能性がまだ多少あると考えてよい。また、意味的には似ているように見えるが、「ハズガナイ」と「ナイハズダ」は常に無条件で言い換えられるわけではない。「ハズガナイ」は、「ハズ」によってその以前に来る事態をいったん概括し、事態の存在を否定するものであり、「ナイハズダ」は、「ハズダ」という判断の内部に否定の要素を孕んでいる。例えば、

(30) aしかし本当はどの程度まで嗅ぎつけたのか。アニタにはかつて一度も会っていないはずだ。それは明瞭な事実だ。（池田満寿夫『エーゲ海に捧ぐ』）
b＊アニタにはかつて一度も会っているはずがない。

(30a) では、「一度も」が「会っていない」にかかっているが、(30b) では「一度も」が「～はずがない」にかかるため、不自然な文になる。

一方、〈現実が確認されている〉の「ハズガナイ」について、まず〈事態不成立の正当性〉の用法として考えられるのは次の (32) のようなものである。

(31) （いつも不合格の彼が、期末テストで満点を取ったと聞いて）うそ？彼が満点を取れるはずがないよ。

(32) 「よくもわたしに向かって、静かになんて言えるわね、このクソったれ！百万ドル以上もする宝石が盗まれたのよ！」「こんなこと、起こるはずがないのに！」アルベルト・フォルナッティが憤然として言った。（シドニィ・シェルダン/中山和郎/天馬龍行『明日があるなら』）

(33) 待合室へ走りこんできたわたしが見えなかったはずはないのに、女は知らん顔をして窓口を閉めた。（志水辰夫『生きいそぎ』）

「実際に彼が満点を取った」ことが確認された上で、「彼が満点を取ることはありえない」という話し手の判断を述べる場合、それは話し手の予期しなかった現実に対して、話し手は自分の判断に妥当性を感じている。つまり、現実が確認されているにも関わらず、話し手が自分の判断をあえて提示するのは、その両者の食い違いに対する驚きや疑問などの気持ちを表すためである。本稿では、岡部 (2004) に従い、この用法を〈事態不成立の正当性〉と呼ぶことにする。

次に、〈事態不成立の納得〉として、高橋（1975）は「～スルはずがなかった」[66]を挙げている。それに対し、松木（1994）、岡部（2004）は、「～スルはずがない」には「事態不成立の納得」の用法があると述べている。

（34） 先生自身の経験を持たない私は無論其処に気づく筈がなかった。（高橋1975:81）

（35） これじゃ落ち着いて勉強できるはずがない。ひどい騒音だもの。（松木1994：4）

（36） （まずいと評判の、客の来ないレストランの料理を実際に食べて）
なるほど、この味じゃ、お客が来るはずがない。（岡部 2004：37）

（34）～（36）の例では、「ハズガナイ」の前に来ることが発話時以前にすでに確認された事態であるという点で、〈実現可能性の否定〉と異なる。また、（36）について、岡部（2004）は「話し手は、実際に料理を食べてみて〈お客が来る〉ということはでは決して成立しえないことと初めて認識し、それによって、目の前の状況において〈この店にお客が来ていない〉のは当然の帰結であると納得している」（P38）と説明している。

現代書き言葉均衡コーパス「少納言」で調査したところ、次のような例が収集された。前後の文脈から考えると、（37）（38）では、「事態不成立の納得」としての解釈が可能になると思われる。

（37） むろん食物も食べるから毎日三〇〇〇カロリー近く食べていたことになる。これでは痩せるはずがない。太るのが当然である。（東海林さだお『なんたって「ショージ君」』）

（38） 冷蔵庫の中身も、たらの子・すじ子・つくだ煮というものでした。これでは食欲が出るはずがありません。体によいはずがありません。（佐藤禮子/馬場良子『ケ

[66] いわゆる〈納得〉の時点は常に現在であり、過去形をとることはできないと思われる。松木（1994）では、「ハズガナカッタ」のように過去形となる場合、現在そのように納得する根拠がこれまでの経緯にあったということを強調しようとする、過去に向かう視点が存在すると解釈している（P10）。言い換えれば、「ハズガナカッタ」を「ハズガナイ」に変えても、視点の違いが生じるだけで意味的にはほとんど変わらない。しかし、今回集めた用例を見る限りでは、すべての実例は〈可能性の否定〉であり、〈事態不成立の納得〉としての例が見つからなかった。例を一つ挙げておく。

．熱力学の第一法則が発見されるまで無数の人がこれに類した永久機関を作るために生涯を費やしたが、無論できるはずがなかった。人間は、人口システムの管理は自分でやってきた。（立花隆『エコロジー的思考のすすめ』）

アワーク入門』)

なお、「ハズガナイ」の「ハズ」は明らかに名詞である事実は無視できないであろう。まず、「ハズガナイ」が実際の運用において、「はず｛が／は／も／φ｝ない」といった形態の外、

(39) あのひとがわたしになにも告げることなく、去っていくはずなどない。(篠田真由美『長編超伝奇小説』)

(40) シャンパンに比べて安価に違いないヴァン・ムスーが、シャンパンよりうまいはずなんかないじゃないか。(藤原万璃子『ワイルド・ローズ』)

(41) そんなはずはたしかにない。しかし、ここで見られることは、物言わぬけものにしても世界の魔性を本能的に知覚するという事実である。(ハーマン・メルヴィル/八木敏雄『白鯨』)

と、ハズとナイの間に副助詞や副詞が入ることもある。さらに、(42)(43)では、「～う/よう」は、「ない」と呼応して、「ハズ」の前に位置する事態が現実的に存在しないことを強調するものであり、「ハズ」の存在が否定されている。このようなことから、「ハズ」の名詞としての意味がある程度残されていると指摘できる。

(42) 弥生時代にはまだ国家がないのだから、国境もあろうはずがない。(真島節朗『海と周辺国に向き合う日本人の歴史』)

(43) 出産や育児のために、女性たちが休職することに問題があろうはずはない。(上野万梨子/実著者不明『sesame』平成14年5月号)

以上、「ハズガナイ」の意味・用法について見てきた。図示すれば図2としてまとめられる。

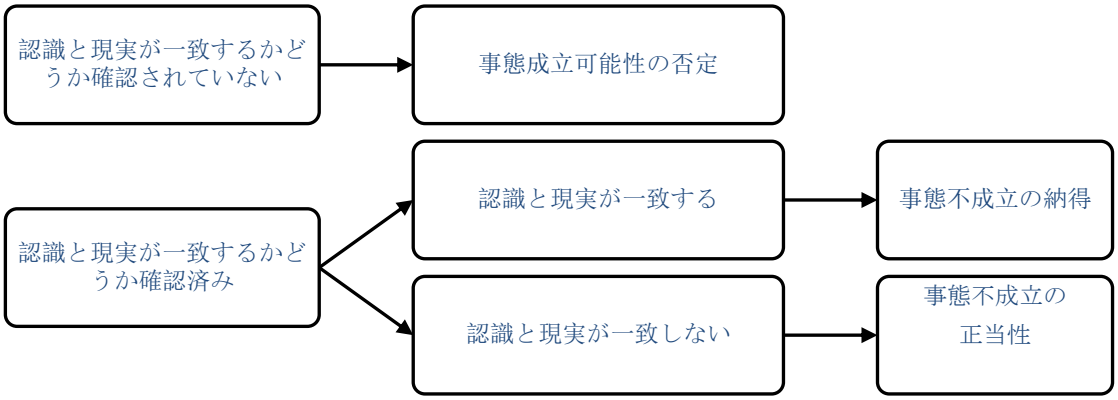


図 5-2 ハズガナイの意味・用法

5.3.2. 「ハズガナイ」の他形式

実際の使用上、「ハズガナイ」の他、「～はずは／もない」といった形態も存在している。以下の例は、類似した文脈で同じ動詞「ある」の意志形「あろう」に後接しているように、三形式に差はなく、相互に入れ替えることが可能と思われる。

(44) とはいえ、11人もの家族を養っているパパに、カネなどあろうはずがない。(福沢諭『誰も描けなかったピナたちの物語』)

(45) よって、胤度にはもはや子のあろうはずはない。(第1章 (5) の再掲)

(46) よくよく考えてみれば、このような、古埃を被った商店街に、デザイン用品を商う店など、あろうはずもない。(いしいしんじ『白の鳥と黒の鳥』)

少納言コーパスでの調査の結果、「ハズガナイ」の用例が最も多く 557 例あり、「ハズハナイ」と「ハズモナイ」はそれぞれ 320 例、195 例だった。また、この三つの形式の前に置かれる要素はほぼ同じように制限がないし、意味的には置き換えもできるようである。よって、「ハズハナイ」、「ハズモナイ」という形式は、ただ格助詞「が」の部分に取り立て助詞「は」「も」が介入して、意味的には「ハズガナイ」と同様に扱っても問題がない

と考えられる。

(47) これ以上、人間たちの間で暮らさせることは、彼女にとって幸せであるはずがない。(水野良『ファンタジー王国』)

(48) それはないですね。うちの番屋付近は『国有地』となっているので、アイヌ共有地であるはずはないですね。」(堀内光一『アイヌモシリ奪回』)

(49) オンネベシは文四郎につがれた酒を、ぐびっと、らんぼうにのんだ。うまい酒であるはずもなかった。(木暮正夫『シャクシャインの戦い』)

5.3.3. 「ハズデハナイ」の意味・用法

本稿では、「ハズデハナイ」の基本的意味を、「確認された事態は、話し手が論理的に予想していた事態とは異なる」と規定する。例えば、

(50) (起動スイッチを押しても起動しない機械を前にして)
おかしい。こんなはずじゃない。(第1章：32)

(51) 昭和三〇年代に結婚した当時は、明治生まれのしっかりとしたしゅうとめのもとで、嫁は一つの機械、働くものというような雰囲気で、「こんなはずじゃない」という思いをずっともっていました。(小林満州子『地域でとりくむみんなで育てる介護保険』)

また、「ハズデハナイ」は、現実が確認された事態について述べるものであり、結果を受けての発話が多いため、「ハズデハナカッタ」という形の発話が大半を占める。このような「ハズデハナカッタ」には次に示す二つの用法があると思われる。まず、(52)～(55)は、〈予想との食い違い〉に分類できるものである。

(52) ―おかしい。こんなはずじゃなかったのに。
それからの展開も、予想外だった。(秋月涼介『紅玉の火蜥蜴』)

(53) 「こんなはずではなかったのに」と後で後悔しないためには、事前の検討を十分に行うことが大切です。(小川正樹『絵でわかる超入門原価計算』)

(54) 浜の停車場の小さいのに驚き、汽車の小さいのに驚き、銀座通りの家屋の低く粗

末なのに驚いた。こんなはずではなかったという気がした。これはだれもよくいう事である。（寺田寅彦『柿の種』）

(55) 「今になってみると、よくここまで来たものだと思えてならないわ。私こうなるはずじゃなかったんですもの。自分の気持ちがはっきり見えるのよ。」庸三はその瞬間はっとした。（徳田秋声『仮装人物』）

次の（56）と（57）は「予定との食い違い」に分類できるものである。

(56) しかし、誰にもそれとわかる一つの変化は意外に早くきた。大正九年五月十日の総選挙に、予想を裏切って楡基一郎は落選したのである。この年、選挙は行われるはずではなかった。新年早々新装なった壮麗な国技館、もはや雨天順延などということのなくなった国技館の桟敷を持った基一郎は、養子を未来の横綱として送りこんでいることもあって、上々の機嫌で客を招待したものだ。ところが片方では普選要求の声が激しくなっていた。普選を迫る民衆は演説会を開き、示威行進をし、衆議院、首相官邸に殺到した。この圧力に堪えかねた原内閣は、二月末、急転直下衆議院を解散したのである。（北杜夫『楡家の人びと』）

(57) 彼はまだそれほど強くなかった。だからまだ合宿に参加するはずではなかったという。けれど彼が自ら、合宿に参加したいと願い出たのだ。（有森裕子『わたし革命』）

なお、(58) については、〈予定〉とも〈予想〉[67]とも解釈できる。

(58) 車夫は心得て駆け出した。今までと違って威勢があまり好過ぎると思ううちに、二人の俥は狭い横町を曲って、突然大きな門を潜った。自分があわてて、車夫を呼び留めようとした時、梶棒は既に玄関に横付になっていた。二人はどうする事も出来なかった。その上若い着飾った下女が案内に出たので、二人は遂に上るべく余儀なくされた。「こんな所へ来る筈じゃなかったんですが」と自分はつい言訳らしい事を云った。（夏目漱石『行人』）

[67] 〈予定〉と〈予想〉との違いについて、岡部（2004）が詳しい。

「来る所」に関しては、自分の行く店でもありなんらかの候補を予定していたと考えられるが、どのような店に最終的に導かれるかということは、車夫に任せておいたため、それが期待どおりではなかったのである。生じた望ましくない事態の提示により、〈予定〉は〈予想〉が外れたという意味に転じる。

すでに先行研究で指摘があるとおり[68]、「ハズデハナイ」という形式は、「～ハズデハナイ」という形での使用は少なく[69]、多くの場合「～ハズデハナッカタ」という形で用いられる。現代書き言葉均衡コーパス少納言における調査は、以下のような結果となる[70]。ここでは、収集した用例を挙げておく。

形式	用例数
ハズデハナイ（ハズジャナイを含め）	4
ハズデハナカッタ（ハズジャナッカタを含め）	50

表 5-1 少納言における「ハズデハナイ」と「ハズデハナカッタ」の用例数

(59) 昭和三〇年代に結婚した当時は、明治生まれのしっかりとしたしゅうとめのもとで、嫁は一つの機械、働くものというような雰囲気で、「こんなはずじゃない」という思いをずっともっていました。（(51) の再掲）

(60) ボールに手は当たらないし、当たったかと思えば変なところに飛んでいくし・・・本当はこんなはずじゃないのに！それなのに、サーブだけは妙に調子がいいとう矛盾wはい、４つ目。（少納言　Yahoo!ブログ2008）

(61) 基本的に「文化が違う＝言葉が違う」ことを忘れずに。教職員のニーズをしっかり聞き取ることが大切となる。着任当初はお互いに「こんなはずではない！」という思いを抱くことは多い。（前田由紀子『教師とカウンセラーのための学校心理臨床講座』）

[68] 高橋（1975：81）など。

[69]「ハズダ」の否定形として、「ハズデハナイ」となるのは可能な形であるが、実際には「こんなはずではない」の他、確認を求めたりあるいは反語的な表現にのみ使用されている。実例から見ると、これは結果的に肯定の「ハズダ」（「ハズダロウ」）に置き換えられるものと捉えてもよい。以下に例を挙げる。

・もうわたしには失うものなんか、なにもないはずじゃない。そうでしょ。（西澤保彦『フェティッシュ』）

・「えっじゃないわよ。敦己君は風邪を引いていたんでしょう。肉体は共有しているわけだから、あなたにも影響があるはずじゃない」（愛川晶『網にかかった悪夢』）

[70] 調査対象は書き言葉表現を中心としているが、「ハズデハナイ」という形での使用が少ないことが分かる。

(62) 玄関から上がる。客部屋畳が積み上げてある。その畳を二枚、床板の上に敷いた。女はその上にあがって帯を解きはじめる。

「どうぞ、あなたも」と言った。娘であるはずではない[71]。もう二十歳を過ぎている。人の妻でもない。(峰隆一郎『円四郎斬鬼剣』)

5.4. 「ハズガナイ」と「ハズデハナイ」の違い

前節で述べたように、「ハズガナイ」は「話し手の認識において当然成立しえない事態」という基本的意味を持つのに対し、「ハズデハナイ」は「確認された事態は話し手が論理的に予想していた事態とは異なる」ということを表すものである。それでは、この意味の違いは何に由来するのであろうか。ここでは、加藤（1994)、岡部（2004）の考えに基づき、種類を異にする二つの文、つまり「～形式名詞（X）ガナイ」と「～形式名詞（X）デハナイ」の違いに着目する形で、差異を抽出していく。「～Xガナイ」は、Xの存在の有無を問題とする形式で、Xの部分が成立したり存在したりする可能性がないと述べる形式であり、「～Xデハナイ」は、存在が前提とされているXについての叙述の当否を問題にする形式なのである。

そこで、「ハズ」という名詞の意味に留意する必要がある。「ハズダ」を構成する形式名詞「ハズ」は本来「矢の根もとの、弦にあてがう部位」という実質的意味に由来し、「矢筈と弓の弦がぴったりと合うところから、うまく適合すること。転じて、物事が当然そうなるという道理。」(『広辞苑」（第六版『岩波書店』P2251）へと意味が転じてきた[72]。よって、「ハズ」は「事態が論理上成立する当然性」と規定しても差し支えがないだろう。このような「ハズ」の内容を規定すれば、「ハズガナイ」は、「事態が論理上成立する当然性が存在しない」という意味になると考えられる。例えば、

(63) 彼は今日来るはずがない。

の場合、「彼は今日来る」という事態が成立する当然性を否定する判断であり、すなわち「彼が今日来る」という事態が現実の世界において「当然成立しえない」ことを主張しているのである。

---

[71] (63) は (60) ～ (62) のようなものとは異なり、ごく特殊な例として挙げておく。
[72] 「ハズ」の意味の歴史的変化については、佐田（1974）が詳しい。

一方、「ハズデハナイ」は、「事態が論理上成立する当然性」が存在することを前提で、「その論理上当然成立すると描かれている事態は話し手が現実において確認されている事態ではない」という意味になる。例えば、

(64) 彼は今日来るはずではなかった。

の場合、話し手の認識では「彼は今日来ない」と予想されており、その予想は、現実に起こった事態「彼が来た」と食い違っていることを表現している。すなわち、話し手が事前に想像していた事態は現実としての事態ではないということを表すのである。

5.5. 本章のまとめ

以上のように、「ハズダ」で表される事態の現実世界におけるリアリティという観点から用例を分析し、「ハズダ」について記述してきた。その結果、「ハズダ」の基本的意味は「話し手の認識では、当該の事態が現実世界において当然成立することとして示す」ものであり、事態が現実世界において未確認である場合は〈みこみ〉を表す。また、事態が現実世界において確認されており、現実との食い違いがある場合は〈事態成立の正当性の主張〉を表す。それに対し、現実と認識が一致する場合は、現実を「認識上の当然の帰結」として捉えることにより、〈事態成立の納得〉の表現となる。

それに対し、「ハズガナイ」は図 5-1と図 5-2で示しているように、「ハズダ」の用法とある程度の対応関係を持っている。また、「ハズダ」が「話し手の認識上事態が当然成立することとして示す」という基本的意味となるのに対して、「話し手の認識上事態が当然成立し得ないこととして示す」という基本的意味を持つ。つまり、「ハズダ」と「ハズガナイ」は「認識上事態の成立」と「認識上事態の不成立」という軸で対応している点から見ると、「ハズガナイ」という形式自体は、「ハズダ」とは形態上の対応を持っていないものの、意味・用法上では「ハズダ」の否定的形式として認められる。

一方、「ハズデハナイ」という形式は、形態上は「ハズダ」の否定形ではあるが、「ハズデハナイ」という形で使われることは少なく、多くの場合は過去形の「ハズデハナカッタ」として使われている。また、「ハズデハナイ」は、「こんなはずでは（じゃ）ない」または、念押しや確認を求めるような反語用法に限られるようである。「ハズガナイ」に

は、「ハズダ」の語彙的意味から推測できる意味が認められるが、「ハズデハナイ」になると、慣用的な用法が多く「ハズダ」の意味との関連性は強いとは言えず、「ハズダ」と異なる一個の独立した否定慣用表現と考えた方がよい。

6. 結論及び今後の研究課題

6.1. 「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定のあり方

従来の研究において、モダリティは「発話時における話し手の心的態度を表す」形式と定義されてきた。こうした定義上、モダリティは原義的にはそれ自体が「否定」とはならない[73]と考えられる。したがって、「形式名詞＋ダ」型モダリティ自体を否定できるかという点では、次の例から分かるように、これは基本的には不可能である。

(1)　＃太郎は来るそうではない。(伝聞)
　　＃太郎は来るようではない。(推定)
　　＃太郎は来るところではない。
　　？太郎は来るはずではない[74]。

しかし、この定義から外れるものも存在する。既に考察してきたように、たとえば、「ワケダ」、「モノダ」の場合は、問題なく「～デハナイ」という形で否定形を作ることができる。

ここで考えておく必要があるのは、日本語における「～だ（である)」の意味機能である。「だ」は名詞に下接して名詞を述語化する点において、他の助動詞とは異なる。そのため、用言への下接を基本とする一般の助動詞と区別され、「判定詞」（寺村 1982）とこれまで呼ばれてきている。また、「だ」の機能について、重見（1996）は、「だ」は古典語では、「にてあり」であり、この「にて」は、「～（という状態）で」、「～において（として)」のような意味を表すものだと考え、この「だ」によって形成される名詞述語は、同じ存在表現でも、述語用言「ある」とは決定的な相違が見られると指摘している。

(2)　a 学校がある。（重見1996：23）

---

[73] 中右（1979）は「モダリティは、命題あるいは相手に対する話者の、発話時という瞬間的現在における心的態度を表すのであるから、その本質について、モダリティが否定そのものであることはない。」（P229）と指摘している。

[74] この文を「太郎は来るはずではなかった」にすると成立するのだが、「ハズデハナカッタ」は意味上肯定の「ハズダ」との関連性が薄いため、「ハズダ」の否定とは言いにくい。

b 学校である。

重見（1996）は、「（2a）は「学校が存在する」の意味で、述語は「ある」だけで成立した形式となっている。「学校」が主語として叙述の対象となり、「何がどうする」という情報表現として完結していると考えられる。それに対して、（2b）は、「学校として（属性で）存在する」の意味と捉えられる。この場合、「何が」学校として存在するのか、という主語が欠けた文になる」（P23－24）と説明している。つまり、重見（1996）は、本稿で扱う「モノダ」「コトダ」「ワケダ」「ハズダ」などの一連の文を、「主語のない名詞述語文」と主張している[75]。

一般に「述語名詞＋ダ」の形態上の否定は「名詞＋デハナイ」であるのと同様に、「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定は、まず「形式名詞＋デハナイ」型だと思われる。例えば、

(3)　子供だからといって、何をやっても許されるというわけではない。

(4)　人生は思う通りにいくものではない。（第1章（27）の再掲）

(5)　（起動スイッチを押しても起動しない機械を前にして）
おかしい。こんなはずじゃない。（第5章（51）の再掲）

などが該当する。

まず、「ワケデハナイ」について、寺村（1984）、野田（1997）は、これを「推論の否定」と呼び、話し手が聞き手や世間一般による推論を予想し、あらかじめ否定する形式と考えている。つまり、事態間の必然性についての想定が否定されるわけである。また、「モノデハナイ」は、「ある命題内容について、それは一般論的に思われている存在ではない」という意味を表す。したがって、この二形式は、現実世界における話し手の判断ではなく、仮想の世界において下された判断が否定されるものだと考えられる。

ただし、「ハズデハナイ」は形態上ハズダ」の否定ではあるが、「ハズデハナイ」という形で使われることは少なく、多くの場合は過去形の「ハズデハナカッタ」として用いられている。また、「ハズダ」は「話し手の認識の世界において、当該の事態が現実の世界

[75] 井島（2002）では同じ指摘がされている。

において当然成立することとして示す」のに対し、「ハズデハナイ」は「確認された事態は、話し手が論理的に想定していた事態とは異なる」という意味を持つ。そのため、「ハズデハナイ」を「ハズダ」の否定的形式ではなく、一個の独立した否定慣用表現と考えたほうがよい。

それでは、「コトダ」と対応する「コトデハナイ」という否定形がなぜ成立しないのであろうか。第 3 章で述べたように、「コトダ」は「ある特定の状況において、当該の事態の実現が必要だ」という基本的意味を持つのだが、行為者にとって必要な行為を提示する場合、結果的には行為指示的表現、いわゆる「助言」となるため、「～しないことだ」のような「うちの否定」は可能となるが、「～することではない」のように「コトダ」自体を否定にするのは、論理上あり得ないからである。例えば、（6）の場合、

（6）早く治りたいのなら、

（助言として）a 無理をしないことだ。

b？無理をすることではない。（第 3 章（44）の再掲）

となる。

また、「～もの/はず/わけだろう」のように、他のモダリティ要素の後続を許すことや、「～もの/はず/わけだから（だけど）」のように従属節の内部に生起することができるということから、「コトダ」と他の形式とはモダリティ度[76]には差異があることが窺える。益岡（1991）では価値判断を表す「コトダ」を「一次的モダリティ」として位置付けられているように、「コトダ」はモダリティ度がより高い形式であると言える。これも、「コトダ」自体は否定を持たないことと関連していると思われる。

一方、「ハズダ」には、形態上対応がないものの、意味・用法上の対応を持つ否定的形式が見られる。

（7）　（空を見上げて）雨が降るはずがない。（第1章（31）の再掲）

「ハズガナイ」は第5章の図 5-1と図 5-2に示しているように、肯定の「ハズダ」の用

[76] モダリティ度は今井（1992）の用語を参考にしたものであり、その形式が従属節に現れるか、また否定・過去になるかどうかによって、モダリティ度の高低を測ることができる。

法とは一定の対応関係を持っている。また、「ハズダ」が「話し手の認識上当該の事態が当然成立することと示す」という基本的意味を持つのに対して、「ハズガナイ」は「話し手の認識上当該の事態が当然成立しないことと示す」という意味を持っている。つまり、「ハズダ」と「ハズガナイ」は「認識上事態が成立・不成立」という点で対応していることから、「ハズガナイ」という形式は、「ハズダ」とは形態上の対応を持っていないものの、意味・用法上「ハズダ」の否定的形式として認めるのが可能なのではないか。

ここでは、なぜ「ハズガナイ」という形式が成立するかを考える上で、「ハズ」が名詞としての意味が生きていることに注目したい。つまり、「ハズダ」という形式は、機能上既に文法化しているにもかかわらず、名詞「はず」の「事態が論理上成立する当然性」という意味が依然として残存している。つまり、肯定の「ハズダ」と否定の「ハズガナイ」における「はず」自体の意味が変わらず、「はず」の持つ「論理的当然性」という特殊の性質から「ハズダ」の否定が成立するのだと思われる。

また、

(8)　あなたが心配することはない。（第1章（28）の再掲）

のように、「ハズガナイ」や「ワケガナイ」とはやや異なる性格を持つ形式がある。先述した「ハズ」と比べると、「ハズ」は名詞として機能しているのに対して、「コト」自体は実質的意味を失い、非常に文法化していると言える。また、「コトハナイ」における「ガ/ハ」の交替もできないことや二重否定構文も成り立たないことから、本稿では、「コトハナイ」という形式を一種の否定慣用表現[77]として位置付けた。

さらに、「ワケ」の場合、「ワケデハナイ」と「ワケガナイ」の二形式があり、また否定の形によって用法の違いが現れる。

(9)　この店はいつも客がいっぱいだが、だからといって

a 特別に料理がうまいわけではない。

b＊特別に料理がうまいわけがない。

[77] 「コトダ」と「コトハナイ」は、行為者にとって事態の「必要性・不必要性」を提示する点では対応関係を持っている。「ハズガナイ」との形態上の異なりを考慮しないと、「コトハナイ」を「コトダ」の意味上の否定的形式として考える可能性が十分あると思われる。

（10） a 彼女は彼がお金持ちだから結婚したわけではない。

b ＊彼女は彼がお金持ちだから結婚したわけがない。（以上は第4章（87）（88）の再掲）

「二つの事態間に必然的関係があると認め、その関係成立が妥当であることを示す」という基本的意味を持つ「ワケダ」に対して、「ワケガナイ」は「当該の事態が論理上の帰結として成立し得ない」という意味となるのが基本であり、両者は形態上も意味上も対応関係を持たない。この点から、「ワケガナイ」という形式は、「ワケダ」の否定というより、一つの否定慣用表現として扱うのが適当だと思われる。一方、「ワケデハナイ」は、事態間の関係についての想定があらかじめ存在することが前提であり、「想定される事態間関係成立は妥当ではないこと」を示す形式である。このように、肯定の「ワケダ」とは、形態上のみならず、意味上の対応関係を認めることができる。したがって、「ワケデハナイ」を「ワケダ」の典型的な否定形として位置づけられる。

以上の考察から、「形式名詞＋ダ」型文末モダリティ否定のあり方を以下でまとめてみたい。

「形式名詞＋ダ」型文末モダリティ否定には、三つのタイプが存在する[78]と考えられる。すなわち、「ワケダ」―「ワケデハナイ」や、「モノダ」―「モノデハナイ」のように、形態上も意味上も対称性を持つものと、「ハズダ」―「ハズガナイ」のように、形態上対応しないものの、意味上対応しているものがある。さらに、「コトダ」―「コトハナイ」のように、意味上の対応関係を持ちながら、「コトハナイ」における「ガ/ハ」の交替ができないことや二重否定構文も不成立であることから、一種の否定慣用表現と認識すべきものが存在しており、「コトダ」のように否定を持たないものも見られる。なぜ肯定の場合、同じ構造を持ちながら、否定のあり方にこれほど差異が生じるかというと、これは形式名詞の文法化の度合い、すなわち形式名詞本来の意味が残存する度合いによるものだと思われる。

以上の考察から、本稿で取り扱う「モノダ」、「コトダ」、「ワケダ」、「ハズダ」という四つのモダリティ形式の否定のあり方を以下に図示する。

[78] 本稿で考察した対象は限られているので、この結論はすべての「形式名詞＋ダ」モダリティの否定に当てはまるとは言い切れない。

	肯定	否定
形式名詞＋ダ	ワケダ	**ワケデハナイ（否定形）**
形式名詞ガ/ハアル	***ワケガアル（不成立）***	**ワケガナイ（否定慣用表現）**

表 6-1 ワケダとその否定

	肯定	否定
形式名詞＋ダ	ハズダ	**ハズデハナイ（否定慣用表現）**
形式名詞ガ/ハアル	***ハズガアル（不成立）***	**ハズガナイ（否定的形式）**

表 6-2 ハズダとその否定

	肯定	否定
形式名詞＋ダ	モノダ	**モノデハナイ（否定形）**
形式名詞ガ/ハアル	***モノガアル（不成立）***	***モノガナイ（不成立）***

表 6-3 モノダとその否定

	肯定	否定
形式名詞＋ダ	コトダ	***コトデハナイ（不成立）***[79]
形式名詞ガ/ハアル	***コトガアル（不成立）***	**コトハナイ（否定慣用表現）**

表 6-4 コトダとその否定

6.2. 「形式名詞＋デハナイ」型否定と「形式名詞＋ガナイ」型否定の違い

日本語の否定文に関して、益岡（1991）は、表現形式を異にする二つのタイプを認めており、一つは、事態が存在するかどうかの判断にかかわる「存在判断型」であり、もう一つは事態の存在が前提されている、その事態の叙述の仕方を問題にする型、すなわち事態の叙述様式が適切であるかどうかの判断にかかわる「叙述様式判断型」という二つのタイプが存在すると指摘している（P66）。また、益岡（2007）では、「判断」という呼称は適切ではないとの認識から、それぞれ「存在・非存在型」、「叙述様式説明型」に改めている。本稿では、これに従い、〈形式名詞Ｘガナイ〉タイプの否定と〈形式名詞Ｘデハナイ〉タ

[79]「コトデハナイ」は必要を表す「コトダ」の否定としては考えられないが、語彙的否定としては成立する。

イプの否定を「存在・非存在型」否定、「叙述様式説明型」否定と呼ぶことにする。

加藤（1994）は、〈形式名詞Ｘデハナイ〉タイプと〈形式名詞Ｘハナイ〉タイプの否定の違いに関しては、「存在の表現」の否定「Ｘハナイ」と「題目―解説文」の否定「Ｘデハナイ」との違いと平行的であり、Ｘの有する名詞的性質に由来すると指摘している(P19)。

そこで、以下この二つのタイプの否定の違いについて、これまでの分析結果をまとめておく。

まず、事態の非存在・非成立を表す「形式名詞＋ガナイ」の場合、例えば

（11）（空を見上げて）雨が降るはずがない。（第1章（31）の再掲）

（12）彼は今日のパーティーに来るわけがない。（第1章（29）の再掲）

において、それぞれは当該の事態が存在するか否かを問題にし、「ハズ」「ワケ」によって表現される「論理上事態が成立する当然性」「当然の帰結に導く理由」が存在しないことを主張する文である。これらに対して、「コトハナイ」の場合は「当該の事態が必要事態の領域に存在しない」ということから「当該の事態が不必要である」という語用論的意味が派生している点で、「ハズガナイ」や「ワケガナイ」とはやや異なる振る舞いを見せている。

一方、「叙述様式説明型」の「形式名詞＋デハナイ」型否定となると、

（13）彼女は彼がお金持ちだから結婚したわけではない。（第4章（87）の再掲）

（14）国交回復といってもなかなかすぐにできるものではない。（『国会会議録』第101回国会）

「わけ」「もの」のような形式名詞による否定が「説明の否定」（工藤 1997）と言われているように、このタイプの否定文には想定表現を訂正する機能を持っている。(13)、(14)はそれぞれ、二つの事態間の関係に関する推論、ある主題について一般的に考えられやすい想定を意識した上で、その推論や一般論上の想定の妥当性を問題にする否定文である。つまり、先行文脈から一般的に導きやすい「彼がお金持ちだから彼女は結婚したわけだ」や「国交回復といえば、すぐにできるものだ」という想定の内容が事実ではないことを主張している。

要するに、「〜ガナイ」型と「〜デハナイ」型によって、否定文の性格が著しい変化が生じるのである。「存在・非存在型」否定文は単に、ある肯定されている事態の存在を否定する際に用いられる否定文である。つまり、ある事態などが存在するか否かを問題にするとき、肯定の事態が存在しない、しなかったことを示すものである。一方「叙述様式説明型」否定文には、話し手の意識の中に発話時点に先立った既定的前提（中右 1994）が存在するのが特徴である。また、その前提の妥当性が問題となり、前提の全部あるいは一部が事実と異なっていることが「Xデハナイ」によって表されている。この点から考えると、田中（2004：88）の「〈Xデハナイ〉タイプはより客観的であり、〈Xガナイ〉タイプは主観性が高い」という指摘は適当ではないように思われる。

6.3. 今後の研究課題

本稿は、「モノダ」「コトダ」「ワケダ」「ハズダ」の四つの「形式名詞＋ダ」型モダリティの否定形式のあり方について考察してきた。しかし、依然として未解決の問題が多く残されている。最後に、本稿の議論が及ばなかった問題と今後の研究の展望について述べておきたい。

問題の第一は、本稿では「形式名詞＋ダ」型モダリティ全体を網羅することはできなかったため、類似構造を持つ「ノダ」、「ツモリダ」、「ソウダ（様態）」「トコロダ」における形式名詞がどの程度名詞性を保持しているかについてのさらなる考察を要する。また、本稿では、モダリティの定義について言及していないが、文において客観的内容を表す「命題」に対して「話し手の主観的把握」（話し手の発話時における心的態度）[80]を表すものをモダリティと規定するか、文によって述べられる事態（内容）と話し手の現実との関係性を述べることに関わる意味を「モダリティ」[81]ととらえる認識を支持するか、つまりモダリティの概念自体の再検討が必要である。

第三の問題として、用例の幅広さが挙げられる。本稿の用例は主に書き言葉コーパスから収集したものであり、自然会話における用例については、今後の研究に取り入れるのが望ましい。特に、「ノダ」「ワケダ」の場合、「地の文」と「会話文」とに分けて「ワケダ」の文法的意味と語用論的意味について考察する必要があるだろう。

---

[80] 仁田義雄（1991）、益岡隆志（1991）、日本語文法研究会（2003）などがモダリティをこのように規定している。

[81] この立場をとる研究者は尾上圭介（2001）、野村剛史（2003）、大鹿薫久（2004）、岡部嘉幸（2013）などが挙げられる。

最後に、談話分析研究においても多くの課題が残されている。「ノダ」、「ワケダ」のような形式は単なる文文法からテクスト文法レベルの機能へと拡張すると指摘があるように、本稿は意味論と統語論的立場から記述しているが、談話分析の理論を取り入れることにより、今後一層重要な知見を得ることができると予想される。

【参考文献】（五十音図順）

青木博史（2010）「名詞の機能語化－形式名詞を中心に」『日本語学』29(11)：40－47 明治書院

揚妻祐樹(1990)「形式的用法の「もの」の構文と意味―〈解説〉の「ものだ」の場合―」『国語学研究』30：82-94　東北大学

揚妻祐樹（1991)「実質名詞「もの」と形式的用法との意味的つながり」『東北大学文学部日本語科論集』1：2-12

安達太郎（1998)「認識的意味とモノ・コトの介在」『世界の日本語教育』8：203-217　国際交流基金

案野香子(1996)「「モノダ」の意味・用法」『千葉大学留学生センター紀要 』2：43-56

石黒圭（1999）「否定表現の文脈依存性」『一橋大学留学生センター紀要』2：13-23

井島正博（1998）「名詞述語文の多層的分析」『成蹊大学文学部紀要』 33：1-53

井島正博（1999）「形式名詞述語文の多層的分析」『成蹊大学一般研究報告』30：1－93

井島正博(2002)「主語のない名詞述語文」『日本語学』21(15)：78－90

井島正博（2012）「モノダ・コトダ・ワケダ文の構造と機能」『日本語学論集』8：95－145

井手至（1967）「形式名詞とは何か」松村明他編『講座 日本語の文法 3　品詞各論』：37－52　明治書院

太田陽子（2005）『日本語教育』126 号(2005.7) pp.114－123

太田陽子（2008）『「運用力につながる文法記述」試論―モダリティ表現「ハズダ」の分析を通して』　早稲田大学博士論文

大鹿薫久（2004）「モダリティを文法史的に見る」北原保雄監修・尾上圭介編『朝倉日本語講座 6　文法Ⅱ』第 8 章

大場美穂子（2013）「「わけだ」「わけではない」の用法についての一考察」『日本語と日本語教育』41：47-66　慶應義塾大学

岡部寛（1994）「説明のモダリティ―「わけだ」と「のだ」の用法とその意味の違いの比較の観点から―」『日本学報』13：15-29　大阪大学

岡部嘉幸（2003）「ハズダとニチガイナイについて― 両者の置き換えの可否を中心に」『日本語科学』13：109－122

岡部嘉幸(2004)「ハズガナイとハズデハナイについて」『中央学院大学人間・自然論叢』20：31－48
岡部嘉幸（2013）「モダリティに関する覚え書き」『語文論叢』28：75－96　千葉大学
尾方理恵（2000）「「ものだ」の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26：1－16
奥田靖雄（1986）「説明（その 2）―わけだ―」『ことばの科学』5：187-219　むぎ書房
奥田靖雄（1993）「説明（その 3）―はずだ―」『ことばの科学』6：179－211　むぎ書房
尾崎奈津(2003)「「スルツモリダ」の否定形について」『岡山大学言語学論叢』10：45－56
尾崎奈津（2004）「現代日本語の否定とモダリティ」岡山大学博士論文
柏木成章（2003）「「注目」と「語り」－「ものだ」・「ことだ」・「のだ」・「わけだ」について－」『大東文化大学紀要　人文科学 』41：119－128
勝又隆（2012）「上代におけるモノソ文の用法」『福岡教育大学紀要』 第一分冊 文科編
加藤重広（2011）「日本語における文法化と節減少」『アジア・アフリカの言語と言語学』5：35－57　東京外国語大学
加藤泰彦（1988）「否定の作用域と文法表示」『上智大学外国語学部紀要』23：63-87
加藤泰彦（1996）「否定とメタ言語」『日本語学』10：15　P35－43
加藤陽子(1994)「名詞性をもつモダリティの否定形式について」『日本語と日本文学』20：12-21　筑波大学
角岡賢一（2012）「日本語説明モダリティとその否定形式について」『龍谷紀要』34（1）：15-31　龍谷大学
金子比呂子（2000）「「ハズダ」の意味と用法」」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26:119－134
川口義一（1983）「否定の扱い方」『講座日本語教育』19：31－42　早稲田大学
管由美子（2004）「近世期資料にみる「はず」のモダリティ化」『日本語文法』4（2）：186-201
岸田修次（2000）「「わけだ」に関する一考察」『葛野』4：1－14 京都大学
北川千里(1995)「「わけ」というわけ」『日本語学』14-8：88-98
北村雅則（2007）「モノダ文における述語名詞モノの役割―文末名詞文の構造との関連性―」青木博史編著『日本語の構造変化と文法化』：221-242　ひつじ書房

北村雅則（2005）「モノダ文を統一的に分析するために―意味論と語用論の二つの枠組みによる分析法の提示―」『経営研究』19（1）：71－90　愛知学泉大学
北村雅則（2008）「〈驚き・感慨〉を表すモノダ文の構造変化―近世以降を中心に―」『国文学 』92：464-448　関西大学
北村雅則（2010）「モノダ文の解釈に関する語用論的分析」『名古屋学院大学論集』人文・自然科学編 47-1：47－60
金玉任（1993 ）「いわゆる形式名詞に関わるモダリティ:ノダを中心に」『日本語と日本文学 』19: 1-11
金玉任（1997）『日本語における論理性表示のモダリティー』筑波大学博士論文
金恵娟（2009）『現代日本語の真偽判断にかかわるモダリティ形式の研究－疑似モダリティ形式を中心にー』筑波大学博士論文
金水敏・工藤真由美・沼田善子（2002）『日本語の文法 2　時・否定と取り立て』岩波書店
金英敏（1996）「日本語における否定文の指導に関する一考察 ： 否定辞『ない』と助詞『は』を中心として」『教授学の探究』13: 1-52
工藤真由美（1997）「否定文とディスコース「のではない」と「わけではない」」『ことばの科学』8：66-102　むぎ書房
グループジャマシイ編著『日本語文型辞典』くろしお出版
小原佳那子（2009）「「ことはない」の意味機能」『国文鶴見』43： 88-74　鶴見大学
佐田智明(1974) 「「はず」と「つもり」」『北九州大学文学部紀要』10：41-53
笹栗淳子（2004）「いわゆる『形式名詞』に関する研究ノート―構造的特徴に焦点をあてた分類について―」『純心人文研究』10：183－195
佐藤里美（2000）「「ものだ」の機能」『日本東洋文化論集』(6): 1-41　琉球大学
澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
重見一行（1996）『日本語の文法を考える』和泉書院
重見一行（1994）「「連体なり」文と係結び文と「のだ」文--係結び文から「のだ」文へ」『高知大学教育学部研究報告. 第 2 部』49：1－14
重見一行（2003）「「ものだ」文の構造と表現」『国語国文』72(11)：21－39　京都大学
重見一行（2003）「「わけだ」文の基本的構造と多様性」『就実論叢』33：1-14　就実大学

重見一行（2004）「「はずだ」文の構造と表現意義」『語文』83：71－81 大阪大学

重見一行（2004）「いわゆる「説明のモダリティ」の構文と表現」『就実論叢』（34）：1-14

篠崎一郎（1981）「「ハズ」の意味について」『日本語教育』44：43-56

島守玲子(1993)「名詞述語文の構造:談話文法の観点より」日本語教育論集『世界の日本語教育』3: 177-193

蒋家義（2010）『モダリティの体系と認識のモダリティ』杏林大学　博士論文

荘司育子（2008）「文法研究の応用 ： 形式名詞について」大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究 6：23－34

新屋映子（1989）「“文末名詞”について」『国語学』159：88－75

杉江厚美（2003）「「わけだ」と他の文末のモダリティ表現との違い―『のだ』との比較を通して―」『Journal CAJLE』5：149－165　カナダ日本語教育振興会

鈴木美加（1999）「ワケダとトイウワケダの意味機能の違いについて」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26:103-117

須田義治（2004）「「ものだ」のコンテクスト的な機能について」『沖縄大学人文学部紀要』5: 33-44

戴宝玉（2000）「ノダとその否定をめぐって」『世界の日本語教育・日本語教育論集』10:207-220

高市和久（1987）「形式名詞的な名詞述語文」『国語学研究』27：123-132

高梨信乃（2006）「助動詞「ものだ」「ことだ」」『神戸大学留学生センター紀要』12

高梨信乃（2010）『評価のモダリティ―現代日本語における記述的研究-』くろしお出版

高橋太郎(1975)「「はずがない」と「はずじゃない」」『言語生活』289: 79-81

高橋太郎（1985）『日本語の文法』ひつじ書房

高橋太郎（1998）「述語形式「するものだ」の用法」『立正大学文学部研究紀要』14：189_a-141_a

高橋雄一（2010）「複合辞の「ものだ」についての試論―「内容節的な構造」を手がかりに」『専修国文』専修大学 87：137－167

高橋雄一（2012）「複合辞の「ことだ」についての一試論」『専修人文論集』91：1-23

高山善行（2002）『日本語のモダリティの史的研究』ひつじ書房

田中寛(2004)「否定文末形式の意味と機能」『講座日本語教育』40:59－92

田中寛（2007）「否定文末表現における判断の諸相－否定の論理構造と倫理的な意味」『外国語学研究』8：17-32　大東文化大学
田辺和子（1997）「形式名詞「モノ」における文法化としての文脈化と主観化」『日本女子大学紀要　文学部』47：51－63
谷守正寛（1998）「ムードの「わけだ」再考」『鳥取大学教育学部研究報告　人文社会科学』49（2）：237－247
田村直子（1995）「ハズダの意味と用法」『日本語と日本文学』 21：43-53　筑波大学
田村直子（2001）『複合文末形式の意味と用法』つくば大学博士論文
張偉麗(2007)「“能願動詞”と否定の関係に関する考察 ：″応該(ying gai)″を通して」『日本言語文化研究』11：18-32　 龍谷大学
陳志文（2004）「「モノ」の各用法における意味のつながり」『言語科学論集』8:49-60
角田太作（2012）「人魚構文と名詞の文法化」国語研プロジェクトレビュー
坪根由香里（1994）「「ものだ」に関する一考察」『日本語教育』84：65-77
坪根由香里（1996）「ことだ」に関する一考察－そのモダリティ性を探る－ 」『ICU 日本語教育研究センター紀要 』5：45-62　国際基督教大学
程焱（2010）「日本語のハズダに対応する中国語表現について」《汉日语言对比研究论丛》1：110-123
寺村秀夫（1979)「ムードの形式と否定　英語と日本語と」『林栄一教授還暦記念論文集』くろしお出版
寺村秀夫（1982)『日本語のシンタックスと意味Ⅰ』くろしお出版
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
寺村秀夫（1992）「ムードの形式と否定」『寺村秀夫論文Ⅰ―日本語文法編―』：43－73 くろしお出版
寺村秀夫（1981）「「モノ」と「コト」」『寺村秀夫論文Ⅰ―日本語文法編―』:75－93 くろしお出版
豊田豊子(1998)「「そうだ」の否定の形」『日本語教育 97: 60－71
中右実（1979）「モダリティと命題」『英語と日本語と　林栄一教授還暦記念論文集』：223－250 くろしお出版
中右実（1994）「二重否定の発想と論理」『文芸言語研究』言語編：79－96 筑波大学
永谷直子（2001）「「わけだ」に関する一考察－その実質的意味と心的態度との関わりに

ついて」 早稲田大学修士論文要旨
永谷直子（2002)「「わけだ」に関する一考察」早稲田日本語研究(10)：99-110
永谷直子（2002）「「わけだ」と「のだ」に関する考察―情報の把握を示す場合」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』47（3）：103－113
永谷直子（2010）「話し手・聞き手の「領域」から見た「わけだ」」『東京大学留学生センター教育研究論集』16：29-41
中川佐保(1998)「文末における「形式名詞+だ」表現の研究」『Bulletin of Graduate School Gifu Women's University 』1：1-42
仁田義雄(1999)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
仁田義雄/森山卓郎/工藤浩（2000)『日本語の文法　3　モダリティ』岩波書店
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法３　第７部　肯否』くろしお出版
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4　第8部　モダリティ』くろしお出版
野田春美（1995)「モノダとコトダとノダ―名詞性の助動詞の当為的な用法―」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法（上）単文編』：253-262　くろしお出版
野田春美（1995)「「～ハ～ナイ」、「～シハシナイ」、「～ノデハナイ」、「～ワケデハナイ」―ハとナイを含む否定の形―」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法（上）単文編』：159-168　くろしお出版
原田登美・小谷博泰（1995)「言い訳と失意の表現構造--～つもりだった、～はずだった、～べきだったの場合 」『甲南大学紀要（文学編)』99 甲南大学
範佩佩（2009)「形式名詞「mono」与「koto」―以包含「mono」「koto」的述语句为中心」台湾国立政治大学修士論文
日野資成(2001)『形式語の研究―文法化の理論と応用』九州大学出版会
姫野昌子（2000)「形式名詞「こと」の複合辞的用法 ： 助詞的用法と助動詞的用法をめぐって」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26：17－31
備前徹（1989)「「～ことだ」の名詞述語文に関する一考察」」『滋賀大学教育学部紀要人文科学・社会科学・教育科学』39
藤井ゆき（1995)「文末の「モノダ」の意味・用法」『広島大学留学生センター紀要』6：49－64
藤井ゆき（1999)「一般的傾向の「ものだ」から事態認識・評価の「ものだ」(いわゆる感慨の「ものだ」)への文法化」『日本語教育の交差点で―今田滋子先生退官記念論文集―』

渓水社：93－102

藤井義久(1997)「「ものだ」の意味論」『神戸大学留学生センター紀要』4：63－75

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語の文法』くろしお出版

益岡隆志(2000)「価値判断を表す「ものだ」と「ことだ」」『日本語文法の諸相』くろしお出版

益岡隆志(2001)「説明・判断のモダリティー」『神戸外大論叢 』52(4)：1-25

益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探求』くろしお出版

松岡弘（1987）「「のだ」の文・「わけだ」の文に関する一考察」『言語文化』24：3-19

松岡弘（1993）「再説:「のだ」の文・「わけだ」の文」『言語文化』30: 53-74　一橋大学

松木正恵（1993）「文末表現と視点」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』5

松木正恵(1994)「「～はずだった」と「～はずがない」」『学術研究　国語・国文学編』42: 1-14　早稲田大学

真仁田栄治（2001）「助動詞相当表現「わけだ」の成立 ： 近世講義資料を中心として」『同志社国文学』(54) ：30－41

三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化 ： 内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究 』1(3)：61-76

宮崎和人（2002)『日本語の認識的モダリティと疑問』大阪大学博士論文

宮地朝子（2007）「筈からハズへ、訳からワケへ―名詞が文法化するとき」名古屋大学文学研究科公開シンポジウム報告書『拡張し変容する日本語』：4-16

村田昌巳(2001)「実質と形式 ： モノ・コトの用法から」『同志社国文学』54：122-113

籾山洋介（1992)「文末「モノダ」の多義構造」『言語文化論集』14（1)：19－31　名古屋大学

籾山洋介（2000)「名詞「もの」の多義構造 ネットワーク・モデルによる分析」 山田進・菊地康人・籾山洋介 編『日本語 意味と文法の風景：国広哲弥教授古稀記念論文集』：177-191　ひつじ書房

森田良行（1980）『基礎日本語 2』角川書店

森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型　用例中心・複合辞の意味と用法』アルク

守屋三千代（1989)「「モノダ」に関する考察」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』

1：1－25

守屋三千代(1990)「形式名詞の文末における用法について」『津田塾大学紀要』22:109－125

森山卓郎/仁田義雄/工藤浩（2000)『日本語の文法３　モダリティ』岩波書店

山口佳也（2005）「「わけだ」の文について」『十文字国文』11：1-11

山口佳也（2008）「「ことだろう」の文について」『早稲田日本語研究』17：13-22

山口佳也（2010）「「はずだ」の文の構造と意味」『十文字国文』16： 18-28

山口佳也（2011)『「のだ」の文とその仲間』三省堂

山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房

横田淳子（2001）「文末表現のワケダの意味と用法」『東京外国語大学　留学生日本語教育センター論集』27：49-64

吉川武時(編集)小林幸江　柏崎雅世（2003）『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書房

横田淳子（2001）「文末表現のワケダの意味と用法」『東京外国語大学　留学生日本語教育センター論集』27：49－64

吉村あき子（2009)「日本語のメタ言語否定と「ワケデハナイ」」『人間文化研究科年報』25: 1-12

劉向東（1996）「ワケダ文に関する一考察」『日本語教育』88：48-60

劉笑明・吉田則夫（2004)「「ものだ」と「ことだ」の意味・用法－感情表現を中心に－」『岡山大学教育学部 研究集録』127

【中国語関係の参考文献】

杜娟（2010)「“ことだ”、“ことはない”的基本义和语用义—以价值判断语气为中心」『黄海学术论坛』15：75-86

方帆　(2010)「关于現代日语情态体态」中国上海外国语大学硕士论文

洪洁(2011)「日語「モノダ」与汉语“是……的”句式对比研究」『日語学習与研究』2(153)：92－98

刘爽（2009)「日语否定形式的意义分析 以“ない”为中心」中国黑龙江大学硕士论文

王晓华（2010)『现代日汉情态对比研究』中国上海外国语大学博士论文

王亚新（1998)「“のだ”的语义特征以及陈述语气」『日語学習与研究』2：33-41

王莹莹（2009)「对“ハズダ”中确认用法的考察」中国广东外语外贸大学硕士论文

钟晓光（2007）「关于ワケダ句的原型考察」中国广东外语外贸大学硕士论文

謝辞

本論文の作成にあたって、多くの方々のご指導やご教示を受けている。とりわけ主任指導教員である岡部嘉幸先生のご指導なくしては、本論文が無事完成することが考えられないだろう。論文題目の決定から、執筆に至るまで、懇切丁寧かつ熱心なご指導をいただいた。この場を借りて、衷心より御礼を申し上げたい。また、千葉大学大学院人文社会科学研究科全体研究会や学位論文審査会において、いろいろご指導、貴重なご示唆を与えてくださった副指導教員である神戸和昭先生・田口善久先生、及び中川裕先生にも深い謝意を申し上げたい。

この他に、千葉大学日本学研究会において、貴重なご指摘、ご教示をくださった金田章宏先生、ホウダ・マーチン先生にも一方ならぬ学恩を頂戴した。そして、三年間お世話になった千葉大学の諸先生方、千葉大学人文社会科学研究科の事務の方々にも、心から御礼を表したい。

最後に、いつも見守ってくれた両親、応援してくれた夫、息子にも心から感謝の意を表したい。

既発表論文および口頭発表との関係

第1章　序論

新規執筆

第 2 章　「モノダ」とその否定

新規執筆

第 3 章　「コトダ」とその否定

張昕（2013）「コトダとその否定について」第 40 回千葉大学日本語学研究会

第 4 章　「ワケダ」とその否定

張昕（2011）「ワケダとその否定形式―ワケデハナイとワケガナイを中心に―」『千葉大学人文社会科学研究』第 23 号

張昕（2011）「ワケダとその否定」　第 33 回千葉大学日本語学研究会

第 5 章　「ハズダ」とその否定

張昕（2012）「「ハズダの意味・用法について―「納得」と「推論」との関連」」　千葉大学人文社会科学研究科　研究プロジェクト報告書　第 244 集『日本語とそれをとりまく言葉たち（3）』

張昕（2013）「ハズダとその否定について」『千葉大学人文社会科学研究』第 26 号

第 6 章　結論

新規執筆

【用例出典】

（以下用例の出現順で示す）

国立国語研究所　現代書き言葉均衡コーパス（少納言）

http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/

（書籍、雑誌、新聞、白書、教科書、国会会議録、法律、韻文、広報紙、Yahoo!知恵袋、Yahoo!ブログといった 11 種のデータ、合計約 1 億 480 万語を収録）

小出和子『おばあちゃん、お月さんきれいね』

藤本ひとみ『ブルボンの封印』

片山晋呉『主役』

山本素子『医師・登山家今井通子』

栗栖十三『週末バーテンダーのすすめ』

村瀬学『『銀河鉄道の夜』とは何か』

結光流『鏡の檻をつき破れ』

宮地裕ほか『国語 2』光村図書出版株式会社 2005

山本周五郎『将監さまの細みち』

武藤直路『スタイリストになるには』

福島行一『大仏次郎』

ジョギンダー・パウル/工藤道子『現代インド短篇小説集』

常書鴻/吉田富夫/岡本洋之介『敦煌の守護神』

稲葉真弓『抱かれる』

羽田孜『小説田中学校』

赤川次郎『探偵物語』

磯辺文雄『遊びをせんとや』

高橋尚子『夢はかなう』

植村信保『生保のビジネスモデルが変わる』

深沢美潮『フォーチュン・クエスト』

日向章一郎『獅子座の恋愛ミステリー・ツアー・冒険少女編』

鶴田楡『ダンス・ウィズ・キャット』

シドニィ・シェルダン/天馬龍行/紀泰隆『時間の砂』

北方謙三『危険な夏』

魚柄仁之助『うおつか流清貧の食卓』

稲川尚子『ママと呼んで！由くん』

塩川治子『北斎の娘』

山崎マキコ『月刊アスキー』

佐藤正『野坂参三と宮本顕治』

柚木彩『逃奔の彼方』

リチャード・ヘンリック/小関哲哉『原潜レッドスター浮上せよ』

稲川尚子『ママと呼んで！由くん』

シドニィ・シェルダン/木下望『遺産』

うつみ宮土理『うつみ宮土理のカチンカチン体操』

会田雄次『表の論理・裏の論理』

志茂田景樹『背後霊は殺しがお好き』

実著者不明『林家木久蔵の子ども落語』

レジナルド・ヒル/秋津知子『死者との対話』

宮部みゆき『夢にも思わない』

アゴ・ビュルキーフィレンツ/たかおまゆみ『変わる妻たち』

ローレンス・ブロック/田口俊樹『死者の長い列』

福永令三『クレヨン王国森のクリスマス物語』

田中ひろみ『わたしがナースを辞めたわけ』

フィリップ・Ｋ・ディック/佐藤龍雄『あなたをつくります』

大下英治『小説明治大学』

中野清見『回想・わが江刈村の農地解放』

志茂田景樹『背後霊は殺しがお好き』

鳴沢秋生『再びの青春』

井上靖『しろばんば』

佐藤環妃/加藤きなこ/実著者不明/田口ランディ『ＣＯＳＭＯＰＯＬＩＴＡＮ日本版』

梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集』

東田雪子『発毛・育毛の新常識』

石川京子デッカー『オランダ』

豊田美加『恋して死にたい』

宮部みゆき『ブレイブ・ストーリー』

二階堂黎人『稀覯人の不思議』

松田佳之『培倶人』

ロバート・ジョーダン/斉藤伯好『滝王伝説』

畑山幸司『コラーゲンで身体をリセット』

加藤諦三『がんばりすぎてしまう人へ』

安藤春彦『親が知らない子どもの心』

早坂茂三『早坂茂三の「田中角栄」回想録』

清水栄一『勝ち運をよぶ心の力』

池田大作『新・人間革命』

東城百合子『食生活が人生を変える』

森村進『女性のためのオートカメラ自由自在』

櫻井よしこ『世の中意外に科学的』

カレン・ローズ・スミス/仁嶋いずる『シンデレラになる資格』

松田美智子『秘密の地下室』

ジェームズ・M・クーゼス/バリー・Z・ポスナー/伊東奈美子『ほめ上手のリーダーになれ！』

賀川洋『外国人との仕事に悩んだ時読む本』

伴野朗『伍子胥』

浅井隆『小泉首相が死んでも本当の事を言わない理由』

フルカネリ/平岡忠『大聖堂の秘密』

鱧余夢紋『メガネをかけた犬』

斉藤浩子『家庭と職業のはざまで』

佐左木俊郎『恐怖城』

ニコラス・スパークス/大野晶子『メッセージインアボトル』

鮎川哲也『時間の檻』

谷川涼太郎『京都・尾道れんが坂の殺人』

陳舜臣『陳舜臣全集』

実著者不明『心に残るとっておきの話』

原田泰『経済記事を読みこなす基礎知識』

宮脇檀『暮らしをデザインする』

辻真先『死体は走るよ国際列車』

今野敏『封印の血脈』

チンギス・アイトマートフ/赤沼弘『最初の教師・母なる大地』

『ツインビー完全攻略本』ファミリーコンピューターマガジン編集部1986

斎藤茂太『うつを気楽に癒すには…』

梓林太郎『安曇野殺人旅愁』

赤川次郎『泥棒よ大志を抱け』

ディーン・R・クーンツ/内田昌之『アイスバウンド』

加納朋子『一万二千年後のヴェガ』

櫻井寛『アメリカ鉄道夢紀行』）

宮本百合子『舗道』

十文字青『薔薇のマリア』

大江健三郎/小澤征爾『同じ年に生まれて』

横田順彌『奇想展覧会』

小津薫『死を招く料理店』

赤川次郎『華麗なる探偵たち』

薩摩治郎八『洋酒天国』

開高健『パニック』

丸山康樹『河川文化』

柴崎正行『カウンセリングマインドの探究』

横田濱夫『お金が「殖えて貯まる」30 の大法則』）

飯島裕一/相澤徹『健康ブームを問う』

三田誠広『パパは塾長さん』

岩崎春雄/アーマーLアンドルーJ『現代人のための英語の常識百科』

高田ケラー有子『平らな国デンマーク』

小池説明員『国会会議録』第084回国会

細川隆一郎『怒りを忘れた日本人』

夏木マリ『かっこいい女！』

板東英二『プロ野球ここを喋る奴はウチから出ていけ』

轡田隆史『『江戸』と『明治』と『戦争』と』

日下公人『人間はなぜ戦争をやめられないのか』

滝田誠一郎『ゲーム大国ニッポン』

ジョー・シャーロン/田中昌太郎『上海の紅い死』

魯迅/高橋和巳『世界の文学セレクション 36』

渡辺和子『「ひと」として大切なこと』

山崎豊子『不毛地帯』

井上やすし『四捨五入殺人事件』

実著者不明『徹底使いこなし電動ドリル&ドライバー』

山村美紗『殺人を見た九官鳥』

小松左京『首都消失』

葉加瀬太郎『顔』

田部井昌子『資産ゼロから大成功する「魔法の粉」の使い方』

杉山隆男『メディアの興亡』

山手治之『国際法概説』

斎藤茂太『茂太さんの100の知恵』）

岡松和夫『口紅』

荒巻義雄『猿飛佐助』

童門冬二『田沼意次と松平定信』

長木誠司『フェッルッチョ・ブゾーニ』

髙石昌弘 加賀谷熙彦ほか『現代保健体育』

竹沢尚一郎『共生の技法』）

実著者不明『親が子に望んでいること子が親にできること』

天野かづき『只今、キミに求愛中！』

霧舎巧『ラグナロク洞』

五木寛之『青春の門』

田口仙年堂『吉永さん家のガーゴイル』

渡辺淳一『失楽園』

鈴木悠矢『スポーツサイクルカタログ』

コルネーリア・フンケ/浅見昇吾『魔法の声』

斎藤広達『鋭い頭を持った、世界で通用するMBA的課長術』

乙一『失はれる物語』

鈴木光司『らせん』

佐々木譲『ストックホルムの密使』

波多野勝『浜口雄幸』

丘修三／石井睦美『おめでとうがいっぱい』

倉橋由美子『聖少女』

清水節『ラストコンサート』

六道慧『羅刹王』

橘香いくの『迷宮の記憶』

出久根達郎『犬と歩けば』

麻生玲子『眠る体温』

伊丹十三『女たちよ！』

松定ちよし『原本枕草子に操られたキツネとタヌキ』

三浦宏文『ロボットと人工知能』

渓由葵夫『奇想天外兵器番付』

池田満寿夫『エーゲ海に捧ぐ』

シドニィ・シェルダン/中山和郎/天馬龍行『明日があるなら』

志水辰夫『生きいそぎ』

東海林さだお『なんたって「ショージ君」』

佐藤禮子／馬場良子『ケアワーク入門』

立花隆『エコロジー的思考のすすめ』

篠田真由美『長編超伝奇小説』

藤原万璃子『ワイルド・ローズ』

ハーマン・メルヴィル／八木敏雄『白鯨』

真島節朗『海と周辺国に向き合う日本人の歴史』

上野万梨子/実著者不明『sesame』平成 14 年 5 月号

福沢諭『誰も描けなかったピナたちの物語』

いしいしんじ『白の鳥と黒の鳥』

水野良『ファンタジー王国』

堀内光一『アイヌモシリ奪回』

木暮正夫『シャクシャインの戦い』

小林満州子『地域でとりくむみんなで育てる介護保険』

秋月涼介『紅玉の火蜥蜴』

小川正樹『絵でわかる超入門原価計算』

有森裕子『わたし革命』

前田由紀子『教師とカウンセラーのための学校心理臨床講座』

西澤保彦『フェティッシュ』

愛川晶『網にかかった悪夢』

峰隆一郎『虚陰十郎必殺剣』

『国会会議録』第101回国会

新潮文庫 100 冊 CDROM　新潮社 1995

（新潮文庫の名作 100 作品、総計 3 万 5 千頁の全文を収録）

山本有三『路傍の石』

夏目漱石『ぼっちゃん』

島崎藤村『破戒』

赤川次郎『女社長に乾杯!』

松本清張『点と線』

井伏鱒二『黒い雨』

三浦綾子『氷点』

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

新田次郎『孤高の人』

司馬遼太郎『国盗り物語』

石川達三『青春の蹉跌』

渡辺淳一『花埋み』

三浦綾子『塩狩峠』

安部公房『砂の女』

武者小路実篤『愛と死』

宮本百合子『伸子』

谷崎潤一郎『痴人の愛』

石川達三『洒落た関係』

大岡昇平『野火』

三浦綾子『道ありき』

北杜夫『楡家の人びと』

夏目漱石『行人』

青空文庫　日本語用例検索

http://www.let.osaka-u.ac.jp/tanomura/kwic/aozora/

水上勉『雁の寺・越前竹人形』

寺田寅彦『柿の種』

徳田秋声『仮装人物』

【用例集】

モノダの用例

1. 自動販売機は便利なものだ。（P6：1）
2. 昔はよくこの公園で遊んだものだ。（P6：2）
3. 時計は電池で動くものだ。（P8：7）
4. よくここまで頑張ってきたものだ。（P8：9）
5. 赤ん坊は泣くものだ。（P17：26）
6. これはじゃがいもの皮をむくものだ。（P21：1）
7. 人生は分からないものだ。（P21：2）
8. 昔はよく図書館を通っていたものだ。（P21：3）
9. やっぱり日本一はすごいもんだな、と感心しました。（P21：4）
10. 女性はデートに遅れてくるものだが、花子は遅れてこない。（P23：5）
11. 「山は自分の体で登るものだ。他人に頼らないし、他人との比較ではできない。」（P23：6）
12. なにかおつまみを食べて、歯にものが引っかかっても、女性はひと前で歯をほじくったりできないものだ。（P23：7）
13. 学習とは、もとより、信じることから始まるものだ。（P23：8）
14. 咳というのは、ひどく体力を消耗するものだ。毎晩毎晩、青い顔をして激しく咳をしていたのが、最近やっと落ち着いてきた。（P23：9）
15. 今どきの若者の部屋なら、たいてい何か音楽でも聞こえているものだが、今は物音一つしない。（P24：11）
16. 五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。（P24：12）
17. 祭りの前の晩は早く家に入るもんだ。（P24：13）
18. 「いいえ、私はたくさんです」と省吾はいく度か辞退した。「そんな、君のような—」と丑松は省吾の顔を眺めて、「人があげるって言うものは、もらうもんですよ」（P25：14）
19. 「これ、お作や」と細君の児を叱る声が起った。「どうしてそんないたずらするんだい。女の児は女の児らしくするもんだぞ。ほんとに、どいつもこいつもろくなものは

ありゃあしねえ。自分の子ながら愛想がつきた。見ろ、まあ、進を。お前たち二人よりよほどお手伝いする」(P25：15)

20. 病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感ずるものだ。（P25：16)

21. 病人はおとなしく寝ているものだ。（P25：17)

22. 子供は自然に育つものだ。(P25：18)

23. 子供は早く寝るものだ。(P25：19)

24. a「あの子は外で遊んでばかりで…。色が黒くなるじゃない。」

「子どもは外で遊ぶものだ。仕方ないよ」

b「お前はテレビゲームばかりして……。外で遊びなさい。子どもは外で遊ぶものだ」(P25：20)

25. 昔の日本ではスイカは八等分ぐらいに切って、かぶりつくか、スプーンで食べたものだ。（P27：21)

26. 「昔のひとは実にゆかしいことをしたものですね」と、汽車の窓から花を見て、有島は大佛次郎に教えてくれた。(P27：22)

27. 昔、よくこの道を歩いたものだ。(P27：23)

28. 「龍」は瑞兆だよ、と幼い頃いつも母に聞かされたものだ。(P27：24)

29. 同じマンションの別棟に住んでいたその親友とは、夜になると電話で誘いあって互いの家を行き来たり、夏にはこの広場まで来ていつまでもおしゃべりをしたものだった。(P27：25)

30. あの時は、心臓がとまりそうなくらい驚いたものだ。（P28：26)

31. 「(前略）確か、そのときの司会者が松野頼三さんに似た名前の人で、なんていったかな…。市会議員をやった人で、昔、参議院の勝俣稔さんの秘書なんかやった人…松野…松野…」「松野良平さんでは？」「そうだ、そうだ、松野良平君だ。その松野良平君が司会役でこう紹介したもんだ。」(P28：27)

32. a「裏切っといて、よくそんなことが言えたもんだな」

b. 政府やマスコミや会社の連中は、経済が豊かでないと、文化的な人間生活は送れない、なんて抜かしやがるが、よくもまあシャーシャーとこんな嘘が言えるもんだ。

c. 監督と出会って、この四年間の時間の中で、私の人生は変わったし、人は変われるものなのだと、本当に実感している。

d. 自らの責任を棚に上げて、よくもこのような発言ができたものだ。

e. ほう、世のなか……、いろいろなことを考える人がいるもんだ。

ｆ「ああ、やっぱりお客さんでしたか！めずらしいこともあるもんだ。さあさ、上がってくださいよ」

ｇへーッ！ここまで撮れるんだー！なるほど、一眼レフとはすごいものだなー！（P28：28）

33. a （はしご乗りを見て）わー、すごい。

ｂ（話に聞いていたけど）はしご乗りってすごいもんだ。（P29:29）

34. そのとき、「世の中にこんな天才がいるのか！」と思えるほど、すごいショットを何度も見た、いや、見せつけられた覚えがあります。やっぱり日本一はすごいもんだな、と感心しました。（P29：30）

35. 慈念の生活をみていると、禅寺の修行というものはつらいものだな、と里子は思わざるを得ない。（P30：31）

36. アトランタ・オリンピックはいうまでもなく、いつの間にか長野冬季オリンピックまで終わってしまいました。まったく、月日の流れるのは早いもんだ！（P30:32）

37. 「十六になったらあなたと結婚するって、上の孫娘に言ってるそうですよ」「やれやれ、無邪気っていうのは恐いもんだな、キャット」（P24:33）

38. ハイメ・ミロに出会い、テレサと一緒に山の中を逃げ、金の十字架を運び…そしてルビオと運命の出会いをした。縁とは不思議なものだ。（P30：34）

39. 「しかし、こうして君を送ろうとは、僕も思いがけなかったよ。送別会なぞをしてもらった僕の方がかえって君よりは後になった。はははははは、人の一生というやつは実際わからないものさね」（P30：35）

40. 「あんたも、大きくなったもんだよ。ベソかいてた一年前が嘘みてえだ」（P30:36）

41. 重太郎は飯を口に入れながら、それをつくづくと見た。女房も年をとったものだ。（P30:37）

42. 私は、近所に、圧搾法のナタネ油や玉じめしぼりのゴマ油を売っている油屋さんがありますので、そこで買っています。スーパーよりはちょっと高いのですが、自然食品店よりははるかに安く買えます。今どき、良心的な店もあるものです。（P31：38）

43. 親切な人もあるものだ。僕はくさいのは問題にしないことにして、収容所のことを聞きながらついて行った。（P31:39）

44. よくここまで頑張ってきたもんだ。（P31：40）

45. 自らの責任を棚に上げて、よくもこのような発言ができた**ものだ**。（P32:41）

46. 「あの連中、お前のいるところがよく分かる**もん**だ。どうやって嗅ぎつけるんだう」（P32：42）

47. 借りてるマシンをみんなでまわしてブツブツ文句を垂れる。「案外と軽い**もんだ**な」（P32：43）

48. 前述のように、伊藤律は、あるとき何気なく野坂に、「あのきびしい時代に、うまく出獄し、うまくモスクワに行った**ものです**ね」と訊ねた。（P32：44）

49. 「いやあ、来たかったんだけどさ、所帯持つと中々ねえ」「随分弱気になった**もんだ**」女房は笑いながら原田の背中をぽんぽん叩く。（P33：45）

50. 「やけに便利な仕掛けを持っている**もんだ**なあ」ノートンが言った。（P33：46）

51. 結構荷物ってある**もんだ**なぁ〜〜；でっかい袋に 1つ旅行かばんに 1つダンボール 3個はありそう〜〜〜（P33：47）

52. 「病院には、もう出てるんだって？」

高木は、次子の持ってきたチーズを三片ほど、いっぺんにほおばった。

「病院に出ている方がラクだよ」

「ぜいたくな**もんだ**な。シェーンな奥方の顔でもながめていたらよさそうなもんだ」（P33：48）

53. 親はといえば、由輝の歩くのが嬉しくて靴を何足も何足も買う始末。本当に困った**もんだ**。（P33:49）

54. 「おまえが？巡回裁判所の判事になった？あきれたもんだ。」（P33:50）

55. 人生は思う通りにいかない**ものだ**。（P34:51）

56. 人間はおいそれとは変わらない**ものだ**。（P36:59）

57. 人間の記憶なんて、あてにならない**ものだ**。（P36：60）

58. 女性の嘆きなど男性がもっとも聞きたくない**ものだ**。（P36：61）

59. 習い性というのはそう簡単には消えない**ものだ**。(P36:62)

60. 「ほう、お月さまがのっているのか。お月さまは、勇気がありますね。よく、こわくない**もんだ**。あんなまっくらな広い海を、あんな小さな船で、ねえ。（P37：63）

61. よく病気にならなかった**もんだ**。辛い深夜勤務 毎日決まった時間に起きるのだって辛いのに、3交替だと寝る時間もバラバラだから、ますます起きるのが辛い。（P37：64）

62. よく、韓国国民や在日が騒がない**ものだ**。親北朝鮮政策では、騒いでいたのにな。（P37：65）

モノデハナイの用例

1. 人生は思う通りにいく**ものではない**。（P17：27）
2. 「男は格好なんかで価値が決まる**もんじゃない**。要は中身だ」という考え方はふるいふるい。（P35:52）
3. 日本では夫婦は決して愛だけで、信頼だけでつながる**ものではない**。（P35:53）
4. こんなところでこんなときになかなか食欲がでる**ものではない**。（P35:54）
5. 好きだった気持ちはそう簡単に忘れられる**もんじゃない**んだ。（P35:55）
6. 「そうですか。どなたか知りませんが、似ていて光栄ですわ」「そんなことに、光栄なんていう言葉を使う**もんじゃない**。光栄という言葉は、太子様に対してだけ、使いなさい」（P35:56）
7. 「なっ、泣くな、泣くなよ。男は泣く**もんじゃねえ**…、みっともねえや」（P35:57）
8. 彼は目頭が熱くなった。捜査官は泣く**もんじゃない**、彼は自分に言い聞かせた。仕事をするのだ。（P36:58）
9. 「ちょっと待て」父がさえぎった。「結論をそう急ぐ**もんじゃない**。ローゼンのオルガンは鉄のカーテンのこちら側じゃ並ぶもののない製品なんだぞ」（P37:66）
10. 「わしは、数学など、しとうありません。学校を辞めます」「そげなことをいう**もんじゃない**。社会へ出て、何でも役立たんものはないんじゃ。いまのうちに勉強しとかんと、あとで苦労するんじゃ。」（P37：67）
11. これですべてがぶちこわしになった。私もがまんできなかった。「そんなことは言う**もんじゃない**。腕に自信のあるのはあんただけではないんだ。」（P38：68）
12. 「そうですか。どなたか知りませんが、たか知りませんが、似ていて光栄ですわ」「そんなことに、光栄なんていう言葉を使う**もんじゃない**。光栄という言葉は、太子様に対してだけ、使いなさい」（志茂田景樹『背後霊は殺しがお好き』）（P38：69）
13. また、いつかは矮鶏の雛がやっと育ち、これからが愉しみだというのにネコに襲われ、雛を喰わえて遁走するネコを孝平が捕まえ損なって以来、庭をうろつくネコを見ると、手当たり次第に石を投げつける。母はそれを見て、お寺の坊さんも説教していただろう。生きものは苛める**もんじゃない**。無駄な殺生をするもんじゃない。（(P38：70）

14. 「ちがう。剣はひいて斬る**もんじゃない**。どんな場合も太刀すじは一直線、まっすぐです」小太郎の声がひびく。(P38：71)
15. 「洪ちゃも行く」「子供は赤ちゃんの生まれるところへは来る**もんじゃない**。おとなしく待ってなさい。」 (P38：72)
16. 恋愛はするもんであって書く**もんじゃない**。 (P38：73)
17. 酒というのは、もともと、神とともに、集団でのむものであって、ひとりでのむ**ものではない**。(P38：74)
18. 髪の毛は、人人体になくてはならない大切なもので、本来なら、人が生を終えるまで決してなくなる**ものではない**。 (P38：75)
19. 「―恋なんて、その頃にはかけらもなくて、あーあ、こんなはずじゃなかったのに、とため息をつくのがオチですわ」「恋なんてする**もんじゃない**わね」(P39：76)
20. 日本やオランダの皇太子と同じ式典やレセプション、音楽会やなんやに出るなんて事が私の身の上に起こるなんて。人生、何があるか予想がつく**もんじゃない**。(P39：77)
21. いやいやもう年寄りが車なんぞ運転する**もんじゃない**ねえ、あたしも嫁にも乗るなってね、おとりあげですよ。 (P39:78)
22. 「昨日、花の仕入れに行ってたんでしょ？ジムに電話したら吉井さん、そう言ってたから」「あ、ああ…台風の日なんかに行く**もんじゃない**よな、帰り、車、脱輪しちゃってさ」 (P39:79)
23. 「親に向かって大声を出す**もんじゃない**よ！」お祖母ちゃんも負けてはいない。(P39:80)
24. 「おいおい加藤君、あまりひとをからかう**ものではない**」 (P39:81)
25. 災難っていう奴は、いったいどこから降って湧いてくるか解った**もんじゃない**。(P40：82)
26. 当時の定価は150万円だったので、とても言えた**もんじゃない**。ところが彼女はバイクに関してはからきし知識がないので、あまり怒らなかった。(P40:83)
27. 「この大勢の人間の中の誰が闇の信徒なのか、わかった**もんじゃない**。 (P40:84)
28. 国交回復といってもなかなかすぐにできる**ものではない**。 (P108：14)

コトダの用例

1. 一番大事なことは、まっすぐに生きる**こと**だ。(山本有三『路傍の石』) (P6：3)

2. 夏はとにかくよく休みを取る<u>ことだ</u>。（P6：4）
3. ある日気づいたのは、急にお腹がペシャンコになった<u>こと</u>だ。（小出和子『おばあちゃん、お月さんきれいね』）（P8：6）
4. 自分の思い通りに他人を動かそうと思ったら、まず相手に信頼を示す<u>ことだ</u>。（P8：8）
5. 健康になるためには、食生活に気をつける<u>ことだ</u>。（P17：25）
6. 風邪を引いた時は、温かくしてよく寝る<u>ことだ</u>。（P41:1）
7. 一番良い方法は、食べ物に気をつける<u>こと</u>です。（P41:2）
8. 健康の基本はバランスのとれた食材を適切な量だけ朝・昼・晩とリズムに合わせて食べる<u>こと</u>です。（P41：3）
9. 最近、悩みがある。24 時間テレビのランナーに選ばれたため、ダイエットしなければならない<u>こと</u>だ。（P41：4）
10. ともかくも若い間は行動する<u>ことだ</u>。めったやたらと行動しているうちに機会というものはつかめる―と、亡き道三は光秀に語ったことがある。（P42:5）
11. 「――おまえにも勉強させてやりたいと思ったのだけれど、うまくいかなくって、残念だった。しかしな、愛川、学問をやることだけが大事なことじゃない。人間、何をやってもいいんだ。一番大事なことは、まっすぐに生きる<u>こと</u>だ。いいか、よく働くんだぞ。それから、からだを大切にしてな。（P43：8）
12. しかし今は仕方がないと、彼は思っていた。必要なことは、なるべく早く婚約を正式なものにする<u>こと</u>だ。要するに江藤自身が彼女の良人としてふさわしい社会的条件を身につけることだった。（P43:9）
13. 加藤はそういう自分の声を聞いた。

「いや加藤、眠ることは死を意味する。きさまの下半身はすでに凍傷になりかかっている。歩く<u>ことだ</u>。動いているうちは、お前の身体に血が流れる。だが休んだら凍る。一度停止したエンジンを動かすことは困難だ」（P44:11）

14. おれは学校騒動には加担しない。現実を大事にし、自分の立場を大事にしなくてはならない。これはエゴイズムではない。社会人としての当然の義務でもある。とにかく今年のうちに司法試験に合格する<u>ことだ</u>。そこからおれの未来は開ける。そしてこの資本主義社会のなかに一つの足場を築くのだ。そこで始めておれの発言権が認められ、社会を動かす実力が備わってくる。（P44:12）

15. ともかくも映画を見ておこうと考えて、彼はホテルを出た。そのあとで映画の所感を手紙に書いて送るのだ。しばらく康子との接触を続けて行こう。しかしあの気位の高い女は、なにか機会を見つけては男を軽蔑しようと考えているらしい。軽蔑されないためには、威厳をもって接する**ことだ**。当分のあいだ、求愛の言葉などを用いてはならない。（P44：13）
16. 私はそれに気がついたときに、まず自分は脳を変えなければならないと思った。そのためにはとにかく心地よいことを体験する**ことだ**と思った。（P45:14）
17. 真夜中、目が醒めてそれを考え出すと、わあと叫んで山間の闇を走り廻りたい衝動を感じた。だが、かろうじてそれを抑え、待つ**ことだ**と、自分に思った。（P45:15）
18. 康子がブルジョア階級に安住していられるのは、彼女の父が資産家であるという、それだけのことだ。彼女自身は特に何の価値ももたない一匹の牝であるに過ぎない。その無価値さを思い知らせる為には、賢一郎自身が司法官史の資格をとり法学博士の学位をとる**ことだ**。……それが江藤賢一郎の計画している階級闘争であり、復讐でもあった。（P45:16）
19. 現実の社会にしっかりと足をつけて、着実に生きてゆく**ことだ**、と彼は思った。（P45:17）
20. とにかく眠らせる**ことだ**と荻江は玉子酒をつくると強引にのませた。（P46:18）
21. 時間は相当かかるが、いつか子どもは何かしはじめるから、それまで親はじっと待つ**ことだ**。（P46:19）
22. ソ連が本当に日本と善隣協力条約を結びたいなら、何よりもまず北方四島を日本に返す**ことだ**。（P46:20）
23. 「要は、日本が中国の経済大国化を認め、中国が日本の政治大国化を認める**ことだ**。」（P46:21）
24. ―どうすれば早期に発見できますか。「まず、一人ひとりが乳がんに関心を持つ**ことです**。しこりなど自覚症状のない人には、自治体や企業が行う検診を勧めています。」（P46:22）
25. 福運が欲しければ、まず自分が福の神になる**ことだ**。（P46:23）
26. 会社が持ち直すには、まず円が安くなる**ことだ**。（P46:24）
27. 特に本年は「真に地域を再生するには、市町村が元気になる**ことだ**。そのことが、国を元気にする」と言われますように、地方自治体・地方議会の果たす役割は大であり

ます。（P46:25）

28. 「…だから、歌を歌うということもリーダーの大切な要件です。そのためにも、しっかり覚えておくことだ。歌というのは、こう歌うのです！」伸一は、「霧の川中島」を歌い始めた。（P47：26）

29. 「藤沢さん、ぼくにヒマラヤがやれますか」

それは藤沢久造にとってもそばにいる外山三郎にもまったく思いがけない質問だった。

「自分に勝つことだ。そうすればヒマラヤに勝つことができる」（P47：27）

30. 「君なんか一人もので自由だから、うらやましいよ。学生時代に猛勉強して合格しておくことだな。その点、おれは失敗したと思ってるよ。（P47:28）

「すると、藤沢さんはどうすればいいっておっしゃるのでしょうか」

外山三郎はやや詰問のかたちで聞いた。

「放っておくことだ。彼の芽を伸ばすには放っておくのが一番いい。ああいう大物は下手な先生をつけずに置いた方が、素直なかたちで伸びる。（略）」（P47:29）

31. 「単語が分からないときはすぐ辞書で調べるものだとよく言われるが、そうではなくて、文の前後関係から意味を判断する練習をすることだ。それが英語力をつけるコツだよ。」（P48：30）

32. 子供はひとりで川へ行ったりしないことよ。(P48:31)

33. ともかく、あなたは、ぼくとの生活をする前に自分の足でしっかり立ってみることだ。（P48:32）

34. アレルギー体質を改善するため、毎日の食事を正しくすることです。（P48:33）

35. 美しく撮るには、まず、その花が最も美しく見える角度を探すことです。（P48:34）

36. 感染の兆しを感じたら、早目に医師に相談することだ。（P49:35）

37. 先に進みたい気持ちがあるなら、時間をかけることだ。そのときが来るのを待って、丁寧に一歩ずつ進んでいくのだ。（P49:36）

38. 風邪を引いた時は、〈早く直るためには〉温かくしてよく寝ることだ。（P49:37）

39. どうして、ここまで緊張するのだろうか。とにかく落ちつくことだ。落ちついて、よく観察するんだ。（P49:38）

40. 組織を歩きまわるときは、何よりもまず、輝く保安官バッジを捨てることだ。(P49:39)

41. これは、例えば初心者がスポーツをするようなもので、最初はやり方は理論上わかっ

ていても、うまくはいかないものです。要は繰り返し練習する**ことです**。（P49:40）

42. 彼は、言葉を続けた。「戦略、戦術が必要となってくる。戦略とはなにか。まず、敵を知り、己れを知る**ことだ**。（P49:41）
43. 今、政府が検討している「介護士等の福祉」向けの要員育成だが、そんなに甘くない。非常に辛い仕事だし、大体男性がやれる部分は非常に少ないことを知っておくべきだ。役人の机上の論理に乗せられない**ことだ**。（P49:42）
44. 小泉首相は今すぐに消費税を上げるべきなのだ。ただし、そのためには国民を説得しなければならない。まずは日本国の現状を国民に正直に話す**ことだ**。（P49:43）

コトハナイの用例

1. あなたが心配する**ことはない**。（P18：28）
2. 経験からもわかるように、火星は簡単に金星になるが、金星が火星に変わる**ことはない**。（P51:45）
3. 「おじさん、ごめん」すみかはさすがに青ざめていた。「謝る**ことはない**よ。すっきりしたよ、おかげで」（P51:46）
4. 三年生といえば、ほとんどの生徒がどこかの塾へ通っているが、小百合さんは塾に通った**ことはない**。（P51:47）
5. 「お嬢さま！なにも心配する**こと**なんか**ありません**よ」（P53:48）
6. 「あやまる**こと**なんて**ない**わ。あなたがだいじょうぶなら、それでいいの」（P53:49）
7. しかし、電灯をつけてタンスのとびらをあけた拍子に、もう一つの考えが、ふいに心をかすめて通りすぎた。なにもあわてる**ことはない**じゃないか。あらためて新しく乗車券を買いなおせば、それですべてはまるくおさまるはずだ。（P53:50）
8. 「おまえが心配する**ことはない**。犯人が見つからなくて困るのはおれなんだから。」（P53:51）
9. 「なあに、おまえにしか言わない。心配する**ことはない**」（P53:52）
10. 「でも、わたし、中村さんて、ひどいと思うわ。何も牧師さまのことを、そんなふうに書く**ことはない**じゃありませんか」（P53:53）
11. しかし、電灯をつけてタンスのとびらをあけた拍子に、もう一つの考えが、ふいに心をかすめて通りすぎた。なにもあわてる**ことはない**じゃないか。あらためて新しく乗車券を買いなおせば、それですべてはまるくおさまるはずだ。（P54:54）

12. まもなく五十歳に手の届く娘ともしょっちゅうやり合っているが、なかなか譲らないとこぼしながらも顔は笑っていた。わたしはなにも困る**ことはない**じゃないかと思い、“よろしかったですね”と合の手を入れて次を待つ。(P54:55)
13. 子供じゃないんだから、いちいち報告する**こともない**でしょう。(P54:56)
14. 何も家主の私だけが、あんたの不幸の責任を負わされる**ことはない**でしょうが。。(P54:57)
15. しかし、人口わずか600万人の香港人が日本人より豊かな消費生活を送ることができている（3章参照）のだから、日本人が人口減少を心配する**ことはない**。（P54:58)
16. 逆に、酒や飲みもの類あそこまでいちいちスチュワーデスがサービスする**ことはない**。いくつかの外国航空会社がしているように、ギャレーの一部を機内二四時間バーにしておいて、飲みたい客はそこに来て立って飲ませるようにすれば、移動したいという客側の要求に答えることにもなるはず。（P54:59)
17. 「あの、なにか」「えっと、えっとですね…三津木先生の彼女でいらっしゃいますか！」案内カウンターの方で、ぷっと吹き出す声がしました。そりゃあおっしゃる通り、新哉の彼女には違いないけど、なにも公共の場所で、それも目一杯大声をあげる**ことはない**じゃないの！(P55:60)
18. 「このお米は無洗米だから、改めて洗う**ことはない**んだよ。」（P56:63)
19. 「成人すれば自分の意志で結婚できるんだから、いちいち両親の許しを得る**ことはない**のに」(P56:64)
20. 「何も驚く**ことはない**。このようなすばらしいところに寝起きできることを喜んでいるのだ」（P57:65)
21. 「先生がついていれば、誰も恐れる**ことはない**。いままでどおりに勉強し、学校に行くんだよ。」（P57:66)
22. でも、タイガーシャークの部下の中ではいちばん弱いので、あわてる**ことはない**。(P57:67)
23. もちろん、「早く見つけなければ」と焦る必要はないし、すぐに新しい生き方が見つからないからといって落ち込む**こともない**。（P57:68)
24. 危機的状況は想定済みで、焦ることも、怒る**こともない**、ここまで来たのだから、ここから脱するに必要なことを考えればいい。（P57:69)
25. 一日遅れて、クマに宛てたべつの手紙が届いた。文面はほとんど同じだった。同じこ

とを書くなら、べつべつに宛てる**ことはない**のにと、板垣は笑った。（P57:70）

26. 「ああ、そうだわ…。すみません、こんな―」「あなたが謝る**ことない**わ。あとで傷はちゃんと病院で診てもらうから。―誰が撃ったか、見た？」（P57:71）

27. 女は、ぐったり、それっきりまた黙りこんでしまう。

「どうした？言いかけたことを、途中でやめる**ことはない**だろう！（略）（P58:72）

28. 「よせよ、なにも弁解する**ことはない**。ほかの連中よりもおれを信用できるという理由はどこにもないんだからな」（P58：73）

ワケダの用例

1. （窓が開いているのに気付いて）なるほど、寒い**わけだ**。（P8：11）
2. （かぎが違っていることに気づいて）道理であかない**わけだ**。（P63：7）
3. 駅前電光掲示板に、台風が接近している旨のニュースが流れていた。なるほど、道理で風がつよくなってきた**わけである**。（P63:8）
4. いってみれば、列車そのものがパッケージ・ツアーという特別列車なのである。道理でトーマス・クック国際時刻表には出ていなかった**わけだ**。（P63:9）
5. a「重役の？」

   b「そうなのよ」

   a「どうりで、われわれとは違う**わけだ**わね」サワ子が苦笑いを泛べた自分の顔を鏡にうつしながら、どこか自棄っぽい口調で云った。（P63：10）
6. 「黙れヨ、ベティ。どんな理由で誰を愛そうと、ボクの勝手だ」「なるほど。マジで愛しちゃってるのね。どうりで最近、カイがぷりぷりしてる**わけだ**わ」（P63:11）
7. 小澤 九ヵ月上なんですか。大江 正確には、七ヵ月ちょっとのはずですよ。小澤 それじゃ、もうすでに六十五歳になっとる**わけです**ね。（P64:12）
8. 左側の悪魔が、にやっと笑っていった。「それで、悪魔の君たちが、ここへやってきたということは、私になにか用がある**わけだ**ね？」（P64：13）
9. 「明日の九時からです。明朝また来てください」

   「つまり、もう終わった**わけです**か」

   「そうです」女子職員は計算機が示した総額を、メモに書き記した。（P64：14）
10. 「他の二人より前に？」「いえ、その間でした」「つまり、二番目だったという**わけだ**ね」（P64：15）

11. 「あなたはどこの山岳会ですか」パーティーのひとりが聞いた。

「どこの山岳会にも入ってはいません」

「すると、全くの単独行主義って**わけです**ね、遠くから、来たんですか」（P64:16）

12. イギリスとは時差が8時間あるから、日本が11時ならイギリスは3時な**わけだ**。（P65:17）

13. フランスの香水は葡萄酒のアルコールの原料から造るのだから酒と香水は同家族の**わけだ**。(P65:18)

14. 一匹の牝が一度に五匹の子を生むとすれば、春までに地下組織のメンバーは秋の五倍の数にふくれあがる**わけだ**。（P65:19）

15. 「《あさかぜ》が十五番線のホームにはいってくるのは、十七時四十九分で、発車は十八時三十分です。四十一分間ホームに停車している**わけです**」（P65:20）

16. 「乗船客名簿は、甲・乙両方に名前住所を書きます。駅ではこれを切り離して、甲片は発駅に保存、乙片は船長が受け取って到着駅に引きつぐのです。だから函館駅にもある**わけです**」（P65:21）

17. （ＣＣＭ３）が完成したので、第一話や第二話の中でご紹介した大気・海洋結合モデルによる温暖化予測計算が可能になったといっても過言ではありません。しかし、その反面、台風等の変動が極端に少なくなってしまったという困った問題も生じてしまった**わけです**。(P66:22)

18. ゼロ税率導入のすすめ　消費税をアップするということは、すなわち物価をあげてコスト高、経済の構造改革にブレーキをかける**わけです**。(P66:23)

19. 「人間というのは、なぜかいったんカネを遣い始めると、習慣になってしまう。例えばブランド品。一つ買うと、すぐ別のが欲しくなる。で、また買うと、さらに別のが…。要するに、キリがない**わけだ**。」(P66:24)

20. だれだって、おいしいものはお腹いっぱい食べたい**わけで**、「ここでやめよう」と食欲を抑制して、副作用がないようなものがでてくればいい。（P67:25）

21. 何しろ入学から卒業六年間通う**わけだ**から、自宅から十分で行けるというメリットは大きい。（P67:26）

22. 通常は、署名で手紙は終わる**わけだ**が、そのあとで何か思い出した時には、Ｐ．Ｓ．（＝postscript「追伸」）として書きそえる。（P67:27）

23. 第三章でも書きましたが、郊外の幼稚園では、近くの森に散歩に出かけることはご

く日常的に行われています。これが森の幼稚園では毎日のこととなるわけですが、毎日新しい発見があり、森に暮らす小動物の息づかいや、木々や草花の変化に子供たちはアイデア豊富にいろいろな遊び方を発見するようです。（P67:28）

24. ただいまの点でございますが、先ほど大臣からお話があったわけですが、備蓄政策の面から言いましてこのような方法でもって通産当局の方においてやっていくというような線が仮に出ますならば、それに呼応する安全、保安面に対応して考えていく必要があると思います。（P67:29）
25. たとえば婦人で顔がのぼせて足が冷えるという状態のとき、加味逍遥散という薬があるわけですね。使用目標の中に、「これは上に熱がいって下が冷えているときのに使う薬ですよ」というのが最初からあるわけです。」（P68:30）
26. で、このエレクトロニクスは、付加価値は非常に高いわけです。で、したがって、値段も非常に高いわけですが、一方、製品が小さくて軽いために、このコストに占める輸送費のウェイトというのは、それほど高くないわけです。（P68:31）
27. 僕は監督になっても、やはり攻める野球をしたいわけですよ。バットでガンガン、相手チームをたたいて生きてきた人間です。攻めて攻め抜いて投手陣を助ける「攻撃野球」をやりたい。その点で長嶋（茂雄）さんに近かったと思う。（P68:32）
28. 大雪が降ったから、バスが不通になったわけだ。（P70:33）
29. 大雪が降ると、バスが不通になるわけだ。（P70:34）
30. バスが不通になった。大雪で通れないわけだ。（P70:35）
31. 10年ぶりの大雪だったそうだ。バスが不通になったわけだ。（P70:36）
32. バスが不通になったということは、歩いて行かなくちゃいけないわけだ。(P70:37)
33. バスが不通になったわけだから、集まりに来る人も少ないはずだ。（P70:38）
34. コンピュータなんて昔は存在しなかったわけだから、なければないですむものかもしれない。（P74:64(a)）
35. 彼は怪我をしたから、今日の試合に出ないわけだ。　（P81:84）

トイウワケダの用例

1. 大雪が降ったから、バスが不通になったというわけだ。（P70:39）
2. 大雪が降ると、バスが不通になるというわけだ。（P70:40）
3. バスが不通になった。大雪で通れないというわけだ。（P70:41）

4. 10年ぶりの大雪だったそうだ。バスが不通になった**というわけだ**。（P70:42）
5. バスが不通になったということは、歩いて行かなくちゃいけない**というわけだ**。（P70:43）
6. バスが不通になった**というわけだ**から、集まりに来る人も少ないはずだ。（P65:35）
7. それをきっかけに、その後維持活動（PKO）」として自衛隊法が改正され、海外の紛争地などに出かけるようになったが「危険な地域には入らない」という位置づけである。「戦争に巻き込まれるから」**というわけだ**。（P71:45）
8. そうすれば、近い将来、本当に赤い糸らしきものが出会わせてくれるというのだ。これを“赤い糸たぐりよせ作戦”という。信じれば、奇跡は起こる、**というわけだ**。(P71:46)
9. 去年はそれを現地で取材することになったんですわ。みなさんのお金がこんなふうに使われています、というところを、実際の映像で見せよう、**というわけです**わ。(P71:47)
10. 「江戸前のすし」は江戸の前の海でとれた新鮮な魚のすし、**というわけだ**。(P71:48)
11. アメリカが主張しているのは、輸入数量制限など関税以外の措置をすべて廃止し、その分、高い関税をかけてもいいというもので、これを関税化というんだ。でも、一部は低い関税にしなさいと言っていて、低い関税を割り当てる枠をミニマム・アクセスということもある。アメリカの主張では日本のコメの場合、国内需要の三％でスタートし、十年後に五・二五％まで拡大しろ**というわけだ**。(P71:49)
12. 要するに、山本五十六は本気で戦争をしていない。陸軍と戦争している。陸軍に責任転嫁するために、艦砲射撃をしてこい**というわけだ**。（P71:50）
13. 大容量のデータ送信が可能なCATV網を使い、プレステやプレステ2のゲームソフト、さらには音楽や映像などのデジタル・コンテンツの配信を行なっていこう**というわけだ**。（P71:51）
14. 檻に入れられて展示されている生きた動物を見れば、客は素材の新鮮さに疑いを持つまい**というわけだ**。（P72:52）
15. 事前に気狂いの汚名をわたしにおっかぶせておこうというのだ。将来食っても、無事安泰であるばかりか、有難がる人も出てくるだろう**というわけだ**。（P72:53）
16. 万引きをしても、見つかった時にお金を返せばいいんだろうとか、品物を返せばいいんだろうとしか考えていない中学生、高校生が増えてきている。そういう親が増えてきている。万引きをして見つかった。元の所へ返せばいいでしょう**というわけです**。または、万引きをして食べてしまった。（P72:54）

17. A：川本さん、車大きいのに買い替えたらしいよ。

B：へええ。子供が生まれて前のが小さくなったっ**てわけ**か。（P72:55）

18. 「いや、他の営業部門でもやりたい案件はたくさん持っているから、各営業部の部長クラスは反撥するだろう、それを無視して、常務、専務クラスだけを納得させても石油開発は息の長い事業だから、一、二年すれば必ず、非難ごうごうのゲリラ戦になり、社内で潰されてしまう、そこの対策も併せて考えるのが、今日のシンガポール会談です」「なるほど、シンガポールから、東京丸の内本社の攻略作戦を考える**というわけです**か」（P72:56）

19. a「では、鬼舞い連の現在の正式な人数は？」

b「ちょうど三十名」

a「ということは、この鬼哭の里の農家数は三十戸**というわけです**ね？」（P73:57）

20. 電流量（Ａｈ）とはバッテリーの容量を表す数値。読み方は「アンペアアワー」。この値が大きければ大きいほど、バッテリーの容量が大きい、つまり長時間使用できる**というわけだ**。（P73:58）

21. 「朝一番の博多発のひかりは、九時十五分にしか大阪へ着かないけど、岡山まで行っておけば、岡山からは、六時ちょうどにひかり100号が出ているわ。これに乗ると、新大阪着は六時五十八分。三十分あれば空港に行けるので、八時に大阪空港を発って松山へ八時五十分に着く飛行機にゆうゆうと乗れるでしょう？」「なるほど。博多―岡山―大阪―松山**というわけです**ね。これなら可能ですね」（P73:59）

22. 「（略）あなたが仁科家に入りこめば、あたしも生まれ変われる。太陽がいっぱいの場所に出られるのよ」そして彼女は自分が入れた茶を飲んだ。それを見てから、拓也はワイングラスを手に持った。「なるほど、太陽に乾杯**というわけだ**」（P73:60）

23. 「生まれたのは、その翌年ですが…」「そうか―なるほど…。まるきり戦後っ子**というわけ**か…」大田原顧問は、感心したようにうなずいた。（P73:61）

ワケデハナイの用例

1. 花子が来るからといって、太郎が来る**わけではない**。（P18：30）

2. 名門校には入れたからといって、その後に順風満帆の人生が待っていた**わけではありません**。（P76:66）

3. しかし、どんなに記者が他社よりも早くニュースをとってきても、それだけでただち

に新聞が読者の手もとに届くわけではない。（P76:67）

4. 戦争は武力によって相手国を屈服させ、自国の意思に従わせることを目的とする。だから、国家は戦争には勝たなければならない。しかし、勝つためには何をしてもよいわけではない。（P76:68）

5. 日本は十八歳から二十三、四歳で最終学歴を卒業、二十五、六歳で結婚という形が一般的だが、誰もが同じように成長するわけではない。大学を卒業して何年もたってようやく自分の進む道が見えてくる人もいるのだ。（P76:69）

6. 旧禄復帰の沙汰を小柳に知らせるのは礼儀だが、文四郎はそれだけで来たわけではなかった。知らせておけば、そのことはいつか江戸にいるおふくろの耳にもとどくだろうと、文四郎は考えていたのである。（P77:70）

7. 彼は四十代の半ばになって、初めて二週間ばかりをパリで過しているのだった。仕事があるわけではなかった。こういう呑気な時間を過せるとは思ってもみなかったのに、機会は不意に来た。（P77:71）

8. 八雲は、ぷいと横を向く。
しかし、本気で怒ったわけではない。ただ、この子は、好奇心が、並外れて強いだけだと思った。（P77:72）

9. そこで吉宗は、「幕府政治を、幕府の創始者、神君家康公のむかしに戻す」と宣言した。つまり、おれの改革政治は、五代将軍綱吉公の政策に反対するわけではない。（P78:73）

10. 描写は、描写されたものが本当だとしてだましたり、完全な幻影を導くのが問題なのではなく、描写という事実のみが残る、すなわち演じられたという、把握可能な事実が残るのであって、演じられた内容が残るわけではない。（P78:74）

11. 「京成は国立でしたね」
「ですから選考の中心も学長でしょうが、でも学長一人で、すべてを決めるというわけでもありません。」（P78:75）

12. 娘は二人とも正月用の晴着を着ていた。二人ともとくに美人というわけではなかった。（P79:76）

13. 「テニス、お上手ですね。よくなさるんですか。」
「いや、そんなにしょっちゅうするわけじゃないんです。」（P79:77）

14. 抗生物質には細菌を殺したりその繁殖を阻止する働きがある。ただし、すべての病原

体にたいして抗生物質がある**わけではない**。（P79:78）

15. ポランニーは近代社会において交換が支配的な経済活動になったことを認めるが、かといってそこで贈与がすっかり失われたとする**わけではない**。（P79:79）
16. ローンの分担金にしても、全員が同じ金額を負担していた**わけではない**。妹たちよりは兄たちが多く負担する。（実著者不明『親が子に望んでいること子が親にできること』）（P79:80）
17. 去年まではエアコンなんて午後の一番暑い時間帯になるまで我慢してたし、そうでなければ図書館にでも行って涼むという感じで過ごしていた。別に特別貧乏だった**わけじゃない**けど、何が起こるかわからない母子家庭に贅沢は敵。（P79:81）
18. この店がいつも客がいっぱいだが、だからといって、特別に料理がうまい**わけではない**。（P82:87a）
19. 彼女は彼がお金持ちだから結婚した**わけではない**。（P82:88a）
20. 子供だからといって、何をやっても許されるという**わけではない**。（P103:3）

ワケガ/ハ/モナイの用例

1. 彼は今日のパーティーに来る**わけがない**。（P18：29）
2. 彼は怪我をしたから、今日の試合に出る**わけがない**。（P80:82）
3. 知っていた**わけがない**。ぼくたちだって、数時間前にユイから聞かされたばかりの情報だ。（P80:83）
4. 「あのひと、自分で飲みながら商売してたんだから、もうかる**わけ**なんか**ない**けどね」（P81:85）
5. ガーゴイルの鼻の下には口がある。犬の形をしているのだから当たり前だ。だが、口に穴は空いていない。石像なのだから当たり前だ。食べられる**わけ**など**ない**ではないか。（P81:86）
6. 「あなたもいつか、わたしに飽きるでしょう」
   「そんなことはない。これだけ好きなのに、飽きる**わけがない**だろう」（P83:89）

ハズダの用例

1. 天気が悪かったら、運動会が中止になる**はずだ**。（P8：10）
2. 十年以上も看護婦をしているから、人間社会の裏面はおおかたしりつくしている**はず**

だ。(P85:1)

3. 最近はウェブサイトで情報収集ができるから、きっとちょうどいいレースが見つかるはずだ。 (P85:2)
4. これだけ暗いんだ。おそらく、何も見えないはずだ。(P85:3)
5. 「…人間、草の根食ったって、ひと月やふた月は生きられるはずだ。」(P86 : 4)
6. 料理人が新しいメニューを考え出す時には、きっと頭の中で簡単なシミュレーションをしているはずだ。 (P86 : 5)
7. 正さんは、この日記を読みなさいと、私に手渡したわけではない。どんな人間の心のなかにも、人に知られたくない一面があるはずだ。(P86:6)
8. 「帰りの船もきめてしまった。あと百四十三日で神戸につくはずだ。」 (P86:7)
9. 十二時二十分。予定では、シンヤの乗った飛行機はすでに着陸しているはずだ。(P86:8)
10. 百坪ほどの敷地に建てられた、これといって特色のない家だった。通夜のときの 記憶では、一階に十五畳のリビングがあって八畳の和室と接しているはずだ。(P86:9)
11. 「夜分、お邪魔していました、山脇さん」主婦たちのリーダー格の女が言った。隣組の班長の家庭の主婦だ。山口松子という名だったはずだ。(P86:10)
12. (いつも成績がいい彼はクラスで最低点数を取ったと聞いて)彼の成績はもっといいはずだ。 (P87:11)
13. 伸子は気疲れがでた故か、毎朝床離れが辛かった。十分眠ったはずなのに、目が覚めても筋肉が弛緩しているのを感じ、背中がベッドに張りつたように起き上がり難い。(P87:12)
14. 翌三日、本来の予定ならば民政党は田中内閣打倒大会を開催するはずだった。しかし、急遽浜口内閣祝賀大会になった。 (P87 : 13)
15. 「あっ、さいふがない！たしか、ここにおいておいたはずだが…」 (P87:14)
16. 昼間の記憶では、もっと傾斜がゆるやかだったはずだが、こうしてみると、 ほとんど垂直にちかい。 (P87:15)
17. というのは(このことは最初に書いておくべきだったが)、ぼくはこの夏、カリフォルニア大学に留学することになっていた、そして渡航はほんとうなら先月末のはずだったが、ぼくの場合、ヴィザの問題をめぐってトラブルがおこったために、いまだにぼくは宙吊りのままになっているありさまだった。 (P88:16)
18. 「いい加減にしてくれ！これ以上話しかけるな！私を面倒に巻き込むのは、これがは

じめてじゃないことは、君自身よく知っている**はずだ**。私は、自分自身のことで精いっぱいなんだ。子供に付き合っている暇なんかない！（P88:17）

19. 「昨日、大橋さんという人からまたお手紙がきていたわね。おまえは私と約束したはずよ。あの人とのお付き合いはやめる**はずだった**でしょう。」（P88:18）

20. 「お祖父様」

 真鳥がびっくりして振り返る。

「ここへ来てはならんと、言っておいた**はずだ**ぞ、真鳥」

聡一郎は厳しい表情で言った。（P88:19）

21. 娘の家で手料理をごちそうになっていたということなのだ。道理で、帰ってくるのが遅いはずだ。おかわりもしない**はずだ**。　（P89:20）

22. その時間に突如覚醒したことを、話した。

「そうだったのか。やっぱりなあ。道理で胸騒ぎがした**はずだ**。電話をすればよかったね」（P89：21）

23. 再び流れるような動きで材料を入れ、先刻と同じように美しい姿勢でシェーカーを振り始める。林道が思わず呟いた。「なるほど、女性に人気がある**はずだ**」林道の言葉に笑いながら、がカクテルグラスにギムレットを注ぐ。（P89：22）

24. 「いやだったら。わあ、穢い」「そりゃ酒臭い**はずだ**ろ、だってそいつが二日酔の正体なんだから。」（伊丹十三『女たちよ！』）（P89:23）

25. 「ずいぶんお上手でいらっしゃいますのね。よっぽどお習いになりましたの？」

「いいえ、わたくし、やる事はあの、前からやっておりますけれど、ちっとも上手になりませんのよ、不器用だものですから、……」

「あら、そんなことはありませんわ。ねえ浜さん、あんたどう思う？」

「そりゃ巧い**はずです**よ、綺羅子さんのは女優養成所で、本式に稽古したんから。」（P89:24）

26. もう春だというのに、まだ一面に雪が積もっている。それもその**筈**、ここは北アルプスの山腹である。（P90:25）

27. こんな難しい問題は、小学生には分からない**はずだ**。（P91:29）

28. しかし本当はどの程度まで嗅ぎつけたのか。アニタにはかつて一度も会っていない**はずだ**。それは明瞭な事実だ。（P92：30）

ハズガ/ハ/モナイの用例

1. この場合のような、だれが見たって、不都合としか思われない事件に会議をするのは暇つぶしだ。だれがなんと解釈したって異説の出よう**はずがない**。（P6：5）
2. （空を見上げて）雨が降る**はずがない**。（P18：31）
3. こんな難しい問題は、小学生には分かる**はずがない**。 （P91:26）
4. しかし、われわれが歩いているとき、転倒しないために意識して頭を働かせているだろうか？決してそんなことを考えながら歩いている**はずがない**。（P91:27）
5. ドイツ海軍、というかヒトラーは「大戦艦ビスマルクを沈められて」以来、「海に浮くモノ」を信じられなくなった。加えて、「まさかアメリカが参戦する**はずがない**」と固く信じていた。（P91:28）
6. （いつも不合格な彼が、期末テストで満点を取ったと聞いて）うそ？彼が満点を取れる**はずがない**よ。（P92：31）
7. 「よくもわたしに向かって、静かになんて言えるわね、このクソったれ！百万ドル以上もする宝石が盗まれたのよ！」「こんなこと、起こる**はずがない**のに！」アルベルト・フォルナッティが憤然として言った。（P92：32）
8. 待合室へ走りこんできたわたしが見えなかった**はずはない**のに、女は知らん顔をして窓口を閉めた。（P92：33）
9. 先生自身の経験を持たない私は無論其処に気づく**筈がなかった**。（P93：34）
10. これじゃ落ち着いて勉強できる**はずがない**。ひどい騒音だもの。（P93：35）
11. （まずいと評判の、客の来ないレストランの料理を実際に食べて）
    なるほど、この味じゃ、お客が来る**はずがない**。（P93:36）
12. むろん食物も食べるから毎日三〇〇〇カロリー近く食べていたことになる。これでは痩せる**はずがない**。太るのが当然である。（P93:37）
13. 冷蔵庫の中身も、たらの子・すじ子・つくだ煮というものでした。これでは食欲が出る**はずがありません**。体によいはずがありません。（P93:38）
14. あのひとがわたしになにも告げることなく、去っていく**はず**など**ない**。（P94:39）
15. シャンパンに比べて安価に違いないヴァン・ムスーが、シャンパンよりうまい**はず**なんか**ない**じゃないか。（P94:40）
16. そんな**はず**はたしかに**ない**。しかし、ここで見られることは、物言わぬけものにしても世界の魔性を本能的に知覚するという事実である。（P94:41）

17. 弥生時代にはまだ国家がないのだから、国境もあろう**はずがない**。(P94:42)
18. 出産や育児のために、女性たちが休職することに問題があろう**はずはない**。(P94:43)
19. とはいえ、11 人もの家族を養っているパパに、カネなどあろう**はずがない**。(P95:44)
20. よって、胤度にはもはや子のあろう**はずはない**。 (P95:45)
21. よくよく考えてみれば、このような、古埃を被った商店街に、デザイン用品を商う店など、あろう**はずもない**。(P95:46)
22. これ以上、人間たちの間で暮らさせることは、彼女にとって幸せである**はずがない**。(P96:47)
23. それはないですね。うちの番屋付近は『国有地』となっているので、アイヌ共有地である**はずはない**ですね。」 (P96:48)
24. オンネベシは文四郎につがれた酒を、ぐびっと、らんぼうにのんだ。うまい酒である**はずもなかった**。(P96:49)

ハズデハナイの用例

1. （起動スイッチを押しても起動しない機械を前にして）おかしい。こんな**はずじゃない**。(P18：32)
2. 昭和三〇年代に結婚した当時は、明治生まれのしっかりとしたしゅうとめのもとで、嫁は一つの機械、働くものというような雰囲気で、「こんな**はずじゃない**」という思いをずっともっていました。(P96:51)
3. ―おかしい。こんな**はずじゃなかった**のに。
   それからの展開も、予想外だった。(P96:52)
4. 「こんな**はずではなかった**のに」と後で後悔しないためには、事前の検討を十分に行うことが大切です。(P96:53)
5. 浜の停車場の小さいのに驚き、汽車の小さいのに驚き、銀座通りの家屋の低く粗末なのに驚いた。こんな**はずではなかった**という気がした。これはだれもよくいう事である。(P96:54)
6. 「今になってみると、よくここまで来たものだと思えてならないわ。私こうなる**はずじゃなかった**んですもの。自分の気持ちがはっきり見えるのよ。」庸三はその瞬間はっとした。(P97:55)
7. しかし、誰にもそれとわかる一つの変化は意外に早くきた。大正九年五月十日の総選

挙に、予想を裏切って楡基一郎は落選したのである。この年、選挙は行われる**はずではなかった**。新年早々新装なった壮麗な国技館、もはや雨天順延などということのなくなった国技館の桟敷を持った基一郎は、養子を未来の横綱として送りこんでいることもあって、上々の機嫌で客を招待したものだ。ところが片方では普選要求の声が激しくなっていた。普選を迫る民衆は演説会を開き、示威行進をし、衆議院、首相官邸に殺到した。この圧力に堪えかねた原内閣は、二月末、急転直下衆議院を解散したのである。(P97:56)

8. 彼はまだそれほど強くなかった。だからまだ合宿に参加する**はずではなかった**という。けれど彼が自ら、合宿に参加したいと願い出たのだ。(P97:57)
9. 車夫は心得て駆け出した。今までと違って威勢があまり好過ぎると思ううちに、二人の俥は狭い横町を曲って、突然大きな門を潜った。自分があわてて、車夫を呼び留めようとした時、梶棒は既に玄関に横付になっていた。二人はどうする事も出来なかった。その上若い着飾った下女が案内に出たので、二人は遂に上るべく余儀なくされた。「こんな所へ来る**筈じゃなかった**んですが」と自分はつい言訳らしい事を云った。(P97:58)
10. ボールに手は当たらないし、当たったかと思えば変なところに飛んでいくし・・・本当はこんな**はずじゃない**のに ！それなのに、サーブだけは妙に調子がいいとう矛盾wはい、４つ目。(P98:60)
11. 基本的に「文化が違う＝言葉が違う」ことを忘れずに。教職員のニーズをしっかり聞き取ることが大切となる。着任当初はお互いに「こんな**はずではない**！」という思いを抱くことは多い。(P98:61)
12. 玄関から上がる。客部屋畳が積み上げてある。その畳を二枚、床板の上に敷いた。女はその上にあがって帯を解きはじめる。

    「どうぞ、あなたも」と言った。娘である**はずではない**。もう二十歳を過ぎている。人の妻でもない。(P99:62)
13. 彼は今日来る**はずではなかった**。(P100:64)